

---

# いつかの君とどこかの僕

密室天使

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつかの君とどこかの僕

### 【Nコード】

N5175X

### 【作者名】

密室天使

### 【あらすじ】

瀬戸内海を臨む村落、草薙村に居を構える主人公は、ひよんなことから少女に交際を申し込まれる。その瞬間、主人公の騒乱と歪みを抱えた日常がスタートすることとなる。さしずめ、これらの異常は主人公にとっておあつらえ向きの日常だったのか？ 人の弱さと醜さが炸裂する、時限爆弾式恋愛小説。

## 第一話（前書き）

楔<sup>みそぎ</sup>……神道や仏教で自分自身の身に穢れのある時や重大な神事などに従う前、又は最中に、自分自身の身を氷水、滝、川や海で洗い清めること。仏教では主に水垢離<sup>みずこじり</sup>と呼ばれる。

## 第一話

武者絵のぼりが飾られる五月はとくに過ぎていて、いつの間にか気の滅入るような梅雨が終わっていた。

七月。

別名を文月と言い、旧暦で言えば秋に当たる。

六月から残留する湿っぽさがなくなり、代わりに酷暑を予感させる砌。<sup>みぎり</sup>

開放された縁側からは、露に濡れた鬼百合が見えた。どこか饅え<sup>す</sup>たような、草木の装いをした香りが風に乗って流れてくる。

夕刻。

西日に照らされた室内。淡いオレンジ色が窓ガラスに透けて、そこから椋鳥<sup>むくどり</sup>の囀りが聞こえてくる。

「お兄ちゃんはお夕飯、酢豚でいいかな？」

お盆を持った葵<sup>あおい</sup>が、テーブルの前に来る。お盆の上には雫で濡れた麦茶が乗せられていた。葵は慣れた手つきで茶の入ったコップを配膳する。

「いいと思うよ、酢豚」と返答して、「ありがとね」と礼を言い、テーブルに置かれた茶を飲んだ。清涼としたものが喉元を過ぎていく。

「お兄ちゃん、酢豚好きだもんね」と嬉しそうに笑って、自分の分の麦茶を飲んだ。そのまま僕の向かい側のソファに腰を下ろす。

その拍子にさらさらと、セミロングの髪が揺れた。

「酢豚はいいよ。野菜も肉も入ってて、健康にもいい。何より、おいしいじゃないか」

「それはお兄ちゃんの好みだよね」と正論を述べる葵。「まあ、私も好きだけど、酢豚」

「後、語呂もいい」

「お買い物行ってくるから」

「行つてらっしゃい」

「台所のおやつは夕食飯が終わつた後に食べるんだからね」

「食べないよ。意地汚い」

「けど、お兄ちゃん、昨日、食べてたじゃん」

「あれは不可抗力だった」

「お兄ちゃんはいいいよね。いっぱいおやつ食べても太らないし」

「それはおまえも一緒だと思つけどね」

「そんなことないよー。私にとっては本当に死活問題なんだからね、それ」

葵はお腹に手を当て、思い悩むような表情をした。そのままリビングを抜けていく。どうやら話題に体重の話が出たからか、そちらの方を気にしているらしい。けど少なくとも僕の目から見れば、葵は痩せているほうだ。それも身長が百六十センチと、女の子にしてみれば長身な方だから、スレンダーに見える。今のままでも十分魅力的だと思つただけだ。

葵が出してくれた麦茶を飲み干した僕は、だらりとソファでへたれた。へたれることが好きな僕は、いつもこうしている。そして、決まって葵に小言を言われる。

瑞垣のような塀の向こうから、夕空と、赤みがかつた日輪が見える。その下部には魏々たる大山が頂を覗かせていた。

そんな華美で柔婉な光景を見て、こうやって一日が終わつていくんだなあと思つた。

まだ自己紹介がまだだったね。僕の名前は紅花楔。<sup>へにはなみそぎ</sup>自宅から一キ

口くらい離れた公立高校に通ってる。歳は十六で、高校二年生。一つ下の妹がいる。両親の方は、十年前に父親が交通事故で他界。母親は僕が八歳の頃に行方不明に遭ってる。以後、親の遺産と生活補助を受けて、僕と妹だけの二人暮らし。一応祖父母の了解を貰っている。学校側もこれを公認している。また、家計が苦しいときには祖父母がある程度工面してくれるので、衣食住に不自由しないくらいには、生活は豊かだ。

とまあ、経歴や来歴は非凡ではあるけど、風体や身なりにこれと言って特筆すべき点はない。父譲りの細長い目と、母譲りの小さい鼻。よく顔が小さいと言われるけど、身長は結構高い。百七十センチ前後と言ったところ。痩せぎすで、子供のころは、赤いコートを愛用していたからか、周りにニンジンと呼ばれていた気もする。それと、髪の毛を銀に染めている。

葵は死ぬほど料理が上手い。人としての枠を超えている。ミッシュランの三ツ星を賜ってもおかしくないくらい上手い。

それは一重に、紅花家の家庭事情が影響しているのだと思う。葵は我が家の家事洗濯の一切を請け負ってくれている。その中には勿論、調理も含まれていて、僕の分の食事まで作ってくれる。それはすごくありがたいことで、常々感謝しているんだ。

だからか、葵のおかげで生計が成り立っていると言っても過言ではない。我が家の方便たすきはほぼ妹が掌握している。

一方の僕はアルバイトと言う形で、紅花家に貢献している（つもり）。新聞配達と言う簡単なものだけど、それのおかげで祖父母の

不要な扶養を受けずにすんでいるとも言える。妹もある程度は感謝して いるのかどうかは分からないけど、まあ生活の足しくらいにはなってるんじゃないかな、くらいには思う。

総じて紅花家は嬪天下かかあてんかともいえる様相を呈してはいるが、妹の葵は謹厳実直で謙虚な子なので、一方的な独裁政権は樹立されていない。一応、僕と葵は対等な関係にある（のだと思う）。

それでも日々の雑多な仕事を葵に押し付けていることに変わりはない。なので、僕の心情を言えば、肩身が狭い。一人の男として、女性に負担を強いるのは僕の望むところではないのだ。

「お兄ちゃんは今のままでいいんだよ。ずっと、ずっと、私が養ってあげるから」

そんなことを夕餉の膳で滔々と垂れ流していた僕に向けて、妹は言った。

目の前には酢豚を含む手料理の数々。香ばしい匂いが食卓を包みこむ。

妹は水晶玉のように透明な目で僕を見た。食べ物を使った後だからなのか、喉が隆起している。その生物的な動き。

「お兄ちゃんはここにいてくれるだけでいいんだから。私はそれで満足。お兄ちゃんもそれで満足。お兄ちゃんも今の生活に不満はないよね？ だったらそれでいいと私は思うんだ」

葵の持っていた箸が酢豚の肉に突き刺さる。繊維の切れる音がして、二つに引き千切られる。

凜然とした瞳。濡れたような柳眉。整った面容。小ぶりな唇。並びのよい歯。それが酢豚の肉を噛み砕く。

「ていうか、お兄ちゃんは今の生活に責任感じすぎ。今も昔もこんな感じだったよ。私のご飯作って、お兄ちゃんが新聞配って、それで一日が終るって感じだったじゃん。だから、お兄ちゃんは今のままでいいの」

葵はにっこりと花開いたように笑って、「ほら、箸が進んでないよ」とご飯を食べるよう促した。

僕は変な違和感を感じながらも、「そうだね」と頷いて食べることに専念した。

テーブルに向かい合う、僕と葵。四つある椅子のうち二つは僕たちが使っていて、残りの二つは空席。

それに一抹の寂寥感を覚えながらも、「そういえば葵」と声をかける。「部活のほうは、もうそろそろ試合なんじゃないっけ?」

「うん。一週間後に遠征するんだって」

「どこの方に?」

「確か隣町の商業高校だったと思う」と顎に人差し指を当てる葵。

その後、期待したような上目遣いを向けた。「もしかして……その、見に来てくれるの?」

僕は難しい顔をした。「どうだろう。朝夕の新聞配達がかぶってなければいいけど」

葵はしょぼくれた口調で、「ごめん。無理言っつて」と低い声で言った。

なんだか悪いことをしたような気になってしまった僕は、「そんなことないよ」とすかさずフォローを入れた。「葵は葵で部活、がんばってるんだなって思っつて、お兄ちゃんは誇らしいなと、そういうこと。しっかりダンクシュート、決めてきてよ」

「……私、ポイントガードなんだけど」

葵は困ったような嬉しいような表情をして、キャベツを口に含んだ。

「そこでオレは言っつてやっつたんだよ。パンがなけりゃ、ケーキを食



その分、相原は絶望的なまでに理系がいい。特に数学は平常、学年トップ。何やら夜な夜な怪しい遊びをしているようだけど、理系だけはセンスと才気で解けるらしかった。でなければ、とても、こいつが勉強に勤しんでいるとは思えない。逆に数学の成績があまり芳しくない僕にとっては、センスと才気だけで数式を読み解ける相原が羨ましかったりする。

髪を茶色に染めているこの優男は、無軌道や無秩序を好む。それでいて、妙なことに造詣が深い。ウサギの狩り方であるとか、日本人の原初はシユメール人であるとか、そんな知る必要のないことばかり知っている。口耳くごじの学であると本人は言うけど、その割には、量、質ともに、並ではない。不羈の才を有するこの男は、清濁併せ呑む奇人だった。

次いで、草薙市の夜を疾走するこいつには、裏のつながりからか特殊な情報網や人脉を多く持っている。なので、普段はただのバカだけど、いざとなれば頼りになる男だ。それにふざけた言動のわりに、頭も切れる。だからなのか、なんだかんだでみなに一目置かれている。

そんな男だからか、観察力も鋭い。

「今日のおまえ、なんだか様子が変だぞ」とさらりと核心を突く。

「熱でも出たか。あんまり葵ちゃんに迷惑かけるようなこと、するなよ」と加えて、情にも厚い。

「そんなに变か？」

「变だ。おまえはいつも变だが、今日のおまえはいつにもまして変だっつーの」

「……それは言葉の暴力なんじゃないかな？」と苦言を呈するが、相原はなんのその、どこ吹く風と言った感じ。涼しい顔で僕を見下ろしている。

「まあ、紅花べにばなは打たれ強いから大丈夫だろ」と意味不明なことを口にして、「前からそうだ。おまえは喧嘩になると妙に打たれ強かったからな。特に後ろに葵ちゃんあおいがいるときはそれが顕著だった」と

癖なのか、寄り目を作る。「氷雨ひこりさんもそう言ってただろ？ おまえは守るものがあるとたんに強くなるって」

「やめろよ。こそばゆいから」僕は面映くなつて、口をへの字に曲げた。

「いやよお、お前つてそう言うところあるだろ？ 何かを背負うと強くなるなんていいじゃないか、正義のヒーローっぽくて。オレは善が悪をフルボッコにするって言う勸善懲悪は大嫌いだけだよお、きちんと自分の正義持つてる奴はカッコいいと思うんだよ」

「ふーん。そつか」と僕は頷く。「それで、おまえはどうなんだ？」相原は困つたような顔をした。「さあな。オレはまあ、自分なりの信念つて奴は持つてるつもりだ。それでも……己の信念曲げて、自分の信じてたもん裏切つて、それで何かを得るって場合も結構ある。だろ？ 結局のところ、正義とか信念なんてものは立っているポジションで姿形を変えるもんなんだよ」

「違わないだろうね」と右の腕をさする。「けどまあ、僕は葵をちゃんと守つていければそれでいいかな」

その言葉に頬を歪ませた相原は、おもむろに椅子から立ち上がった。「いいじゃないか。それがお前なりの信念つて言うなら、それを堅持すればいい。けどまあ、それ以前にオレにとつて見れば、おまえの信念なんて、別にどうでもいいんだがな」

相原は皮肉るような笑みを浮かべて、自分の席に戻った。相原は時々、こんな風に深遠な話題を吹っかけておいて、いきなり煙に巻いたりする。こいつとは長い付き合いだけど、いまだに相原庵と言う男はよく分からない。

確か次の授業は理科だった気がする。

僕は生物を取っているので、生物の教科書を机から出す。

「んじゃ」と相原は物理の教科書を持って、教室を跡にする。黒板には、「物理は物理室で、生物は一組の教室で行います」と書かれていた。

僕は机に体を突っ伏した。そして、相原が気にかけていた何かを、

誰にも見えないように見る。

開かれた携帯電話。見知らぬ人から送信されたメールには、「放課後、屋上で待ってます」と言ったものが残されていた。

## 第二話

担任の挨拶と共に、ホームルームは淡白な終わりを迎える。

帰宅部の僕は、学校に残ってすることもないので、さっさと教科書類や筆記用具を鞆に詰め込む。

「紅花<sup>へにはな</sup>。おまえ、放課後空いてる？」と。

同じ帰宅部の相原<sup>あいはら</sup>が声をかけてくる。

相原は鞆を肩にかけて、僕の机のすぐそばまで接近した。

「この後、市街地で例のプロジェクトを敢行することになっているんだけどよお、おまえもどうだ？ 真夏の狂乱レイヴが楽しめるぜ」

この男はストリートミュージシャンを牽引するヘッドの一人らしかった。確か草薙市にはストリート系のダンサーやら、パフォーマーやらのグループがいくつかあって、それらを束ねるヘッドが四人いるらしい。そのうちの一人が、眼前の男、相原庵。

といっても、こいつ自身が表舞台に立つと言うようなことはなく、むしろ裏方に徹することが多い。しかし、犀利な相原がいるおかげか、これまでに警察に捕まったとか、揉め事があったとかは聞かない。草薙市のストリートは相原によって守られ、同時に相原の手によって自由に形をかえる。相原は深謀遠慮のオーガナイザーだった。

そういうこともあってか、ストリートにおいて相原の影響力は伊達ではない。ストリートギャングにも顔の利くこの男は、様々な手法、手段を用意して今を楽しんでいる。

結果その相原とよくいる僕もまた、妙に名が売ってしまった。銀髪が目立つせいからだと思うが、道を歩いているときなり見知らぬ男から声をかけられたりする。で、缶ジュースを奢られて、よろしくとか言われて、どこかに行ってしまう。

今のところ実害はないから放って置いているけど、なんだか変な

感じた。

僕は首を横に振る。「用事があるんだ」

「葵ちゃんか？」

「葵は今日、遠征の微調整があるんだって」

「ふーん。そうか」と何を察した、と言うか思い出したのか、相原はあのニヤニヤとした笑みを浮かべながら僕に背を向けた。「まあ、用事があるなら仕方ねえ。暇があったら、東口通りの噴水広場に来たらいいぜ。俺の紹介だといえば多分融通してくれるだろうから」

僕は、「はいはい」と空返事をして、後ろざまに手を振る相原に手を振り返した。茶髪の男はあつという間に視界から消えた。

教室内は緩やかな喧騒でざわめいている。放課後の学校特有の騒擾。何かが終わったことに安堵したような、そんなぬるま湯を髣髴とさせる雰囲気。

再度携帯電話を開いて、考え込む。

行くべきか。

行かぬべきか。

僕は屋上にいた。

遮蔽物も何もない眼下からは、緑の映える山々が見える。その下には活気立つ商店街や住宅地。涼風が肌を撫でて、爽快な風が吹き渡る。

屋上は解放されている。なので何の苦もなく屋上に入ることができた。

やや低めの柵に体を預けた。適当に鞆を置く。緑風が気持ちよいから、しばらくの間はこうしていたい。待ち人が来ずとも、それはそれでいいような気がしてきた。

片膝をついて、落陽の空を仰ぎ見る。夕日に彩られた彩雲が、ゆつくりと流れていった。髪を撫でる風が心地よい。

と。

そのまま側臥しようと思ひ、体を寝かせようとする、誰かの影が視界に入ってきた。

僕より少しだけ低い身長。触ったら折れてしまいそうな体。はためくスカート。明眸皓齒な面立ち。どこかで見たことのあるような顔。

上靴がコンクリートの床を穿つ。その人は典雅な動作で僕に肉薄していった。

「紅花君はいつもそんな目をして、ワタシを困らせる……」

同じ色の上履きをした少女は、僕のすぐ横に腰を下ろした。色素の薄い髪がさらさらとたなびいていく。

「そんな悲しそうな目をしたら、埋めたくなくなる。ワタシと言う心や体で、紅花君の悲しみを埋めたくなくなる……」

同級生の不知火<sup>しらぬいかなた</sup>彼方は濡れたような瞳を僕に向けた。形のよい唇が言葉を紡いでいく様子は、艶やかで扇情的だった。

「ねえ、紅花君はいつも何を思ってるの？ 何を考えて、何を思っ  
て、誰を感じてるの？ ……教えてよ。ワタシに教えてよ……」

不知火サンは僕の左手を握って、緩慢な仕草で顔を近づけた。透き影のついた鎖骨。潤んだ双眸。思い悩むような表情で、僕を凝視する不知火サン。

「えっ、その……不知火サン……？」

何かが起こりそうな予兆を感じる。僕は不知火サンから少し離れようとした。けど、つかまれた左腕は思うように動かない。まるで万力に固定されたようだった。不知火サンの細い腕からはとても想像できない力。

不知火サンは僕の耳元まで口を寄せた。

そして。

言う。

「……メール、見てくれた？」

「メール……？ ああ、あれ、不知火サンのだったんだ」

「そうよ」

「そうなんだ」

「……………」

「……………」

「やっぱり」

「やっぱり……………」

「やっぱり、紅花君を見ると悪戯しちやいたくなる」

不知火サンは紅い舌で僕の頬をぺろりと舐めた。獣性のこもった瞳が、僕を貫く。不知火サンは滴る唾液に頓着せず、舌を艶かしいしぐさで出し入れた。落ちる唾液。アスファルトの地面にぺちやりと、小さな波紋が広がる。

体中が総毛立つ感覚。ぞわっと体の芯から、変なものがこみ上げてきた。

「ななな、なつ、何を」

「何を？」と不知火サンが妖しく笑う。髪同様、色素の薄い眼球。長い睫毛。柔らかそうな肉体。あふれ出る女の色香。全身の皮膚をくすぐる華やかな体臭。左手の温かい感触。

「何をって……………」

「もつとさりたい？」と艶然と舌舐めずりをして、「それとも、口同士でしたい？」と言い放つ。

僕はぶんぶんと首を横にふる。そういうことじゃない。そうとうわけではない。というか、そんなわけないじゃないか。

瞬発力に物を言わせて、不知火サンから離れる。ここから先は行ってはいけないような気がするし、後戻りできないような気もする。そう本能が告げている。

「あつ……………」

儂げな声を出して、可憐な眉を顰める。不知火サンはしりもちを付いた。両手をついた体勢で、太ももがあらわになる。あられもない光景。何やら淫靡な面妖さだった。

腰をさする。どうやらさっきの衝撃で、不知火サンは腰を痛めた

らしかった。「あいたあ」とかわいらしい声を出す。

僕はチャンスだと思って、このまま走り去ろうとしたけれど。

「……ほら、手を出して」と。

不知火サンに手を伸ばす。

不知火彼方と言う人間は、学園内でも知らない人はほとんどいない。単純な知名度なら、相原なんて目じゃない。特に男子からの支持率は、新聞部と言う誘因もあり、極めて高い。

その要因は一重に、隔絶した容貌にある。彼女の写真やブロマイドは一部において高額で取引されているらしい。他校の生徒も彼女目当てに、正門で陣取っていたりする。

加えて成績も主席で、運動能力も並ではない。

僕はよく知らないけど、どこそのスポーツ名門校がスカウトに来るくらい。ただもつとすごいのは、それを蹴って地元の高校に入学したことだろうか。

そういう意味でも不知火サンは異質な人だった。しかしそれまでこれと言った接点がなかったので、半分くらい記憶の中で抹消されていた人でもあった。確か同じクラスメイトだったような気もするけれど。

「……紅花君の匂いがする」

当の本人である不知火サンは僕と手を繋いだまま、クンクンと制服の匂いを嗅いでいる。犬のように鼻を押し付けて、目を閉じてずっとこのまま。これこれ十分くらいはこうしている。

「……腰の方は大丈夫なの？」

「……大丈夫じゃないかも。あなたが触って確認してくれたら、分かるかもしれない」

「……いや、多分大丈夫だと思うよ」

そう判断し、そしてこれからどうしようかと悩む。と言っか、さつさと離れてほしい。気が変になりそうだから。

冷える。今年は七月だからそれほど寒いわけじゃないけど、なんだか冷える。それでいて、生暖かい感触。それはきつと、不知火サンの吐き出す息の熱だと推測。不知火サンはしきりに体を押し付けてくる。コタツの中のような、爛れた熱気が僕の体を支配していた。異性の体に触れるのは久しぶりだった。幼いころはよく、葵とじやれあったり、一緒に風呂に入っていたころもあった。でも、最近ではそんなことしない。色々と危ないし、何より恥ずかしい。それに葵にそんなことしたら、絶対に殺される。

「……もうそろそろいいかな？」と軽い口調で言ってみるが、そろそろ本気で簾が外れそうだった。内気な草食動物である僕は、長時間の触れ合いに耐えうるほどの耐久性に優れているわけではない。

僕のうちに住む獣が檻の柵を叩いている。

この女を殺したいと叫んでいる。

僕はそれを押さえ込んで、感情の波を平坦にしようと思めた。

一方の不知火サンは、幸せそうに僕の皮膚に頬をくっつけていた。「……まだ。ぜんぜん足りない。楔みそぎエネルギーが足りないの。後はあなたの鎖骨を舐めて、その髪を口に含めば、どうにかなりそう」「どうにかなりそうなのは、僕だよ」

不知火サンの耳を掴んで、ぎゅーとした。「ううう」と悲鳴を上げて、仰け反る。複雑に絡まっていた手が、徐々に離れた。

「……もつとしたかったのに」と恨めしいのか、ムツとした表情で僕を睨んだ。

どうという言葉を返すべきか戸惑った僕は、苦し紛れに、「こ、こんなことをするために僕を呼んだの？」と大変無意味なことを訊いた。

不知火サンは首肯した。「けど、ちょっと違う」

「……違う？」

「あなたに告白するためにここに呼んだ」

やけに淡泊なそれは、力強い余韻を伴って、僕を襲った。

そして情けないことに、すっかり混乱した僕は、「えっ？」と問  
抜け面で問い返していた。

「あなたのことが好き。朝昼晩、ずっとあなたのことを考えてる。  
それくらい好き。好きで好きで堪らない。殺したくなる。それくら  
い好き」

途中、不穏な単語が聞こえたけど、そんなこと些細な問題だった。  
……はあ。

なんかあまりに突然すぎて、現実感がない。

これまで親しいと言うわけでもなかった人から、好きだと言われ、  
交際しようと言われてる。その嘘っぱさが、非現実感を醸してい  
た。

何より、どうやって僕のメールアドレスを知ったのだろうか？

水面下での動きがあったのか、それとも不知火サンがそれだけの  
ツテを持っていたと言うことなのか。

どこかの男子が、不知火サンに情報をリークしたのかもしれない。  
確かに不知火サンに頼まれれば嫌とは言えない。多分、僕でもそう  
だ。

何も言わないボクに業を煮やしたのか、不知火サンは透徹とした  
目を向けた。「紅花君はワタシのこと、どう思ってる？ それが訊  
きたい。紅花君がワタシのことどう思ってるか、知りたい。紅花君  
の感じているもの全てを知りたい。紅花君にワタシを知ってもらい  
たい。紅花君と交わりたい。紅花くんがワタシの全部にメロメロに  
なって、たくさんイチャイチャして、二人でグチャグチャになって、  
お互いを支え合える関係になりたい。そういうのは、嫌？」  
「嫌じゃ、ないよ」

僕は答える。

何かを共有できて、相互の幸せについて考えることができる。

それはすごく幸福なことで、尊いことだ。

マザーテレサも言っている。

汝、隣人を愛せよ、と。

愛に優劣なんてなくて、常に等価。人は愛を前にして、平等になる。

だから。

これで葵をないがしろにした、とはならないんじゃないかな。

葵は大切な人。けど、不知火サンは稀有にも僕が好きなのだそう  
だ。こんな単細胞のボクを好きになってくれるなんて、蓼食う虫も  
なんとやら。

傲慢な考え方だけど、ボクが不知火サンを拒絶したら、悲しむ（  
と思う）。幸せはゼロサムな一面もある。けれど、この場合、誰も  
得をしない。むしろ、損をする人が増える。

不利益をこうむる人がいるなら、どうにかしたいと思うのが僕の  
単細胞の所以だ。いかにも倨傲で無知な考え方だけど、それはそれ  
で一つのあり方だと思う。相原もそんな感じのことを言っていた（  
覚えがある）。

と言うわけで、僕は特に逡巡することなく、不知火サンの提案を  
受け入れることになった。

### 第三話

「紅花君って意外にもてるんだよ」

二人で正門を潜り抜けた後、出し抜けに不知火サンが言う。

時刻はもう夕暮れ。鮮烈な薄暮が海沿いのこの町にゼピア色の影を落としている。

僕たちは影を踏むように、歩いていく。

「銀髪で人目を引くって言うのもあるけど、顔は結構整ってるし、性格も優しいから、ファン急増中」

不知火サンはちよつと怒ったように言う。

僕は広がる田園風景を眺めている。草薙市は田舎と都会、その二つが見事に混在している町。中心地に行けばそのすごい都会だけど、場末のところに行けば、今みたいな田と畑がどこまでも伸びている。「けど、相原君とよくいるから、同時進行でホモ疑惑も噂されてる」  
「……………」  
なるほど。以後、あいつとつるむのは控えよう。

「何より、妹さんとも一緒にいるから、シスコン疑惑もまことしやかに囁かれてる」

「……………」  
まあ、しょうがないか。大事な妹、一人だけの家族なんだし。一緒にいて何が悪いんだ。

そんな風に自己弁護していると、不知火サンがじつとこっちを見ていることに気づいた。無感動な目が何かを訴えている。

「お腹、空いたの？」

「何か反応して。寂しい」

「ごめん。あまりにも衝撃的だったから。特に相原のくだりは、あいつとの親交について考えさせられた」

「妹さんは？」

「葵は……これまで通りだよ。普通に二人で暮らして、普通に二人

で生きる。それだけさ」

僕は妹に特別な感情を抱いていると言うわけではない。今までどおりの生活を貫くだけだ。不知火サンとの関係も、なんら支障になりえない。

「……いいな、妹さんは。ずっと紅花君と一緒にいれて。私も風呂で流しっこしたり、同じお蒲団で添い寝したい」

「……そんなことしないよ。僕たちは健全な兄妹だし」と口を尖らせるが、小学校低学年のころまでは、そんなことをしていたような気がする。

「じゃあ、ワタシとしよ。ワタシ、そういう覚悟、できてるから」と無表情だった顔に、赤いものが混じる。「てか、むしろ、したい」不知火サンは怜悯な見た目とは違って、頭の螺子が何本か落っこちているようだった。

一牛鳴地の田舎道。時折トラクターに乗車する農夫や農家の方とすれ違い、なぜかその人たちから笑いを買う。多分、初々しいからだろう。僕たちが。

僕の自宅はこのまま真っすぐに行けば、じきにつく。一方で、不知火サンの居住地を知らない僕は、やっぱり彼女を家まで送り届けた方がいいとも思っていた。

足を止める。  
不知火サンは不思議そうに首を傾げた。「どうしたの。もうすぐじゃないっけ」

「いや、そういえば僕、不知火サンの家知らないなって思ってた」  
「ん……ああ、ワタシの家はさっき通った道を左折したところにあるよ」

僕は自分の無知ゆえか、不知火サンに遠回りをさせていることに今やっと気がついた。

女性に気を遣わせると言う大罪を犯した僕は、自らを卑下した。

もう一つ、気づいたこと。

「……ていうか、不知火サン。僕の家、知ってるんだ」  
自分の家へと続く道を通り過ぎたと言うことは、やはりそういうことだ。

不知火サンは難しい顔をした。どこか照れたように笑う。「ワタシね、うん、紅花君の家、知ってるよ」

過去に不知火サンに住所を教えたことがあるだろうかと思いがながら、「どうしてなんだい？」と問いかける。

不知火サンは口をパクパクさせて、言おうかどうか迷っているようだった。しかし、決心したのか吹っ切れたようにすっきりとした表情を作る。「前にワタシ、紅花君が下校する跡をつけたことがあって、それで知った」

「……それ、本当？」

「うん。もつと紅花君のことが知りたくて、何度もつけた」

「何度も？」

「何度も」

「どこまで？」

「……庭の辺りまで」

「……妹が気づかなかったことが奇跡だよ」

「ワタシ、忍者だから。忍びのものだから」

「……理由になってないよ」

呆れたようにそう言うと、不知火サンは少し怯えたような顔つきになる。僕の顔を窺うように、そつと僕を盗み見た。「その……怒らないの？ このメンヘラ女とか言つて、怒らないの？」

小動物のように体を振るわせる。不知火サンは体を硬直させていた。

その様子を見た僕は、頭をかいた。乾いた口唇を舌で潤す。「別に怒らないよ。キミのそれよりもつとすごい、僕知ってるから」  
納得がいったのか、いかなかったのか。

不知火サンはどこか不服そうだった。一転唇を尖らせて、「むうー」とか言っている。

「どうかしたの？」

「……ひよつとしてあなた、ストーカーみたいな女がいるの？」  
「どうやら不知火サンは誤解しているようだった。と言うより、若干嫉妬しているようでもある。と言うか、それは不知火サンのような気もするんだけど。」

僕は静かに首を振って、「違うよ。幼いころ、僕の憧れだった人が、ちよつと困ったことになったんだ」と言った。

「困ったって？」

「その人はある人を愛するあまり、ある人を殺しちゃったんだ」  
さすがに面食らったのか、不知火サンは押し黙った。

奇妙な空気が流れる。

「ははは」と笑って、一笑に付す。「ごめんね、不知火サン。嘘だよ、嘘。さすがにいくら好きだからって、そんなことしないよ」

何も答えず、不知火サンは立ち止まったままだった。

僕は僕で、あんまり思い出したくもない出来事を思い出していた。赤くさびた血の色や、綺麗に笑うあの人の顔。人の形をしたもの。純粹に研ぎ澄まされた狂気。荒れ狂う感情の波。

「……紅花君」

「……送ってくね」

それらを一切打ち消して、眼前の畦道に目を向けた。

不知火サンの家は巨大な鉄扉に閉ざされた武家屋敷のような家だった。家の周りは土塀で囲まれている。遠くには峨々たる山脈が連なっていた。

不知火サンはバックの中に手を突っ込んでいた。どうやら鍵を探しているらしかった。

そこで僕は気付いたのだけど、不知火サンの鞆は女子のわりに、ストラップ等の装飾品がまったくなかつた。なんだか、不知火サンの性格を象徴しているようでもあつた。

と、そんなことを不知火サンにそこはかたなく聞いてみたら、不知火サンは唇をわずかに歪めて、「女の子っぽくないかな」と声のトーンを落とした。

「そんなことはないと思う。僕もやたらと携帯にストラップつける人とか理解できないし」

「紅花君もストラップみたいな装飾品、つけないよね」とバックから鍵を取り出す不知火サン。「携帯にも筆記用具にも、無駄なものがない」

不知火サンの言うとおり、僕は装飾品の類があまり好きではない。経済的な理由もあつてか、それらをつけることは今後もないように思えた。

ただ。

「よく分かつたね、ボクがストラップをつけたがらない奴だつて」

「あつ……うん。紅花君のこと、ずっと見てたから……」

目を伏せて、両の人差し指をつんつんとぶつける。頬を少し赤くした不知火サンは、はにかむように笑つた。

その凜冽とした面立ちに浮かぶ艶笑と、変態チツクな雰囲気にも飲まれた僕は、熱にうなされたような変な気分になつた。不知火サンの笑みは魔性で、この世のものとは思えぬ何かを併せ持っていた。

対峙する二人。

距離は近く、手で触れ合える程度。

いつの間にか不知火サンの熱っぽい視線が僕を縫い付けていて、僕はその場に固定されたように全然動けなくて、不知火サンがゆっくりと迫って行って、それを僕は目で追っていて、心臓が鼓動を繰り返して、そのまま。

と。

「あらあらあら、お客さん？」

長襦袢ながじゅばんを着た女性が、興じるように僕たちに声をかけてきた。

鼻筋の通った顔に、切れ長の瞳。長い髪の毛は後ろで結わえてある。左腕には小さな提げ袋を携行していて、いかにも大和撫子と言った淑女だった。

「……お母さん」

「……って、お母さん？」

僕は不知火サンと涼味の爽やかな女性とを見比べる。確かに顔つきは似ているし、限りなく色素の薄い髪や瞳もそっくりだった。

その女性は静々と笑った。

「私は確かにこの子の母ですけど」と言葉を一端切り、「あなたは彼方の彼氏さんかしら？」とやはり楽しげな様子で訊く。

彼方って誰のことだっけ、と一瞬思うが、不知火サンを指していることに気づく。そして同時に、ひよっとしてこれは大変な事態なのではないか、と思った。

僕はどう答えていいか考えあぐねていると、すかさず、「彼は私の恋人」と言った声が入る。

音源の方に目を向けると、仏頂面の不知火サンがいた。家の鍵を手で弄んでいる。いかにも不機嫌そうな表情だった。

もしかして家族仲が悪いのかもしれない。しかし、眼前の女性はニコニコと我が子を見ている。次いで、僕と目が合うと若々しい微笑を投げかけてくれた。とても誰かに対して悪意や憎悪を抱くような人には見えない。

「……機嫌悪いの？」と気になって尋ねてみる。

唇をへの字に曲げた不知火サンは、肉親を睨みながら、「あのままいったらキス、出来そうだった」とポツリと言った。「せつかくいい雰囲気だったのに。お母さんのバカ」

「あらあらあら、はしたないわねえ、この子は」と口元に手を当てて笑う。薄物の着物を羽織った女丈夫は、ポンポンと我が子の頭を

撫でた。

一方の不知火サンは「むうー」とかわいらしく唸って、それを受け入れる。どうやら家族仲は悪いわけではないらしいかった。

その睦まじい様子を見て、郷愁感のような寂しさを覚える。同時に葵も、口には出さないけど、きつとこんな寂しさを感じているのかもしれないと思う。

「そう言えば、あなたの名前は？」と不知火サンのお母さんは、にこやかな視線を向けた。

「紅花と言います」

「あら、風流な名前ね」と涼感のある和服をふわりとさせ、「それで、下の名前は？」と尋ねた。

「楔です」

「ふーん、苗字もだけど、変わった名前ねえ」と僕の珍妙な名に感心したようだった。それはよく相原にも言及されることがあるので、さもありなんと言ったところ。「さつきも言ったけど、私はこの子の母で、不知火桜いんかひさくらと言います。ちょっと思い込みの激しい子だけど、この子のことをよろしくね、楔君」

「はあ。その……こちらこそよろしくお願いします」

「よろしくね」と桜サンは爽やかな笑みを浮かべ、「後ね、楔君。もしよかったら、これ、食べていかないかしら？」と小さな鞆から包みを取り出した。それは長方形の薄い箱で、最中もなかと意匠の凝らされた文字で書かれてある。

「うん。お母さんの言うとおり。一緒に食べよう」と桜サンを押しつけて、不知火サンが僕の手を握った。冷たい、ひんやりとした感触が、手のひらに伝わってくる。冴えた月のような双眸が一直線に僕を見据えた。

その得も知れぬ迫力に押された僕は、いつの間にか首を縦に振っていた。

不知火サンは万遍の喜色を浮かべ、僕の手を引いた。「家の中は散らかってるけど、気にしないでね」

「うん……って、え？」と僕は素っ頓狂な声を上げた。「その、家に……上がるの？」

「ここで立ったまま食べるの？」

「そう言うことじゃなくて」

「なら、どう言うこと？」

「僕は……うん、付き合い始めたその日から恋人の家に上がるのはどうかかって、そう思っただけど」

「ワタシは別に、いい」

「よくないよ。倫理的に」

「……いじわる。お母さんには柔らかい態度だったのに、私にはつれないんだね。と言うか、私以外の人とあんまり喋らないですよ」

不知火サンはむっとした表情で僕を睨んだ。

困ったことになったなと思う。僕は不知火サンにねめつけられて、不知火サンは肉親にやきもちを焼いている。

強情、と言うわけじゃないけど、不知火サンには僕に関して曲げられないものがあるらしかった。と言うか僕は、今、ものすごく罪深い男なんじゃないかな。僕は世界中の男に殴られても文句を言えない立場にあるのだと思う。

などどつらつら考えていた僕は、翼々と視線を泳がせていた。すると桜サンと目が合う。上品に微笑んでくれる桜サン。僕も小さい笑みを返した。

その様子を綿々と観察していた不知火サンは、唇を真一文字に結んだ。怒髪天に衝くかのごとく僕を睨み、母親も睨む。

そして呟くように、「私以外の人と仲良くしないで」と数オクタブ低めの声。瞳は氷のように冷え切っていて、鋭利な印象を与える。

「いつ、行こっか、不知火サンの家。ぼぼ、僕もお腹が減ったから、ななな、何か食べたいな」

不知火サンは徐々に表情を軟化させて、「だったら、最中。食べる？」と桜サンから最中の箱を取り上げて言った。「お茶もご馳走

するから。それでいいよね？」

「うん」

「なら、頭撫でて」と不知火サンは催促するように頭を少し下げた。文脈の接続が微妙に違う気もするけど、この程度のことです許してくれるなら。

それに不知火サンの髪は金糸のように滑らかそうで、単純に触れてみたかった。女の子の髪を触るなんて、小学生の葵以来だった。

僕はぎこちない素振りでも不知火サンの頭を撫でた。正直、親の目の前でこんなことをしていいのだろうか、とは思ったけど、当人の桜サンは声を忍ばせて愉快そうに笑っていたので、多分大丈夫だと思う（ことにする）。

「もつと……髪握って……。あ、後、髪を、梳くように……。やつ、止めないで、もつと続けて。とつ、止めちゃ嫌だよ」

不知火サンは顔を上気させて、変な呻き声を上げていた。そんな声を出されると、その、こっちの方も変な風になる。

不知火サンの髪の毛は艶があつて、手に絡まない。癖が全然ないから、つうと指が通る。不知火サンの髪は腰の辺りまでであるけど、髪の毛の先まで髪全体が清冽な川の流れのようだった。

「……ああ、もつ、いい、よ。つ、続きは、家の、中、で」

ぐったりとした不知火サンは、千鳥足で不知火宅に向かった。僕も不知火サンに感化されたのか、体が脱力している。と言うより、不知火サンの官能的な声に体の心までやられたらしかった。

「あらあら、我が娘ながら、めんこいわねえ。楔君もねえ、大丈夫なのかしらねえ」

桜サンはやはり暢気な声で、そんな言葉を僕にかける。

## 第四話

「そもそも櫻君は、何で彼方と付き合おうと思ったの？」

危うくお茶を嘔き出しかけた僕は、最中で口を塞ぐと言う強行策に打って出た。

不知火家。

リビング。

不知火サンが言っているほど、室内は汚れていなかった。むしろ整然としていて、掃除が行き届いている。先刻の言葉は謙遜の言葉らしかった。

僕と桜サンはテーブルに向かい合って座っていた。不知火サンは私服に着替えてくるらしく、自室で着衣を行っている。

テーブルクロスが敷かれたテーブル。その真ん中には、最中の内包された箱。手前の方には湯飲みに注がれた茶。

目の前には着物姿の女性。

「ぼぼぼ、僕は、その」

「いや、質問を変えるわ。あなたと彼方、どちらが先に告白したの？」

「そ、それは……不知火サンからです」

「なるほど。彼方の方から好きだって言っただけね。まあ、あの様子じゃあ、そうよね。なんだか若いころの自分を見てるようで、どうにも感慨深いわ」

「と、言つと？」

「私もね、さっきの彼方みたいに今の旦那とラブコメしてたのよねえ、これが。それも彼方くらいの年頃で、こっちから一方的に好き好き言ってたわ」

「はあ」

「旦那もね、時々私の行動に引いたり、驚いたり、困ったりするの。その顔がまた傑作で、かわいくてね、一回我慢できなくなっただけで公衆

の目の前でチユーしたこともあつた気がするわ。今思えば、そのときの私は徹底的に旦那に骨抜きにされてたのよ」

桜サンは遠い目をして、頼杖をついた。その表情に笑みが浮かぶ。どうやら夫婦仲も良好であるらしい。

箱の中の最中はそれほど減っていない。人様の家で物を貰うことに抵抗のある僕は、なんだかんだで一つしか食べていなかった。僕にはできる限り恭儉でありたい、と言う想いがあつたからだ。

「私はね、ここから一キロくらい先にある茶道教室の先生をやっているんだけどね、教え子の生徒がよく最中とか羊羹とかをくれるの。けど、私と彼方二人じゃどうしたって食べられないから、もつとたくさん食べていいわよ。そんなに遠慮しなくてもいいから。何なら余ってるから、貰つていつでも結構よ」

だから着物姿なのか、と合点した僕は、やはり桜サンの勧めを辞退した。そして不知火サンの性格は桜サン譲りなのかもしれないと思つた。

それは桜サンも感じていることなのか、「彼方の性格も、やっぱり私に似たのかしらねえ」と面白がるように言つた。「あの嫉妬深いところも遺伝したのよ。ふふふふ、未恐ろしいわねえ」

と言つ割りにまつたく怖がつていない桜サンは、艶麗な微笑を浮かべた。桜サンの話から類推するに、きっとこの人の年齢は、おそらく四十代前後なのだと思う。ひよつとしたら、学生結婚なのかもしれない。

「それでね、楔君」と先ほどの様子から一転して、神妙な面体を作る。懸河けんがの弁を誇つた口角はきゅつと締められていた。「あなたは私の娘と縁付くつもりなのかしら？」

「縁付くつてその、結婚つてことですか？」とは言つものの、ひどく現実感が薄い。一応後一回誕生日を迎えれば、祝言を挙げることはできる。けど、今までそんなことを一度も考えたことのない僕には、画餅に等しいことだつた。

「そうよ。何かおかしいかしら」

「おかしいってわけじゃないんですけど、それは早いような気がします」

「別に早いってわけじゃないのよ。私も十九で旦那の家に輿入れしたわ。だから、まるつきり早いってわけでもない」と桜サンは最中の封を切った。「今の彼方を見ると、昔の私とそっくりなのよ。純粹と言うか、盲目と言うか……。まあ、あの子が寂しいって泣きついてきたら、そっと抱きしめてあげるくらいしてほしいわ。それが彼方の母としてのお願ひ。いいかしら？」

桜サンは閃々とした目を僕に傾ける。きっとこの女性は人をひきつける磁気のようなものを持っているのだろう。闊達かつたつとした度量と、有無を言わさぬ雰囲気。あくまで柔らかい物腰ではあるが、しつかりと自分を持つている人だった。

だから僕も僭越にも、「はい」と返事をしていた。拳けん々服膺ふくようと桜サンの切言を心に銘記する。

そんなこと、まだ分からないのに。

これからどうするか、決めてないのに。

「おまたせ」と。

襖を開ける音がしたと思ったら、Tシャツ姿の不知火サンがいた。膝丈の黒いスカートをはいている。頭には綺麗な簪かんざしが刺さっていた。僕の姿を認めた不知火サンは、瞬時に僕の手を握った。そのまま引き摺るように引く張る。「行く」

「って、最中は」食べないの。

不知火サンは勢いよく回れ右をして、テーブルの上の最中を鷺掴みした。そして、桜サンに「いいー」と唇を突き出した。

一方の僕は不知火サンに引く掻き回され、テーブルの角に腰を打ちつけ、悶絶していた。

「私の部屋、行こうね」と無機質な声で、僕に呼びかける。不知火サンは指同士を複雑に絡めて、再度襖を開いた。その奥には木製の階段が見えた。どうやら不知火サンの私室は二階にあるようだった。

不知火サンはずんずんと進んでいく。どこか怫然とした様子だった。

ひよつとして僕は、不知火サンの気に障るようなことをしたのかもしれない。

恐る恐る訊いてみる。

すると。

「……私以外の人と喋らないでって言ったのに、お母さんと仲良く喋ってた」

と言った返事が返ってくる。

「……」

「紅花君が他の女の人と喋るの、嫌。紅花君が他の女の人に笑いかけるの、嫌。ワタシとだけ喋って、ワタシにだけ笑いかけてくれればいい」

「……」

「私以外の女の人に触れるのも、嫌。ワタシ以外の女の人を見たりするのも、嫌。ずっとワタシの傍にいて、ずっとワタシだけを見ていてくれればいい」

「……」

「それで、お母さんと何喋ってたの？」

「あつ、うん。なんだろう。結婚、の話かな」

「……結婚って、ワタシと紅花君とってこと？」

「不知火サンのお母さんが、僕に不知火サンと結婚する意志はあるのかって訊いてきたんだ」

「……紅花君は、したい、かな？ 結婚。ワタシとしたい？ ワタシはね、してもいいよ。ちょっと大変そうだけど、紅花君と一緒になれるなら、ワタシ、幸せだから」

「僕は……まだ分からない」

「……そうだよな。まだ付き合ったばかりだから、悩むよね。けど、大丈夫。すぐにワタシの魅力でメロメロにしてあげるから」

不知火サンは僕の腕を掴んで、僕の頬に頬擦りをした。絹のよう

に弾力性のある肌。果実のように甘い体臭が鼻腔に侵入してくる。

「紅花君のほっぺって柔らかいんだね。それとね、紅花君。ワタシの唇も柔らかいんだよ。……試してみる？」

不知火サンは動物的な動きで舌なめずりをした。色素の抜け落ちた瞳が艶美の色に染まる。

階段を駆け上がる僕と不知火サン。不知火サンはねっとりとした動作で僕に戯れる。どこか病的なそれは、形容しがたい危うさを内在させていた。

不知火サンの私室。

前述のとおり、不知火サンの部屋は無駄を削ぎ落とした部屋だった。勉強机に棚、茶箆筥。部屋の隅には置かれた蒲団があつて、白色のカーペットが敷かれてある。床には何も落ちていなかった。

「適当に座って」と僕を解放した不知火サンは、押入れの方に向かっていった。言われたとおり、カーペットの敷かれた床に腰を下ろす。

不知火サンは押入れの襖を開けていた。テーブルのようなものを探しているようだった。手伝おうと思つて立ち上がるうとしたけど、タイミングの悪いことにちょうど不知火サンが小型テーブルを持ってきていた。角のない、丸いテーブルである。不知火サンはそれを僕の目の前において、テーブルに顎をくつつけた。ごろんと頭の側面を寝かせ、じーっと僕を見る。時折、「にへー」と締まりのない笑みを浮かべた。それで時間が過ぎる。

気がつけば五分が経過していた。

僕は不知火サンの不思議な態度に首を傾げる。

「……何？」

「しあわせーって思つてた」

ますます疑問に思つた僕は、「何が幸せなの？」と質問を重ねた。ひよつとしたらこれは、幸せをよく知らない僕への自問自答なのかもしれない。

これまでの僕の短い人生は、所々幸せを欠如させた人生のように

思えた。両親を失い、大切な友人も失った。

けれど、僕には目に入れても痛くない妹がいて、徹底的にバカで粹な友達も数人いる。それはわずかな救いのようにも感じられる。

人の一生から不幸だけを引き抜いて残ったものが、幸せだとは思わない。不要なものを淘汰したところで、すでにその本質は欠乏している。逆に幸せだけを引き抜いた人生って言うのも、不幸ばかりじゃないようにも思うんだ。

だから、僕の卑小な人生も多大な不幸と少量の幸運が混ざり合っ  
てできているのだろう。

不幸なだけの人生って言うのは、ない。

幸福なだけの人生って言うのは、ない。

人は誰しも、傷や痛みを抱えている。それでも、そのかさぶたを引き摺って、必死に頑張っていて、がむしゃらに突き進む。それが生きるってことなんじゃないかな。

僕は不知火サンの人形みたいな顔を眺める。神が直々に創造したかのような典雅な麗姿<sup>れいし</sup>。不知火サンは天使のような笑みを浮かべた。「ワタシね、紅花君を見てると、胸がポカポカして、幸せな気持ちになって、このままこうしてもいいかなって思った」と不知火サンは蛇のように手を伸ばし、向かい側の僕の右手を握り締めた。その後、後ろにある蒲団を指差す。「それとね、眠くなったら、蒲団があるから寝ていいよ」

「……貞操の危機を感じるんだけど。いや、そもそも僕、寝ないし」「へえー。紅花君は睡眠を取らずに生きていられるんだ。珍しいね」「……そんな人間いないよ。そういう意味じゃなくて、僕はここで寝るつもりはないってこと」

「え？　ワタシの家に泊まっていくんじゃないの？」

「……そんなこと言った覚えはないんだけど。僕はただ、不知火サンのお母さんに最中を食べようって誘われただけだよ」

すると右手が鎖に縛られたような圧迫感に襲われる。どうやら不知火サンが手に力を込めているらしかった。ぎゅうと信じられない

力で僕の右手を握りつぶそうとする。

「……………痛い」

「あつ、ごめん……………。つい、その……………ごめん」と無意識の行動だったのか、あわてて右手の拘束を解く不知火サン。

僕の右手は霜焼けになつたみたいに赤く腫れていた。ジンジンと痛む。

それを見た不知火サンは大いに狼狽して、僕の右手を両の手で包み込んだ。しきりに、「痛くない痛くない」と呪文のように呟いている。

なんとなく人間としての欠陥を感じさせる。

「大丈夫だよ。ちよつと驚いたけど、そんなに痛くないし」

ポンポンと桜サンのように頭を撫でる。なんとなく不知火サンの扱い方が理解できたような気がする。

「うん…………。分かった」としおらしく頭を垂れる不知火サン。不知火サンは積極的などころがある反面、今みたいに恭順な態度を取ったりする。そのギャップが人間っぽくない。なんだかアンバランスな感じだった。

「だったらいいよ。不知火サンに悪意とかそう言うのがないのは分かっているから」

「愛ゆえ」

「そ、そうだろうね。はははははは」

僕は過剰に明るい声を出して、不知火サンの頭を撫で続けた。

## 第五話

結局、家に帰ったのは九時頃だった。

不知火サンに死ぬほど引き止められたけど、なんだかんだと理由をつけて、帰途に着くことができた。桜サンも僕の宿泊に関して異論はないようだったけど、やっぱり抵抗がある。それにいずれ不知火サンのお父さんも仕事から帰宅するはずだから、何かと大変なことになるのは自明の理だった。次いで、夕食を馳走になって、家に泊まるなどおこがましい。僕は不知火サンの提案を肅々と辞退した。そうした紆余曲折を経て、今に至る。

忍び寄る夜気。自宅の玄関前にはチカチカと電灯が煌いている。力を使い果たした僕は、亡者のようにドアノブに手をかける。開くと、魚の香ばしい香りが鼻腔をくすぐる。

靴を脱いだ僕は、リビングへと向かう。するとテーブルに頭を突っ伏していた葵の姿があった。

僕の姿に気づいたのか、葵は顔を上げた。眠たげな瞳で僕を見る。と。

威勢良く椅子から飛び上がった葵は、一直線に僕の元まで走ってきた。そのままの勢威を保ったまま抱きつく。その拍子に僕は、背中からダイブした。

「……お兄ちゃん！ お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！ もう、どこ行つたのよ！ 心配したんだよ！ これだけ待つても全然帰つてこないし、外はどんどん暗くなるし、ご飯は冷めちゃうし……。せっかくお兄ちゃんの好きな焼き魚を調理したのに、肝心のお兄ちゃんがいないと意味ないよ。これだけ妹を心配させるなんて、兄のことなの？ もう九時なんだよ？ てつきり新聞配達で遅くなるのかなって思ってたけど、夕刊を配るのなんて一時間くらいで終わるし、こんなに長くかからないよ。てつきりお兄ちゃんが事故に遭つたり、通り魔に遭つたのかと思つたんだよ？ 私もういても立つ

てもいられなくて、こちら辺を必死に探したけど、どこにもいなくて、相原さんにも電話したんだけど、応答がなくて、ひよっとしたら相原さんごとかに巻き込まれたのかと思つて、私心配で心配で……。私、お兄ちゃんがいなくて生きていけないよ。お兄ちゃんありきの生活なのに、これ以上私を一人にしないでよ！ もう家族の誰かがいなくなるなんてごめんなんだから……。けど、もういいよ。ちゃんとお兄ちゃんが帰ってきてくれたから。お兄ちゃんはここにいてことは事実だから。私、怒ってないよ。それはもう最初は頭に来たけど、だんだん寂しくなつて悲しくなつて、お兄ちゃんが恋しくなつて、どうしようもなく、ちよつと泣いちゃった……。

私、お兄ちゃん依存症だね。お兄ちゃんがいなくてとたんに孤独感に襲われて、周りが全部敵に思えてきて、無性に腹が立つて、イライラして、そして、虚しくなるの。だから、次に遅くなるときはちゃんと連絡してね？ それとなるべく早く帰ること。絶対だよ？ 絶対だからね、お兄ちゃん？」

葵は僕の肩に頭を乗つけた。床に背中をつけた僕はされるがままになつていた。と言うより、上から葵に押し倒される形なので、身動きがとれない。何より背中が痛い。フローリングに背骨を打ち付けたのか。

その痛覚を我慢して、腹筋の要領で起き上がる。僕の腕の中には震える葵がちょこんと納まつていた。僕の背中に手を回して、薄い胸板に頬をくつつける。その様子は母親に甘える小児のようだった。不知火サンとはまた違った体臭。乳製品のように甘美な香り。葵の光彩陸離たる髪。それが僕の皮膚に当たつて、くすぐつたい。

「……ごめんね、葵」と葵の背中をポンポンと叩く。ちよつど子守唄を歌う母親のように。「心配させたみたいだけど、僕はなんともないよ。怪我もしてないしこれと言つた異状もないから」

「分かつてるよ、お兄ちゃん。それで……どこ行つたの？」とくぐもつた声。顔を僕の胸に押し付けているからだろう。

言おうかどうか悩む。

別に何の問題もない。甲斐性無しの僕に、出来すぎた恋人ができてただけ。とても僕とは釣り合わない、可憐で素敵な人が現れたと言っただけ。

しかし。

直感的に言うのはマズイと、僕の本能が警告している。そのことを言うのはヤバイ。止めておけと、そんなことを言うのだ。

それは生存本能に訴えるものだった。具体的にどうマズイのかは明文化できない。ただ、漠然と何かが起こると、そう感じている。

長考。その間僕は、ごまかすように葵の背中に手を当てる。

「……相原のところに行つてたんだ」と胸襟で相原に詫びを入れる。「今日、あいつのストリートライブに行つててさ、気がついたらこんな時間だったんだ」

「……そう。相原さんのところに……」

「連絡できなかったのも、それどころじゃなかったんだ。特にあいつは久々にステージのセンターを張つててさ、それは大変だったんだ。僕は僕で、すっかり夢中になってた」

「珍しいね。お兄ちゃん、滅多なことでは熱くならないのに。よっぽど楽しかったんだね」

「楽しかったよ。いつでもあいつはバカなことやって、色んな奴を楽しませる」

僕は葵の頭部を眺める。葵はぎゅーっと僕を抱きしめた。それは何かに縋っているようにも見えた。

そして。

綺麗な声で。

言う。

「……女の臭いがするよ、お兄ちゃん。私の嫌いな、メスの臭い」

「……それもそうだろうね。周囲にはたくさん女の人がいたから」

「あんまり女の人の近くに寄らないで。嫌な臭いがついちゃうから。洗濯じゃ取れないんだよ、それ」

「……………」

葵も不知火サンと同じことを言う。しかし、葵のそれは不知火サンのとは一線を画しているように思える。不知火サンの場合はちょっと激しい嫉妬のようなものだけど、葵のそれは何やら違う。人として、生物としての根本を履き違えている。不知火サンとはまた異なる異質を抱えているように思えた。それらは存在する範囲が違うだけで、同じベクトルを向いている。

葵はナメクジのような動きで僕の背中をさする。葵の熱が僕の体温を侵食していった。

「それでねお兄ちゃん。今すぐその服を洗濯籠に入れて。そうしたら一緒にご飯食べようね」

「葵。悪いけど僕、もうご飯食べてきた」

「……そっか。ならいらないね」と葵は僕の体から離れ、立ち上がった。そのままリビングのテーブルへと向かう。テーブルの上には焼き魚を筆頭に白米や味噌汁。お浸しや佃煮などの和食が並んでいた。

葵はそれらを台所の流しに持っていき、これと言った躊躇いもなく、捨てた。一切手のつけられていない食べ物、あつという間に藻屑もくずのようになる。葵は無感情に皿の上の料理を廃棄していった。

その光景は一見どこにでも見られそうな光景だった。けれど、名状しがたい違和感があった。

それがなんなのかは分からない。分からないが、ただただ異常だった。まるで日が差しているのに、影ができないようなチグハグさ。僕はぼけーっと腰をついていると、「早く着替えてきて」と感情の色のない声が聞こえてきた。

僕は言われたとおり、衣類を着替えるために脱衣所へと向かった。

「それでよお、おまえ。何か変わったことはなかったか？」

開口一番、相原庵はそんなことを尋ねてきた。

僕は自室のベットに座って、壁に背を預けていた。開け放たれた窓からは冷たい夜風が室内に入ってきていた。

僕は手に持っていた携帯電話を思わず切りそうになった。まるでこの男は、今日の変事について何か知っているような口ぶりだったので、なんとなく癪に障るのだ。

「あつたよ、変わったこと。この先の人生を大きく左右するようなことが」

電話越しの相原は小さく笑ったようだった。

「……なんだよ？ 何かおかしいか？」

「いやな、ひよつとしたらおまえ。不知火に告られたりとかされてねーよな？」

「……は？」

「刻下、おまえに起こりうるであろう一大事と言えば、それくらいしかなさそうだしな。だろ？」

相原は念を押すように言った。そしてそれは、限りなく確認に近い質問だった。

いや。

そんなはずは。

「にしても驚いた。まさかあの天下の不知火から、おまえのメールアドレスを教えるって言われたときは、メチャクチャビックリしたおまえ、不知火に何かしたのか？」

「……こいつだったのか！」

こいつが、相原が不知火サンに情報をリークしたのか。

なんと無責任な。

僕がぶるぶると震えていると、相原の野次馬根性丸出しの声が聞こえてくる。

「一応まあ、教えてけどな、おまえのメールアドレス。てか、話変わるけどな、おまえ、友達少なすぎ。多分不知火が俺のところに来たのだから、おまえのメールアドレスを知っている奴が極端にいないことを示唆してるみたいだよな。事実、そんな奴は数えるほどし

かいねえ。だろ？ おまえ、顔だけはいいんだから、どんどん女に取り入っていけばいいのになあ、もったいねー奴」

「……相原」

「ん？ なんだ？」

葛藤。僕の胸底では無数の想い、感情がせめぎ合い、巨大な渦を形成していた。

「……おまえ、失礼な奴だな。友達がいなくてか、普通言うか？」

畢竟、それを言うにとどめた。相原自体は悪くない。それは明白なこと。だから、こいつに罪科はない。

「そのとおりだろ？ 確かにおまえはそんなに性格悪くないけど、他の奴と群れるの嫌いだろ？ 一匹狼だよなあ、紅花は。なまじ銀髪なだけにマジで狼気取ってんのか、おまえ？」

相原の罵言に鷄冠とさかに来る。しかしそれもまた事実だった。相原の言説どおり、僕は人と群れることがそんなに好きじゃない。

孤高、というわけでもない。単純に一人でいるのが好きで、傷の舐め合いが嫌いなだけだ。思うに自分の孤独を癒すためだけに友達を利用するような奴は、真の友愛など築けない。僕はそんな偽りの関係に嫌悪感を覚えるっただけの話だ。

と言うことは、普段よく行動を共にする相原とは、純の交誼を結んでいると言う論理になるけど、そんなこと恥ずかしくて言えない。そして今後は、不知火サンとも友好以上の関係を取り結ぶことになるんだろうね。

「僕はそんなんじゃない」

「せいぜい送り狼にならないよう、気をつけておくんだな」

「言いたい放題か、おまえは。散々引つ掻き回しといてこれか。もう切るぞ」

『待て待て待て。本題が残ってるだろ。不知火とはどうなったんだよ？ 俺の観察力が確かなら、十中八九おまえのことを意識してたぞ』

「へー。それで？」

『それはこっちのセリフ。てっきりオレは、放課後に不知火に呼び出されたのかと思ったんだが』

「……まあ、うん」

『呼び出されたのか？』

「……ああ」

『それで？』

「……不知火サンに好きだって言われた」

正直に言うことにする。どうせ、すぐに露見する。こういったセンサーシヨナルな情報はあつという間に伝播するものだ。特に学校と言つ閉鎖空間においては、その作用は著しい。

『……マジ？』

「マジ」

『それってつまり、告白だろ？ おまえはそれを受けたのか？』

「受けた」

相原は感嘆の息を漏らした。次いで、好奇心を抑えきれない声を発する。

『大金星だな。ものすごい上玉を手に入れてしまったと、そう言うことか』

「ああ、そういうことだよ」

僕は投槍に言った。なんだか面白くなかった。

一方の相原は面白くて仕方がないようだった。

「……切つていいか？」

『どーぞ。それが聞ければもうおまえに用はな』

切った。

僕はベットの上で横になった。

時計を見てみれば九時半だった。

変化に富んだ一日だったと思う。色々なことがありすぎた。そうも思う。

仰向けになる。天井には奇妙な模様を形作る木目があった。

携帯電話が鳴る。

## 第六話

「……なんの用だよ」

相原との会話で、より疲労が蓄積された僕は、乱暴な仕草で携帯電話を手に取った。と言うより、どうせまた相原だろうと僕は予想していた。あいつは人をからかったり怖がらせたりすることが好きなのだ。だから、電話を何度もかける、と言った徒労を厭わない。今回も例に漏れず、と言ったところか。

「もしもし」

「……あの、ワタシ」

不知火サンだった。

僕はあわてて整容し、ベットから跳ね起きた。まるで思春期の中学生的ような反応。

「その、不知火サン？」

「うん。ワタシだよ、紅花君」

携帯電話から聞こえる声。不知火サンは嬉しそうに笑った。

「なっ、何か用かな？」

「用ってほどじゃないけど、紅花君の声、聞きたくなったから」

「……うん」

「迷惑だった？」

「そんなんじゃないよ。ただ」

ペースが乱れる。相原とは正反対のかわいらしい理由と動機、そして甘い声にすっかり自分のペースを持っていかれたのか。

自然と笑みが浮かぶ。やっぱり、不知火サンはかわいい。

「ただ、何？」

「なんでもない。不知火サンはかわいいなって」

「……それ」

「……ん」

「それ、もう一回言って」

「ん」

『……紅花君、わざとやってる。もう一個前だよ』

「不知火サンはかわいいなって」

『もう一回』

「不知火サンはかわいいなって」

『彼方のこと大好き、好き好き好き、超愛してるって言って』

「彼方のこと大好き、好き好き好き、超愛してる」

『……録音するから、ちよっと待っててね。カセットレコーダー、用意するから』

がさごそと音がする。

数秒後。

不知火サンは、『もう一度言つて』と催促した。

僕は羞恥心に見舞われながらも、それに準ずることを言った。

そんなことが何分も続いた。

『ワタシもね、紅花君のこと超好きだよ。世界中の誰よりも好きで、理屈抜きで好きで、紅花クンから離れたくないよ。だからね、これはその代用品。これでいつでも紅花君の声が聞けるね』

臆面もなくそんなことを言う。いくら携帯電話越しでも、恥ずかしくないのかな……？　しかし不知火サンは荒い呼吸を繰り返しながら、愛の言葉を囁く。頭がおかしくなるくらいに、囁く。まるで脳内に直接浸透してるような錯覚。致命的な何かを破綻させた声。

『……不知火サン』

『なあに？』

「もうそろそろ、切るよ？」

『……切っちゃ嫌。もっと話したい。けど……もう夜も遅いね。紅花君も、もうそろそろ寝たい？』

時計の針は十時を指している。

倦怠感が尾を引く体は睡眠を渴望している。それに入浴も済ませたい。

「寝たい」

「……そうだよな、寝たいよね。私もそう思う。分かった、お休み、楔君」

不知火サンは僕の下の名前を言って、電話を切った。電話越しの不知火サンは、意外に聞きわけがよかったように思えた。例のカセツトテープが効いてるのかな。ちよつと病的に感じるけど。それも不知火サンなりの愛情表現だと思えば、むしろ面映い思いが募る。人間として肝要な部分が壊れた僕には、色々と箍の外れた不知火サンのほうが合っているのかもしれない。少なくとも、不知火サンと呼吸が合わないと思っただことはそんなにない。不釣り合いな感じはメチャクチャするけど。

再びベットに倒れこむ僕。

……疲れた。

一刻も早く風呂に入って就寝したい。いつそのまま寝てしまおうか。そんな甘い誘惑が頭をかすめる。

そんなことを半覚醒的に考えていた僕は、気がつけば柔らかいベットに全体重をかけた。羽毛のベットは優しく僕の体を包みこむ。疲労した体はずぶずぶと沈みこんだ。

そのまま。

僕は。

「お兄ちゃん」と。

部屋の扉が開く。

「次、お兄ちゃんの番だよ」

バスタオル姿の葵は、眠りこける僕を見て苦笑したようだった。

「もう、寝ちゃダメだって。ちゃんとお風呂に入ってから寝ないと、汗臭くなるよ」

「分かってるよー」とベットに突っ伏したまま答える。弛緩した体はまったく動かない。

ベットの縁に腰かけた葵は、「ほらほら、起きて起きて」と僕の体を揺さぶった。一筋の筋肉すら機能停止した僕の肉体は、漂流し

た灌木のように揺れるだけだった。

そのうち吐き気がしてきた僕は、熊のようにのっそりと上体を起こした。バスタオル一枚に身を包んだ妹の肢体が見える。

葵は顔を少し赤らめて、バスタオルの裾を握った。タオル越しに隆起した胸。バスケで洗練された体躯。大きく露出した足は瑞々しく、張りがあつた。

「葵」

「何でございましょうか、お兄様？」

「次からは服、着てから来い」

「襲いたくなつたの？」と葵は悪戯っぽく舌をチロチロとさせる。むき出しになつた肩の曲線美。葵はかわいらしく首を傾げた。

「そう言うわけじゃないんだけど」

「私の体、えろくなつたでしょ？ 惚れた？」

「惚れない」

「惚れてよ」

「何で兄の僕が、妹のおまえに心奪われなきゃならないのさ」

葵ははつとしたような顔をして、渋面を作った。額に皺を寄せて、瞋恚にも似た表情を浮かべる。その様相は悪鬼だった。

奇妙な沈黙。

何かが背馳したかのような空間。

「お兄ちゃんは」と葵は無気力な視線を投じる。「お兄ちゃんは、私のこと、好き？」

「好きだよ。決まってるじゃないか」

「……本当？」

「当たり前だ。変なこと訊くな」と僕は少し声を荒げた。

普段の葵とは径庭したズレ。腑に落ちない懸隔。葵は何で、そんな明々白々で決まりきつたことを詰問するのだろう？ 葵はただ一人の家族で、数少ない係累の一人だ。そんなの大事に決まってる。大切な妹を愛して、何がおかしい？

葵は顔を伏せた。濡れている髪がその表情を隠す。僕には葵がど

う言う表情を浮かべているか、分からない。

時々葵は、こんな感じになる。自己の矛盾に思い悩むような、答えが出ないことに困惑するような……。

その感情は分からない。僕は葵がこうなったときには、等閑とっかんに伏すことにしている。有耶無耶にして、なおざりに片付ける。

そうしなければならぬような、気がする。

「風呂、入ってくる」

「……お湯、熱いよ」

「おまえ、熱いほうが好きだもんな」

「お兄ちゃんは熱いの、苦手？」

「どうだろう。そんなこと、気にしたことなかったかな。いつもおまえが、お風呂の温度を調節してくれるから」

「……お兄ちゃんが火傷したら嫌だから、だよ」

「……お風呂で火傷はしないよ、葵」

「……そうかな」

「そつだよ」

乾いた笑声を浮かべて、自室から退室する。背中から感じるのは、妹の視線。粘り気のある妖しげな注視。背後から注がれるそれは、僕の肌を這いずるように知覚される。

怖気るような狂気。度し難い迷妄。

それすら感じる。

## 第七話

午前四時半。

早朝。

薄ぼんやりとした暁あかつきの時刻。朝焼けの空には、雨気あまけのする雲霧うんむが漂っている。その雲間から月輪のような光輝が皓々と射していた。雨模様。

僕は煙っぽい地面を蹴って、一軒一軒、家のポストに顔を近づける。腰周りの袋から朝刊を取り出して、ポストに投函。新聞が雨に濡れることのないよう、朝刊に注意を傾ける。

着々と少なくなっていく新聞紙。鼻をさすのは湿気た雨のにおいだった。

僕はひたすらに疾走する。朝雨が降る前に一刻も早く新聞配達を終わらせた。

ポツポツと雨粒が落ちる。糸のような小糠雨こぬかあめ。それが肩や腕を濡らす。

こちら辺の地形は頭に入っている。中学校に入ると同時に始めた新聞配達。ほぼ毎日のように草薙市の住宅地を奔放している僕は、体力だけは自信があったりする。四、五キロジョギングしているのと変わらないから、それなりに筋肉もついているんじゃないかな。

寝ぼけ眼の視界がさらに劣悪になる中、本日最後となる朝刊をポストに入れた。

一気に脱力感が襲う。

残り少ない体力を振り絞り、我が家へと方向転換。三キロ強はあるであろう道のりを、僕は駆け走る。

と。

鳴き声。

それは、前方から聞こえた。

……犬。

雑種だろうか。湿気で濡れてしまったダンボールの中にちょこんとお座りをしている。二匹。両方とも小柄。おそらく子供なのだろう。

ダンボールには、「拾ってください」と油性ペンで書かれていた。僕が近づくと、その子犬たちははかない声で鳴いた。かげりのない眼で僕を見詰める。その姿は僕の心に哀愁感のようなものを誘った。

ああ、と思う。そのかわいらしくも、あどけない表情。僕の目の前にいる子犬たちは、悩ましげに目を細めて、僕を見上げていた。雨に打たれる子犬。寒そうに体を振るわせる。

ダンボールの前に中腰になる。そして、子犬の一匹を手で抱えた。体毛は冷たく、接触面の皮膚の熱を奪っていく。

子犬は抵抗することなく、僕の抱っこを受け入れる。

段々と雨の勢いが激しくなっていく。僕とその子犬は、静かに雨にさらされた。

「おまえは」

おまえは。

僕は。

ねじる。首の辺りをつかんで、思い切りねじる。

ぎぎいと、骨を削るような音がする。子犬は苦悶の表情を浮かべ、ガスのような息を漏らした。

犬の頭蓋骨。ちょうど手のひらに納まるサイズ。それをがっちり固定して、蛇口をひねるように回した。

ぷるぷると体を弛緩させたり、硬直させたりする。子犬の爪が僕の皮膚を引っかいた。

力を緩めない。僕は片手で子犬の腹をつかみ、もう片方の手で子犬の首をねじ切ろうとした。

やがて。

乾いた音。

僕はすでに物となったそれを、ダンボールの中に戻した。

もう一匹の方に視線を投じる。そいつは何が起こったのか把握できていないらしく、キラキラとした瞳を僕に向けた。その後、困惑したかのように同胞の体に鼻を押し付ける。

僕は無感動に二匹目の子犬を驚づかみにした。先刻と同様に、首と胴体を乖離させる。

皮は繋がっている。

けど、骨はつながってはいない。筋肉の繊維もきつと、二つに分離していると思う。

「おまえは」  
と。

もう一度問う。

おまえは幸せだったか、と問う。

おまえのこれまでの人生は、果たして幸せと呼べるものだったか？  
あるいは、どうしようもない不幸の連続だったのか？

答えはない。呼吸をしなくなった子犬たちは、ダンボールの床に横たわっていた。

当然の摂理。

僕は子犬たちの体温の残る両手を見る。

血に汚れているわけではない。かといって、皮や肉の筋が付着しているわけでもない。

ただ。

紛れもない死の感触があった。それが、呪いのようにこびりついている。

ああ、と思う。そのかわいらしくも、あどけない表情。薄く開かれた目は、もう閉じることはない。それでも負の香りのする子犬たちの顔は、どこか安らかに見えた。

生は矛盾を確約するが、死は安息を約束する。

幸福。

不幸。

それを決めるのは、自分。けど、それを奪うのは、天。あるいは、

世界の万能を司る何か。

そんなあまりにも分かりやすい法則の中で、僕たちは生きていつて、死んでいく。

その連鎖。

……止めよう。

こんなことは代償行為だ。僕の歪んだ欲念。封印したはずの欲求。それが二匹の子犬を死に至らしめた。

僕ははるか遠い山々を遥拝する。肅々と両手を合わせて合掌した。そんな中。

ふと。

思う。

僕の人生は幸福なものだったのかな、と。

僕が家に帰ると同時に、小雨だった雨が車軸を流すようにその勢いを増した。

雨露と汗でべとべとになった服。確かに雨は少量ではあったが、少量は少量でも、まとわりつくような雨だった。だからか、下着は多量に水気を吸っていた。

「お疲れ様、お兄ちゃん」と。

玄関先で葵が僕に、ねぎらいの言葉をかけてくれた。

昨日のような奇妙で面妖な様子ではない。いつもどおりの葵。ただ、服装や髪型が違った。

部活着に着替えた葵は、肩に大きめのバックをかけ、髪を侍のようにつまみ切っていた。あらわになるうなじ。さっぱりとした雰囲気。葵は、僕にタオルを手渡してくれた。

「色々大変だったね。ちゃんと全部配れた？」

「どうにかね。少なくとも、新聞が雨に濡れないよう留意はした」

と着ていたシャツを脱衣。「その分、余計に濡れてしまった気もする」

「新聞紙を庇ったんだ。さすがは、私のお兄ちゃん」と些細なことでも褒めてくれる葵。やっぱり、この子は人が良い。

「そうでもないかと、クレームがきそつで嫌だったからさ。苦渋の選択って奴だよ」

「汗馬かんばの労、ご苦労様でした」と難しい慣用句を口にして、「それよりも、早くシャワーを浴びた方がいいよ。登校までにはまだ、たっぷり時間はあるから」と優しい笑みを浮かべる。

僕は少し嬉しくなって、静かに笑った。

「じゃ、行つてくるね」と葵は靴を履く。すでに靴と靴下を脱いだ僕は、華奢な葵の背中を眼下に納めていた。

「遠征試合だっけ？ バスケはバスケでハードスケジュールだね」

「そんなんだよねー。朝練が早くて、ほんと、メチャクチャ眠い」

「まだ五時だから。眠いのはしょうがないかな」

「お兄ちゃんはすごいよね。いつもこんな時間に起きて、新聞配つてるんだ」

「おまえほどじゃないよ。葵のほうが、僕よりもずっと、すごいと思う」

「私？ 全然すぐくないよ。私はただ、お兄ちゃんの負担を減らせるようにって、お兄ちゃんがもつと楽になるようにって、そう思ってるだけだから……」

葵はそつと呟くように言った。

表情は窺えないが、わずかに見える横顔は薄い朱に染まっていた。後ろから見える、葵の肢体。純真で穢れを知らない肉と、骨と、

血の塊。ここからはよく見えないけど、乙女のような恥じらいを浮かべる葵の面容は容易に想像できる。そのいじらしい笑顔。そして、引き攣るように歪む唇。

人の美醜が一つに収斂たつれいした顔。

健気に咲く生花を見て、その細い茎を折りたいと思う人はいない。

可憐に飛ぶ胡蝶を見て、その薄い羽を筆りたいと思う人はいない。雄渾と泣く赤子を見て、その弱い体を壊したいと思う人はいない。僕は自前の銀髪に指を入れる。その一房を掴み、軽く引つ張った。誓ったんだろ、こいつに。

呪文のように、何度も何度もその言葉を暗誦する。忘れてはならぬと、破ってはならぬと、そう心に刻み込んだ誓い言を。わが身を賭して願った安息を。それを固持するために、おまえは変わろうとしたんだろ。そうなんだよな。そうすると約束したんだよな。

あの人に。

あの人のために。

もうこの世にはいない、彼のために。

葵や相原、そして彼女のためにも、それを戒めたはずなんだよ。二度と噬臍ぜいせいの悔いを残さないよう、あの人に約束したんだ。

「…………お兄ちゃん？」  
と。

葵の心配するような声。

「…………へ？」と間の抜けた声。すっかり正気を失っていた僕は、涙をこらえるように顔に手を当てていた。

「…………なんか変だよ、お兄ちゃん？ 風邪でも引いたのかな」

「…………いや」と僕は碎けた腰で立ち上がり、「なんでもないんだ」と平静を装う。

葵は眉を顰め、唸るような声を上げた。「なんでもないならいいんだけど…………。あんまり無理したらダメなんだからね」

「分かってるよ」と笑みを貼り付け、「それよりも、早く行かないと間に合わないんじゃないかな」と葵に提言する。「朝練」

葵は目に見えて慌てた。「わっ、そうだった！ い、行ってくる

ね、お兄ちゃん！」

「いつてらっしゃい」

慌しい様子で靴を履き終えた葵は、ドアノブをひねって、「いつてきます」と外へ出た。頭の天辺で縛られた長い黒髪が、一個の生

き物のように揺れる。

その微笑ましい光景を目に映し、とりあえず僕は、リビングを抜けて、ベットにダイビングした。

「なあ、よく小学生とかがさ、何で人を殺したらいけないんですかって言うだろ。あれ、一見深遠な命題に見えて、その実、メチャクチャ簡単で暗愚な問いなんだぜ」

朝日影の光る道の辺で、相原庵はやぶから棒にそんなことを言い出した。

朝っぱらから何の用だよ、と悪態をつきたくなるが、いつものことなのでむべなるかな。こういう場合は反発するよりも素直に相槌を打った方が得策だと理解している僕は、「なんでそう思う?」と訊いてやった。

案の定、相原は策士のように怪しげな笑みを浮かべた。

「そう言うおまえこそ、なぜそうだと思っ?」と僕の質問を同じ質問で返す相原。

思わず考え込む。確かに相原の仮設した題目は、考えさせられるものだった。そして、そんなあまりにありふれたことを考えたことなかった僕は、返答に窮した。

腕を動かすのと同じだ。

左腕や右腕を動かすことに、取り決めや意思疎通などはいらぬ。それと同様で、その中に思考の余地は入らぬ。

だとしたら。

だとしても。

「やっぱり倫理観に接触するから、かな。人を殺したら、その人の遺族が悲しむ。また加害者も人殺しの十字架を背負う。それを避けるために憲法と言う形で、殺人を規制した。そういうことなんじゃないか?」

「まあ、一般論はそうだよなあ。けどよお、話はもつと簡単なんだよ」と相原は気味の悪い笑顔を浮かべる。それでも顔が端麗なので、精密な人形のようにも見えるのだった。相原の顔容は、精妙でいてどこか無機質なのだ。

「簡単って言われても」

「とりあえず聞けつて。考えても見てみるよ、紅花よお。その小学生はな、自分を殺されることを勘定してないだけなんだよ。だから、無邪気にもそんな馬鹿げた問いを口にできる。人が人を殺すことに何の異常も感じてない証拠だな。よーく、想定してみる。生物が同族の仲間を殺すんだぞ？ 普通に考えりゃ、十分に異質で、無意味だろ。それが生きるための緊急避難みてーなものだったら、頷ける。理解できるし、許容もできる。けどよお、人間は愛憎やら損得やらで人を殺すだろ。自然界から見てもりゃ、こりゃ、どうしようもない愚行だ。メリツトがない。頑迷固陋がんめいころう。狷介けんかい。狭量。その結果、そんな明白な理ことわりすら感得できない奴が増えるんだ」

相原は冷めた口調で言った。鋭い目で左に広がる田畑を一瞥する。独自の一家言を弁じた相原は、悲しげな顔をした。

「……そうかもしれないね。ためにその小学生の首を絞めてこう言えばいいんじゃないかな？ これでさっきの質問が言えますかって。そういうことだろ、相原？」

相原は小さく笑ったようだった。「そう言うことなんだよ。オレは自分のことを棚に上げて、答えのない問いかけをするアホが嫌いなんだよ。まあ、探究心の発露、あるいは好奇心の開花であるなら、むしろオレはいいと思うんだがな」

「そう言えばおまえ、言ってたな。好奇心のない人間は滅ぶ、とか何とか」

「そのとおりなんだよ、紅花。欲のない人間は世間では善人だとか、聖人だとか言われるだろ？ あれはな、真実じゃねーんだよ。そんなわけがねえ。向上心のない生き物は、即効で滅ぶんだよ。だろ？ これまでに進化を放棄して、この世に生存し続けた生物が果たし

ているか？ いるわけがない。そんなふざけた奇跡は起こらない。欲望は全ての発信源で、知識の源泉なんだ。未知への欲求こそが、人間たる証。だから、欲のない人間は人間として欠陥してるんだよ」その点、相原は謙虚な人間を評価する。慎み深く、従容しよくちゆうな人種を誰よりも尊敬する奴なのだ。

「おまえはさ、何で競馬の馬があんなに速いか知ってるか？」

「知らないよ。おまえみたいに競馬場に行ったことないんだから」皮肉を言つたつもりなんだけど、相原は全然堪えていないようだった。背筋を伸ばし、洋々とした風に僕の隣を歩く。

「あれはな、要約すれば抵抗進化の賜物なんだ。それで、抵抗進化は知ってるか？」

「あれだろ。キリンは高いところにある葉を食べるために首が長くなったとか、そんなの」

「ご明察。生物はそうした障害やら欲求やらに対応して、骨格を変容させ、肉体を変質させ、柔軟な変化を遂げてきた。競馬の馬もな、人間の手によつて、人工的に抵抗進化させられた種なんだぜ」

「確かに、速い馬同士を交配させれば、より速く走れる子供が生まれるって聞いたことがある」

「ああ。人為的にはあるが、そういう過程を経て、洗練された肉体美と、たくましい足を手に入れた。人間もそれと同じなんだ。環境に対応できない奴から死んでいく。厳然たる真理。章々としていく。オレは寝ることと休むことがこの上なく好きだが、平和は争いに突入するための休戦期間。だらけるときはしつかりだらけて、締めるところは締める。それがオレ流の処世術だよ」

ふーんと頷いた。相原の持論は毎度のことながら、示唆に富んでいて面白い。この男は横紙破りの瘋癲男だけど、表裏をなして才気さいき煥発かんぱつの賢人でもあった。

僕と相原は獣道のような通学路を歩いていった。

途中でいかにも不良の体ていをした数名の男とすれ違う。だぶだぶのズボン。ピアス。男たちは小さく相原に頭を下げて、ついでに僕に

も頭を下げた。

推測するに中学生くらいだと思う。学校の方はいいのかな。

そんなことを相原に訊いてみると、「てめえにはてめえの生き方がある」とそんな感じのことを言った。「あいつらはあいつらなりの信念持って生きてるんだよ。それが短絡的で愚かであっても、まあ、脳細胞が化石化した大人が言うほど悪くないとオレは思うんだよ」

「そっか」と僕は納得することにした。

ひよつとしたら、相原の懐の深さがアウトローたちを引きつけるのかもしれない。

目の前には校門が見える。脇には先生が数名立っていて、機械的に挨拶をこなしていた。

僕たちも機械的に挨拶を返して、教室へと向かう。

## 第八話

僕と相原は二組に所属している。二年二組の教室は二棟の二階にあるので、ペンキのはげた階段を上らなければならない。

今日は朝のゼミがない。だからか、廊下には弛緩したような空気が漂っていた。

それは教室も同様で、前の方から入室した僕たちは、自分の机へと向かった。

と。

「おはよう」

いきなり左腕を掴まれた僕は、ブラックホールに吸い込まれるように腕を引つ張られた。

同時に柔らかい感触。

僕は椅子に座っていた不知火サンに抱きしめられた。うなじの辺りに手を回され、おでこ同士がぶつかる。目の前には凄艶な美貌があった。

椅子に座っている不知火サンは、じーっと僕を見る。距離が近いので、額にかかる髪の毛や、せんけん嬋娟な花唇が見えた。

「……おはようは？」

「……おはよう」

「……」

「……」

妙な雰囲気になえられなくなった僕は、視線を泳がせた。横目で相原の姿を視認する。その相原は笑いかみ殺しながら、僕に背を向けていた。そのままどこかに行ってしまう。

と。

僕の両頬を手で挟んだ不知火サンは、僕の視線を元の位置に戻した。再び不知火サンの顔が見える。

「……ほかの人間を見ないで」

「……うん」

「……よろしい」

不知火サンは僕を解放した。引っ張られた拍子に机にぶつけた腰をさする。間抜けな僕。

椅子に腰掛けた状態で、机に突っ伏す。不知火サンはその体勢のまま、もの欲しそうに首を上げて、僕に上目遣いを向けた。

「……何？」

「そういえば、あなたとまだキスを済ませてないなと思って」

「……いいよ、しなくて」

「……一時間目の授業、なんだっけ？」

「生物か物理」

「二時間目は？」

「古典」

「生物準備室つて、よくよく考えたら先生いないよね？」

「どうかな。いるようには見えないけど」

「あそこでしょうね」

「何を？」

そこで不知火サンは、自らの唇に人差し指を当てた。唾液の粘る音と共に、舌なめずりをする。つばを飲み込んだからか、不知火サンの喉が小さく隆起した。

「ワタシね、性欲強いから、ちょっとしたら頭が真っ白になって、紅花君の服を強引に脱がすことがあるかもしれない。そのときはストップかけて。勿論、できる限りの自粛はする。けど、理性が本能に勝てないときもあるから」

「……」

「自分の席に着かないの？」

「……そうだね」

僕は不知火サンの助言どおり、自分の席があるところに向かった。そこで気づく。

僕たちを遠巻きに見る男子の異様な雰囲気。

「きつ、貴様あーっ！ こ、殺してやる……！ 天誅う！ 天誅う！」

「これはいかなるものであるうか、我が高潔たる同志たちよ。永遠の純潔を誓ったものとして、こやつの罪はいかほどに値するか……！」「わたくしめは、即刻死刑を求刑したい所存……！ これは紛れもない大罪！ 万死……これは万死なのです！」

「激しく同意……！ これは歴史まれに見る重罪である！ 秋霜烈日つじつ、志操堅固しそくけんこの理念の下、こやつに断罪の鉄槌を下す……！ それこそ正義！」

「極刑以外に選択肢などない。速やかに刑に処すべきであろう。事実、それを臨むものは大勢いる。当然の処置である」

「もはや一刻の猶予もない！ 後数分もすれば、噂を耳にした同志たちがこの教室にあふれ出ることは自明の理……！ そうなれば一切の収集はつかない！ よって、被告の異端審問を火急に実施……！ そして、公明正大な神の慈悲を持って、この男には断頭台の露となつてもらおう！ それしかありえない……！」

「と云うことだ。被告人、紅花襖。我が同志の百花齊放ひゃっかせいほう、談論風発だんろんふうはつの議論の結果、貴様には大いなる慈愛と恩寵を持って、死罪に処すことが決定した。異論は？」

「異論の何もあるか！ こんなメチャクチャだ！ 僕に人権はないのか！」

昼休み。

僕の在籍する二年二組は、騒然たる様相を呈していた。

僕の席は窓際の一番後ろにある。本来ならば、そこで僕は教科書を出し入れしたり、ぼーっと窓の光景を見たりする。だけど、今回の場合、そうはいかなかった。

僕は炯々と目が光らせた男たちに、拘束され、苛烈な集中砲火に

あっているところだった。

周囲には百八十度男子がいる。どいつもこいつも目をギラギラさせて、親の仇のように僕を睨みつける。両腕を一人の男子に押さえられた僕に、抵抗の余地はない。また、抗弁の余地もない。四面楚歌。僕は孤島のように孤立していた。

「そもそもボクがおまえたちに何かしたのか？ だったら、謝る。謝るから僕を解放してほしいんだけど」

「貴様が謝罪の文句を口にしたところで、我々の怒りは収まることを知らない。例え貴様が土下座しようとも、それくらいでは許されることのない罪を貴様は犯したのだから」

「その、おまえたちの言う罪ってなんだよ？ まずそれが分からない」

その言葉に絶句した男たちは、たちまち怒り心頭、肩を震わせる。すさまじい怒気と悪意が膨張した。

「ふ、ふはははははははは！ そうか、そう言うことなのか！ 聞いたか諸君！ この男はいまだ、自らの過失、罪科について一切の理解を示してはいない！ 諸君はこれをどう解釈する？ 傲慢か、嘲笑か、それとも生来のバカなのか……。どちらにしろ、これは我々に対する挑戦であると認識する……！」

「そのとおり！ もう我慢できん！ こいつを一発殴らせろ！」

「この指が……！ この指が、彼方ちゃんの穢れなき肉体に触れたのか……！」

「落ち着け！ 落ち着くんのだ！ 眼前の小事に惑わされるな！ 重要なのは、紅花のアホがああ、清纯で俺たちのアイドル、彼方ちゃんと身の程を知らずに肌と肌とを触れ合ったことにこそあるのだ……！」

踏み込みの効いたボディーブローを何発もくらい、指と言う指を舐めるように触られ、すっかり満身創痍になった僕は、すっかりグロッキーになってしまった。

薄ぼんやりとする意識の中、そう言うことなのか、と了解。と同

時に、ふつふつと怒りが湧いた。しかしそれは、多大な痛みと度重なる暴言によつて、理不尽に沈静化された。

「……僕は……その」

「なんだ！ まだ言い逃れするのか！ 我々は確かに見たぞ！ 貴様と彼方ちゃんが楽しそうに会話を交わし、抱き合っていたところを……！ どうしてそんなにおいしい思いができる……！ 我々はそのことに憤怒しているのだ！」

「あつ、あれは……ほら、欧米式の挨拶だよ。アメリカは解放的な国だろ。だから、ああやってお互いの体を触れ合わせるんだよ。それが一般的なんだよ」

「なら、一時間目、貴様と彼方ちゃんはどこに行っていた？ 妙にこそそそしていただろうが……！ どうせ、逢瀬でも重ねていたのだろう！」

うつと言葉に詰まる。それを思い出した僕は、かーつと体が熱くなった。

一時間目の休み時間。

不知火サンに手を引かれた僕は、誰もいない生物実験室に連れてこられて、接吻した。

その後のことはよく覚えていない。多分、ずっと放心状態だったんじゃないかな。

「それは、その……！」

「もういい。もういいんだ、紅花。おまえはもうすぐ天国に行くんだからな」

そのやけに優しい言葉に、明確な死の危険を感じた僕は、じたばたとあがく。けど、どうしようもない。僕は俎上うわの魚だった。

と。

「まあ、待てつて」

海を二つに割るモーゼのごとく、一人の男が割って入る。

相原庵だった。

……おまえつて奴は！

かねてからこの世に神様なんていないと思っていた僕は、その考えを改めざるをえなかった。

「おまえらよあ、そんなにむごいことすんなって。もっと穏便に、冷静にいかなくちゃ」

この相原と言う男は、意外に男子の支持が厚い。周囲の男子も手を止めて、相原に意識を向けている。

その中のリーダー格の二年二組委員長、末長クンが、相原の前に立つ。サッカー部の副キャプテンでもある末長クンは、華奢な割りに肩幅が広い。相原と対峙すると、それっぽい雰囲気が出る。

「相原。おまえ、俺たちの邪魔をするのか？ だったら、いくらおまえといえども……容赦はしない」

「いやな、委員長。オレはおまえらの邪魔をしに来たわけじゃねーんだ。そして、宣言しよう。ここにいるすばらしき紳士たちに、一つ、提案がある」

「提案、だど？」

「そつだ。なあ、ちょっと頭ひねりや分かるだろ。こう言うのはな、半端な体罰だとか、生半可な精神攻撃じゃ意味ねーんだよ。やるならもっと、過激に二度と立ち直れないようにしないと。だろ？」

そこで相原は、酷薄な笑みを浮かべる。

一方の僕は、完全に置き去り。と言うより、予想外の展開に呆然としていた。

「つて、相原！ おまえ、何様のつもりだ！」

「何様も何も、オレ様、庵様だろうよ。それよりも感謝しな、紅花。おまえは選択できるんだ。ここにいる男子全員に食堂のE定食を奢るか、ここにいる男子全員にフルボッコ、徹底的に人としての尊厳を奪われるのか。さあ、おまえはどっちを選ぶ？」

「……………」

「まあ、おまえの意向はこの場において反映されない。だろ？ 初めから選択肢なんてなかったんだよ。おまえの生殺与奪の権限は、こいつらが握ってるんだ」と相原は勘気の解けない男子生徒たちを

見やる。

次いで、末長クンに鵜の目鷹の目を向けた。

そして。

「いくら憤懣ふんまんやるかたないおまえらといえども、あの幻、数ヶ月に一度のE定食を交換条件にだされちゃあ、妥協せざるを得ないと思うんだが。オレはあのE定食にそれだけの価値を見出している。中にはE定食を食したことの無い不幸な奴もいるだろう。そこでオレは一つの解決策を提起する。悪い話じゃないはずだ。末長も、E定食、一度は食ってみたいだろ。これでどうにか、こいつを許してやってくれないか？」と今度は僕を指差した。

末長クンは長い間熟考していた。唇を固く結んで、虚空に視軸を合わせる。ほかの男子生徒も、難しい顔をしていた。

やがて。

「……分かった。その条件、呑もう。それでいいな、みんな？」

不承不承頷く男たち。舵取り役の末長クンの意志が固まった今、異議申し立てをする奴はいなかった。やはり、末長クン率いるグループは結束が固いらしかった。

「ただな、相原。それには一つ、致命的な欠陥があることを忘れてはならない」

「欠陥とは？」

「おまえも承知のとおり、E定食は学食の中でもひととき異彩を放つ定食。何せ、俺たち生徒は定期的にそれを食うことができないのだから。その点、おまえの提案した妥協案は、一考に価する。値するが、それはすなわち、いかにしてE定食を確保するのかどうか、と言った問題点を抱える失策でもある。もう昼休みはすでにして十分程度の時間が過ぎている。確かE定食は一日限定三十食と聞くじゃないか。それではとつくに完売しているころだろう。勿論おまえは優れた情報網を持ってはいる。それは認めよう。だが残念。おまえが俺たちに献策した案は、前提条件から破綻している……！」

末長クンの論理的な舌鋒。それは、相原の上げた策の矛盾を指摘

するものだった。

「破綻などしてないさ」と相原はポケットから小さな紙切れを取り出す。「おまえらには想像もつかないだろうな。あのE定食に食券が存在することなど」

末長クンは大きく目を見開く。「ば、バカな！ E定食に食券などと言う埒外な代物があるはずがない。それはまやかした！ 俺はE定食に食券があると言う話なんぞ、聞いたことがない」

「それがあるんだよ、末長。これはな、オレが水面下で食堂のおばちゃんに交渉に交渉を重ねた、いわばリーサルウエポン。本来ならば存在しえない、幻の食券。オレはそれを秘密裏に十枚、用意した。ちようど紅花を除く男子、全員分ある。これで分かっただろ。おまえらはこれを受け取るしかないってことが」

末長クンは僕と相原の持つ食券を見比べた。きっとその両方を天秤にかけているのだろう。

それがどっちに傾くのか。

どちらにしても、僕はひどい目にしか遭わない。とことん肉体的精神的に痛い目を見るか、財布の中を空っぽにさせられるか。僕にはそのどちらかしかない。しかし、通院代を考慮すれば、後者の方がまだましかもしれない。けど、それはそれでイヤだ。もう、板ばさみって奴じゃないか。

「……そうだな。俺たちも一時の感情に振り舞わされるだけじゃダメだ。どうせこんな銀髪男なんぞ、後何日かすれば、愛想をつかされる。幻滅されて、失望されて、あつという間に破局。目に見えている。だから、俺たちは相原の策に乗るべきだと思う。どうせならポジティブに行こう。紳士たるもの、他人の幸せばかり羨んでも仕方がない。紅花とか言うキザったらしい名前の男なんか忘れて、今宵は楽しもうじゃないか」

その言葉を合図に、一堂が沸いた。そうだそうだと、激しい歓声。「とまあ、そう言うことになった。おまえには悪いことをしたな。

て言うか、さっさと彼方ちゃんと別れるよ。おまえは顔だけはいい

んだから、もつと別の女を作りやがれ、コンチクシヨウが！」

あのねえ、と反論したくなつたが、口を閉ざす。話は悪くない方向に進んでいる。少なくとも刃傷沙汰にはならない。ここで耐え忍べばいいのだ。ここで耐え忍んだら、相原の奴を心残りのないよう張り倒してやる。

僕はそう固く誓つて、財布の中のお金を全て失つたとき。

## 第九話

大切なものは失った後に気づく、といった箴言しんげんがある。  
やはりそのとおりだった。

「すっからかん……」

財布を逆様にしてみても、ピタ一枚出ない。さすがに十人分の定食を賄ったのだから、当然ともいえる結果。僕の全財産はたちまち底を尽きたと言うわけだ。

僕は体育館の倉庫裏にいた。大きい石段の上に座って、じつとしている。と言うのも、私財を投げ打ったはいいが、まだまだ僕に恨みを持つている奴は大勢いる。僕はそいつらから逃げるために、やむを得ずここに退避してきたのだった。

ここなら、人気もないから大丈夫。

倉庫の壁に背中を預けて、ぼんやりする。頭上には晴れた青空。雨雲はすでにどっかに行っていて、蒼穹の天上が澄み渡っていた。

僕は教室に行ったら男子たちに待ち伏せをくらうんだろうなとか、それだったら鞆の中にある弁当を食べられないなとか、作ってくれた葵に悪いことしたなとか、ひよっとしたら相原は、E定食をただ飯するために僕を利用したんじゃないかなとか、色々なことを推測、邪推して、野鳥の囀なげりに耳を澄ませていた。

そこに僕の仰視を遮る何か。

それは人の形をしていて、女子の制服を着ていた。

「……不知火サン」

「ん。元気ない」

不知火サンは僕の隣に腰を下ろした。

僕は自嘲のようなものを浮かべて、「そう見えるんだ」と言った。「見える」と不知火サンは僕に惱殺の流し目を向けた。「それと、お腹空いてるの？」

不知火サンは僕がずっとお腹を押さえていることに気づいたらし

かった。事実、空腹で死にそうだった。

頷くと、「ちよつと待つてて」と不知火サンはどこかに行つてしまつた。

数分後。

「食べて」

不知火サンは僕にカレーパンとアンパンを手渡した。きっと購買部のものだろう。

僕はあわててポケットから財布を出そうとする。けれど、中身が空っぽであることにも気づく。

「その、お金は？」と僕は尋ねる。もしかしてこれは、不知火サンが自腹を切つて購入したものなんじゃないかな。

だとしたら、罪悪感。

再び僕の隣に座つた不知火サンは不思議そうに首を傾げた。「お

金……？」

「何円だった？ ごめん、僕今、お金がないんだ。後で必ず払う」

「いいよ。払わなくて。お金なんか、ほしくない」

「ほしくなくても払う。やっぱり金銭関係はしっかり清算すべきだと思つから」と不知火サンの瞳を凝視する。やはり人間関係を破綻させる原因といえば、やつぱりお金だと思つ。お金は人を惑わす魔力を持つているから、なるべく早期の解決が望ましい。それは常々思つていることだった。

そんな廉潔れんけつな志で不知火サンを見ていたら、「あんまり見詰められると、恥ずかしい」と言つた声に体がか一つとなる。僕は瞬時に目を逸らした。

なんとなくバツが悪い。それを押し隠すように、むしゃむしゃと無遠慮に、パンを食はむ。不知火サンが買つてきてくれたと言つのに、それを我が物顔で食べる。申し訳が立たない。僕はすぐさま、パンを食べるのを止めた。

一方の不知火サンの呼吸は、徐々に荒くなつていった。熱っぽい視線が僕の体を舐めるように動く。

「……おいしい？」と問いかける。不知火サンはパンと、僕の口元を見ていた。

「うん。けど、ごめんね。不知火サンに、いらぬ負担をかけちゃったみたいだから」

「いい。楔君が幸せそうだから、ワタシは満足」

そこで楚々とした笑みを浮かべる。なるほど、クラスの男子が夢中になるのもよく分かる。

僕は暫時口の動きを止めて、パンの一切れを引きちぎった。それを不知火サンの口元にやる。

不知火サンはちよつと驚いたようだけど、僕の意図を理解してくれたのか、そのパンを手で掴む。のではなく、僕の指ごとくわえ込んだ。一かけらのパンと一緒に、僕の指が不知火サンの唾液で絡まる。

僕は珍妙な悲鳴を上げて、背筋が寒くなった。まるで極寒の地で日射病に罹患りかんしているような感じ。そんな噛み合わない感触と、体の芯から蝕む妖しげな熱。不知火サンの反応がまったく予想外だった僕は、猛烈に変な気分になった。

「ん」と僕の指を爬虫類はちゅうるいのようになめずる不知火サン。パンはとくに噛み砕かれ、食道を通過している。けれど、一向に咀嚼を止めない。むしろ僕の反応を楽しんでいる節がある。

こんなことしなくちゃよかった、とは思わないけど、爾後控えよう、くらいには思う。不知火サンは僕の想像する女性像とは、いささか乖離しているようだった。

「……不知火サン」

「……ん。さすがにふやけてきたね」

僕の指から口を離れた不知火サンは、すっかり唾液まみれになった指を見て、相好を崩した。

「あのねえ」

「なに？」

「何ってわけじゃないけど……。うーん、説明しづらい」

「……こうしてもらいたかったんじゃないの？」

「それは違うと言える」と断言する。そんなことはない。諸事情から理解の箍が決壊しそうだったけど、それは違うんだ。

そこで不知火サンは、「興奮してたくせに」とからかうように言い放つ。

僕は羞恥心で身を縮こまらせる。なんだから、自己弁護に執着する自分が下卑た存在に感じられた。

「けどね」と不知火サンは僕の手をつかんで、自分の胸に導く。そして、躊躇いなく胸部に手をあてがわせた。「けどね、楔君。ワタシもね、ほら、心臓バクバク。興奮してるのは、ワタシもだよ。だからね、ワタシも楔君と一緒に。楔君もね、あんまりワタシを甘やかすと、色々大変。それにね、そんなに無防備にされると、襲いたくなる。あーなんかされたら、ワタシ、発情する。発情して、あなたの体をまさぐりたくなる。楔君の口の中に舌をねじ込んで、髪の毛を掴んで、汗を飲み干して、体中を舐め回して、ぎゅってしたい。けど、それはダメ。楔君の意思を無視してるから。ワタシは楔君の体もだけど、楔君の心もほしい。独占したい。全部、ワタシだけのものにしたい。ワタシだけを好きでいてほしい。それと、やっぱり初めては、コンクリートの上よりもベットのほうがいいと思うから。それとも……こういうところするのが好きなら、ワタシもそれに合わせる。勿論、ワタシもこういうところするほうが、興奮するよ」

「しないってば」

「なら、ベッドの上のほうがいい？ ああ、それと、楔君は前戯くらいなら、こういうところでやっても許せる人？ 手を繋ぐとか、チューするとか、他人の前でするの、イヤ？ ワタシは楔君以外の人間はどうでもいいから、特に気にしない。けど、楔君はどうかかな？ 楔君がイヤな思いするなら、ワタシ、我慢するから。だって、強引に自分の想い押し付けるのは、愛とは違うと思うから。そんなの傲慢。ワタシは真剣に、純水に、楔君を愛したいから」

淡々とした口調。不知火サンは神妙な面持ちで、僕の気の抜けた顔を見やった。

さらさらと、葉が風に舞い上がる。

一瞬を切り取ったような静寂。

僕は頭をかいだ。その、ものすごく、恥ずかしくなった。そして、幸せな気持ちになる。

形のないものを言葉にすると、とたんに陳腐なものに感じられる。愛情とか友情だとか、そんなものは自分の心の中で現出するものだから、どうしても拙い風になってしまう。

不知火サンのそれも、なんとなくたどたどしい。けど素朴で、不純物のない、感情の発露。激しい熱のこもった情動と、あふれ出る何か。きつとそれは、人として大切な感情。

それを持つてる不知火サンはすごい人で、自分なりの言葉でそれを表現しようとすることは、尊いことだ。

「……僕ね」

「うん」

「……いや、いい。その、不知火サンの気持ちは分かった。僕を好いてることはすごく分かった。嬉しい。なんか、これまでの大変な人生が報われたって感じ」

「お墓参り、行こうね。ワタシも、楔君の天国のお父さん、お母さんに会って、挨拶しなきゃ、だから。勿論、恋人として」

「お盆のときに行こうか。そのときは妹も一緒に」

「……うん」

不知火サンは少し渋い顔になった。苦虫を潰したような表情。左手が熱い。

どうやら、いつの間にか不知火サンの手が伸びていたようだった。僕の指に複雑に絡む。不知火サンの熱と僕の熱が相互に交換し合っていて、肌と肌がじんわりと火照った。同時に汗も絡んでいく。渾然一体とした感覚だった。

不知火サンは、手をつないだまま、緩慢な動作で立ち上った。そ

のまま僕の真正面に移動する。その後、もう片方の手で僕の肩を掴んだ。肩が軋むくらいの強い力。わずかに痛覚が伴う。そして。

「動かないでね」

不知火サンが逆光を背景にして、肉薄していく。それでも、瞳の動きや、唇の照り具合、眉毛の痙攣など、ある程度は感知できる。不知火サンのそれは、小動物を捕食する肉食動物のようだった。

そして。

距離はゼロになった。

唇と唇が重なって、息ができなくなる。不知火サンは押し付けるように、唇を前につき出し、体をより前傾させた。繋いだ手を離して、僕の首に手を回す。そうして僕の体を自分の方にひきつけた。

口蓋が異物の存在を察知する。それは向こうから伸びてきた不知火サンの舌で、僕の口内を探索した。歯並びを確認するように、舌を歯や歯茎に滑らせる。不知火サンは僕に唾液を喉奥に注ぎながら、僕の舌端を捕らえた。同時に、僕の唾液をすすって、自らの体内に吸引して、飲み干した。

肩をつかむ力も、衰えない。肩を挟み潰す勢いで掴む。病的な力強さ。きりきりと骨が嫌な音を立てる。

獲物の体内を蹂躪するように、舌と舌を絡める。僕は腰が抜けそうになった。それくらい、不知火サンの接吻は強力だった。不知火サンは長い時間をかけて、僕の口内をかき乱した。

「……ごめん。押えが利かなかった」

「……その……すごく、情熱的、だった、ね」

一気に体力を持っていかれた僕は、コンクリート製の石段の上で脱力した。満身創痍。口の中はぐちゃぐちゃで、僕のものではない液体が口腔に溢れていた。

僕の前で座り込んだ不知火サンは、唾液をぬぐってから、それを口に含む。「やっぱり、唾液って味、しないんだね」

「……しないよ。少なくとも、フルーツ味の唾液はないだろうね」

「ご飯食べるときに、リンゴの味がしたら、イヤだよな」

「肉や魚だったらいいんだけど」

僕たちは示し合わせたように、静かに笑った。ただ、不知火サンはけろりとしているので、なんとなく理不尽なようにも思う。一時間目の休み時間のときも、不知火サンとの接吻が余りに強烈だったように思う。そういうのに全然耐性のない僕は、抜け殻のように気を使い切ってしまう。

「楔君って、ファーストキスの相手、誰？」

「うーん、確か……葵だった気がする。小一のとくに遊び半分でしたよな」

「……そう。ワタシじゃないんだ。すこーし、すこーし、残念。けど、これ以降、あなたとキスする人はワタシだけだから、気にしない」

僕は頬をぼりぼりとかく。そう真っ向から言われると、僕だって羞恥心がある。

そう言う不知火サンは、平生どおり無表情だった。ここ最近、不知火サンを見てきたけど、思いのほか不知火サンは表情を表に出さない人のようだった。「不知火サンって、感情をあまり表に出さない人？」

「楔君が笑えって言えば、笑う。泣けって言えば、泣く。喜べって言ったら、喜ぶよ」

「……やっぱり、意志の疎通は難しい」と僕は渋面を作った。根本的に話の趣旨を違えているような気がする。僕の質問は少し失礼なものだったかもしれないけど。

「そういう楔君も、感情をそれほど表に出さないよ」

「ふーん」となんだか自分の知らない一面を発見したようで、「そうなんだ」とちよつとびっくりする。確かに僕の表情は硬いのかも。しれない。

と。

不知火サンは。

「ワタシといるときだけ、感情を表に出していいから。ワタシ以外の人に、嬉しいと思ったり、怒りを覚えたり、悲しいと思ったり、楽しいと思ったりしたら、ダメだよ。無表情でいい。楔君がワタシ以外の人と関わらずに、ずっとワタシとだけ関わって生きてくれたら、ワタシは満足。無理は言わない。やっぱり、楔君も人間だから、一人の人間だけを優先するのは難しい。ワタシもそう思う。ただ、そういう努力はして。ワタシも、可能な限り、楔君を優先するから。楔君も、可能な限り、ワタシを優先して。絶対だよ?」

不知火サンはぞつとするように深い目で僕を注視する。舌なめずりを何度もして、僕の肩を撫でる。

「ワタシはね、できることなら、二人で山小屋にこもって、ずっとそこで暮らしたい。世俗から離れて、二人っきりで生活していきたい。けど、財政的に無理。どうしたって食糧の問題だとか、収入の問題がついて回る。それは必定。<sup>ひつじょう</sup>明白。だから、ワタシと楔君が自立できる年齢と能力を得たら、すぐに結婚。ワタシ、大学いかずに働いてもいい。楔君も大学に行きたいなら、そう言って。やりくりする。注文があるならそう言って。こなすから。楔君も縛られるの、嫌でしょ? 細心の注意を払うから。だから、なるべくワタシと一緒にいて。ワタシとの時間を重視して。ワタシとだけ一緒にいて。なるべくでいい。そのなるべくの範囲内で、私以外の人間と最低限の関わりで、ワタシとだけ最大限関わられるようにしてくれたら、幸福だから。多分それがワタシ最大の幸せ。そうやって、永遠に楔君と暮らすのが最善。こんな風にイチヤイチャして、静かに生活できればいいなって思ってる」

「……ふーん。そう」

「やっぱりね、愛は重い方がいいよ。ちょっとくらい行き過ぎてる方が、むしろ人間らしいと思う。ワタシも、ちょっとだけ、ちょっとだけ、自分の変なところを認識してるけど、それほど変に感じたことはないよ。人が人を愛するって、それくらいの意味があると思うから。少しくらい極端でも、それはそれでいいように思う。愛は

盲目って言うことわざもある。だから、変な奴とか言っつて、ワタシを遠ざけないで。メンヘラ女とか、言わないでね。ワタシ、こんな男の人を好きになったの初めてだから。前まではそんなに男の人に興味なかった。アイドルもジャニーズも、興味なかった。けど、楔君見て変わった。この人がほしい、ワタシだけのものにしたって思った。それくらい好き。なんか、もの扱いしてごめん。そういうつもりはないから。ワタシはその……この人と一緒にいたら幸せだろうなって、思っただけ。そんな小さな欲求が色々な感情に結びついて、拡大して、膨張して、どうしようもなくなった。恋焦がれた。……女の人がこんな風に男の人を好きになるって言うのも、おかしい話かな？ 変態っぽいよね、ワタシ。ここまでいくと、執着に近いかな。ほかの人だったら、こうはならないんだけどね。きつと楔君はワタシにとって、代えの利かない人になっちゃったんだよ。

不知火サンはふつと笑って、僕の手を再三再四握った。暖かい手。ヒーターの火元のような高温を発している。風邪を引いているわけでもないのに、熱っぽい。

表裏をなして、熟れた果実のような甘い匂い。蠱惑的な香氣こわくてき。それは穏やかな眠気を喚起するような幻妖を感じさせる。

脈動する心臓が放出する柔らかい体温。

食虫植物が発するようなとろりと甘い芳香ほろいじ。

不知火サンは妖花のように深々として、落ち着いていた。それでも、体の節々が小刻みに動いている。それは蠕動する虫ぜんどうのようでもあった。

「……あとね。浮気とか、したらダメだよ。ほかの女の人と会ったりとか、無用なお話をしたりとか、不要なボディタッチとか、ダメ。ワタシ、許さないよ、そんなこと。勿論、絶対とは言わない。どうしたって無理がある。不可抗力って言うのはあるし、そんなことをしないといけないこともある。それは分かってる。けど、そういうのはなるべく控えて。ワタシも、そう言うことはしないから。」

だから……覚悟決めてね。ずっとワタシといるって、誓ってね」

不知火サンは体を寄せて、僕の肩にしな垂れかかった。安らかに瞑目して、硬く僕の手を握り締めた。

腰のあたりまである髪が、僕の肌をつつく。微風にはためく髪は、流麗で艶やかだった。

他を凌駕する美貌。

他を卓絶する歪み。

二律背反のそれを併合させた不知火サンは、何かを欠陥させた美しさを煌かせていた。ひよっとしたら、こういうアンバランスさが異性を魅了するのかもしれない。噂によれば、学園内には不知火サンのファンクラブがいくつが存在しているらしい。先ほど僕に理不尽な断罪を下そうとした末長クンも、ファンクラブの一員なのだろうだ。

理解を超えた造形美は、人の心にダイレクトに衝撃を与える。

不知火彼方と言う人間はまさにそれで、常識や倫理観と言ったもので濾過されない。

生物の持つ無軌道な力。荒々しく猛る感情。暴力的にも思える愛情は、時として強烈なカタルシスを感じさせる。

老鷲おいづくいすの唳れた鳴き声。地平線に向こうには瀬戸内海みなもの水面がある。昼休みの終わりを告げるチャイム。山間まで響く。

「……戻ろっか」

「……うん」

僕と不知火サンは立ち上がる。直後、すがすがしい山嵐。木の葉がぱつと舞い上がる。

紺青こんせいに染まる空。僻遠へきえんの雲は、どこからともなく放浪していつてどこからともなく彷徨ほうこうしていった。

雲は一種の道しるべのようなものだと思う。勝手気ままに天を遍歴する白雲は、自由の象徴だった。それを縁よすがに、無知な僕たちはこの広い世界の中で生きていく。

自由に生きたいと、そう思いながら。

幼いころの僕は、蒼然とした空に浮かぶ入道雲に、淡い郷愁感のようなものを感じていた。

空を見上げるだけで何かが変わるような気がして。

僕はあの人の家の縁側で、飽きることなく浮雲を見ていた記憶がある。頭の奥に埋没した、追憶の欠片。懐かしさと苦いものが同時に想起される。僕の過去はあまりにも常軌から逸していたような気がする。

結局、何も変わらない。群青の空を眺めるだけじゃ、何も変化しない。

それでも。

その様子を葵は楽しそうに見ていたし、相原に限っては猛烈な勢いで僕をバカにしていた。氷雨ひなめさんは僕の隣に座って一緒に空を眺めていて、時雨しぐれさんはいつも僕たちにお菓子を振舞ってくれた。

ずっと昔の、僕たちの片鱗。もう戻らない、遠い記憶。

だからなのか、雲の峰が湧く深碧は、果てのない夢の広がりを感じさせるんだ。

「……どうしたの？」

「……ん。ああ、ごめん。ちょっと思い出してたんだ」

「なに？」

「二千年に地球が減ぶとかなんとか」

## 第十話（前書き）

葵……『源氏物語』五十四帖の巻名のひとつ。第九帖。巻名は光源氏と源典侍の歌「はかなしや人のかざせるあふひゆえ神のゆるしのかげを待ちける」および「かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを」に由来する。

## 第十話

最近、兄の様子がおかしい。

言動が変なわけでも、頭のネジが抜け落ちていると言っわけでもない。

ただ。

なんとなく。  
変。

それは非常に些細な変化。時折、食事の手を止めて、思い出したかのように静かに笑う。ただそれだけ。

それだけの変化が、私の心に奇妙な隔たりを生む。

食卓についているのは、私と兄さんの二人。四つある椅子のうち  
の二つを使っている。残りの二つは、空席だった。

このような現状なもの、我が家の複雑な家庭事情が原因だった。  
両親を二人とも失った私と兄さんは、いつもこうして食事を摂って  
いる。

違和感はない。

と言っより、慣れてしまった、と言ったほうが適切かもしれない。  
私も兄さんも心に深い傷を負ってはいるけど、それは時間が解決し  
てくれた。幾許かの寂寥感を覚える程度。少なくとも渡世は貧窮す  
ることなく、暮らしは思いのほか安定している。祖父母のお金の給  
与により、一時期は窮状に瀕していた紅花家の家計は、狂瀾を既倒  
に巡らすように回復していった。

オレンジ色のテーブルクロスが引かれた食卓。その上にはいくつ  
かの皿。私が愛と真心を込めて作った手料理。それが兄さんの口  
中に運ばれて、歯で噛み砕かれ、咽頭を通過し、食道を巡り、胃に  
よって消化される。そうして私の情愛が兄さんの体内に溶け込んで  
いく。

兄さんは箸できゅうりを挟み、口元に運ぶ。その後、魚の切り身

を箸で崩した。

兄さんは肉類があまり好きではない。草食動物のように野菜を好む。なので、私と兄さんの食膳はほとんどが魚料理。長年、兄と二人つきりで生活していただけに、兄さんの好き嫌いは全て把握していた。

音もなく、会話もない夕餉の膳。テレビの音もなく、外から漏れるトラクターの轟音もない。

それでも、雰囲気は柔らかで心地よかった。それは一重に、兄さんの溫柔な気質が起因しているのだと思う。兄は物静かな人で、周囲の人を落ち着かせる力を持っていた。

「やっぱり、葵のご飯はおいしい」と。

兄さんは静々と笑う。銀髪の間から見える瞳。渺々とした広がりを見せるそれは、透明すぎる水晶のようだった。

「そう言ってもらえると嬉しい」

「前々から思ってたんだけど、隠し味とかあるの？」

「うーん。まあ、一応、あるよ」

兄さんは感心したように、「なに？」と問いかける。

「どうだろう。強いているなら」

私の髪の毛と血。

「強いているなら？」

「秘密。それを言ったら隠し味じゃなくなるじゃん」

それもそうかと呟いて、兄さんは食事を再開した。お椀に盛られた白米を、おいしそうに食べていく。

「そういえばお兄ちゃん」

「ん。なに？」と白米を食べるのを止める。口元に米が一粒ついてるあたり、兄さんはかわいい。

「冷蔵庫の食料が少なくなってるから、明日、お兄ちゃんとお買い物に行きたいなって」

兄さんは難しい顔をする。「いいよ、僕一人ですから。葵も部

活やら家事やらで忙しいだろ。僕が下校中にスーパーによれば済む話だ」

私は少し困惑する。そういうつもりで言ったわけじゃない。私の目的は食品の確保じゃない。もっと本質的で根源的な、そう。

それは。

「……お兄ちゃん」

兄はきよとんとした風になる。私はその面頬を、目を細めて注視した。同時に胸中で慨嘆の息を漏らす。隔靴搔痒かつかそうようとしたもどかしさ。兄は常に私の予想の斜め上に行く。

けど、兄さん。

ちよつと寂しいよ。

「……明日は部活、ないから。だから、お兄ちゃんと一緒にスーパー、行けるよ。それでいいよね？」

「部活動の遠征は？」

「遠征は明後日あした。明日はそのための療養期間。部活はありません」ときっぱりと断言。野菜をバリバリと歯ですり潰して、「それともお兄ちゃんは、私と一緒に買い物に行きたくないんですか？」と陰のこもった声色で尋ねる。

言いすぎかなと、僅少ながら思う。けど、兄さんは無意識に私を突き放すようなことを言う。悪意や害意がないことは分かっている。それでも、そう言うのはダメなんだよ。私と兄さんの間に隔たりを生むような、そんな言葉は。

やはり、相生あいおいの仲をわかっ扨格かんかくとなりうる。私を氣遣きぢって出た言葉でも、私は悲しい気分になるんだよ。

兄は私の剣呑な態度におされたのか、戸惑った様子だった。縹渺ひょうびょうとした瞳は丸くなり、幼子のようなあどけなさに揺れる表情。

はつとなつて、「ごめん」と謝る。「ひどい物言いだっただね。お兄ちゃんは悪くないのに」

「いや、そうだね。一緒に行こうか。最近、おまえと一緒に外出したこと、なかつたしさ」と兄は凜々と笑う。

とたんに怒気は抜けていく。私はへなへたと全身の力が抜けていった。

兄は再三再四、私の粗餐そさんを食していく。腕によりをかけて作った私の愛そのものが、兄さんの心臓、肺臓、肝臓、腎臓、脾臓ひぞうの五臓の糧となり、大腸、小腸、胃、胆、膀胱ぼうこう、三焦さんしゅうの六腑の源となり、兄さんの血肉となる。摂取されていた栄養や愛慕が、兄さんの肉体を成り固めていく。

穏やかな食事風景。向かい合って座する私と兄は、小皿に手を伸ばしたり、江湖こうちうの話に花を咲かせたりした。

その様子を眺める。

兄さんを見て幸せな気分になった私は、忍び笑いを漏らした。表裏をなして、陰鬱な想いが澱となって心の底に沈んでいった。

「お兄ちゃんは」と。

「お兄ちゃんは、好きな人、いる？」

小休憩のような沈黙の合間を縫って、そんなことを訊いた。

表出する違和感。それを訊かずにはいられない。しかしながらそれは、私にとって都合の悪い事実を突きつけられる危険性をも孕んでいた。

それでも、意を決した。兄妹としての爾汝にじの関係が少し崩れようとも、それを確認しなければ、このモヤモヤは消えてくれそうにもない。これはちよつとした賭けだった。

私は見極めるように兄さんを見た。私の兄は静かに箸を止めた。

そして。

言う。

「いるよ、好きな人」

「……誰？」と内面の懊悩を押し殺して、問う。心がひび割れそうになるのを、どうにか耐え忍ぶ。私の心は今にも瓦解してしまいうだった。

「勿論、葵だよ。葵が世界で一番好きだ。そうに決まってるだろ」

兄さんは目性を和らげた。幸せそうに食事を再開する。

「そうだね……。好きって言うより、愛してるって言ったほうが正しいかな。唯一の家族なんだから、確認する必要もないと僕は思うんだけど」と照れたように笑う。自分の言ったことに恥ずかしさを覚えたのか、兄さんは目線を下げた。

その言葉にすっかり骨抜きにされてしまった私は、締まりのない笑みを浮かべながら脱力した。もしかしたら、私のとりこし苦勞かも。そう思えた。

兄さんは何事もなかったかのように冷奴ひやっひを食べた。崩した豆腐が兄さんに咀嚼されていく。

それは暗に、その話はもう終わったと言っているような雰囲気だった。

眠いのか、大きく口を開けて欠伸をする兄さん。兄は弛緩しきつた様子で私や皿を見ていた。

私は深く話を掘り下げたかったけど、今の兄さんはダメだ。気が抜け切っている。この場合の兄さんは完全にだらけきっているので、ちゃんとした返答が期待できない。しっかりものの兄さんは時々こんな風になるのだ。

私といて安心している、と思えば自然と顔は綻ぶ。考えてみれば、兄さんは私以外の人間にこんなふ抜けた様子を見せたことはないように思えた。強いて言うなら相原さんくらいか。しかし、相原さんは同姓なのでノーカウント。信頼できる異性。いいポジション。

私は先ほどの言葉を脳内テープに記録して、ご飯を口に含んだ。

夕飯を食べ終えた兄さんは入浴するために、脱衣所に向かった。私はいつものように兄さんの服を、脱衣所の籠に入れておく。

薄い膜の張られた壁越しに、湯気の立つ浴槽と人影が映る。蒸気で曇ったガラス。それが曖昧な浴室内の様子を、淫らに想像させる。

私の頭の中では、卑猥な妄想と血肉踊る幻想が鎌首をもたげていた。私は洗濯機の前であちら側の世界を凝視する。揺曳する水蒸気。杳として不明瞭な形をした影絵。扉一枚を隔てた指呼の間。じつと目を見据えて、全神経を双眸に集中させる。私は浴室の扉に限界まで頬を押し付け、耳を済まし、目を凝らした。と。

浴室の扉から離れる。忸怩たる想い。湧き上がる情動。汚濁した罪の意識。牝としての興奮。抑えがたい。

もはや、逃れられない。

目の前には、禁忌の境界線。

その境で揺れる私。

転ぶ先は。

温い安寧か。

深い深淵か。

私は。

洗濯籠に入れられた、兄さんの服。数分前までは兄が着用していた衣類。無自覚にそれに手を伸ばす。それからは乳製品のような甘いが漂っていた。

鼻先に押し付ける。

感じる。

兄さんの匂い。

兄さんの香り。

兄さんの体臭。

兄さんの気配。

ひどく官能的で、脳髓を直接揺さぶるような衝撃。糖度の高い果実のような薫香。それは樂園に実る林檎のように禁断に満ちていて、うっとりするような情緒が体の底から沸きあがった。

犬のように頬をこすり付ける。兄さんの残り香。私の肌は粟立つように鳥肌が立っていて、糜爛した熱が全身を包み込んだ。

……兄さん。

兄さん、兄さん、兄さん！

私は兄さんの服を強く抱きしめる。私の滴る唾液が服に付着して、兄さんの下着のにおいをかいで、右手が勝手に下半身に伸びていて、儂い喘ぎ声を出して、興奮は絶頂に達して、軀の解かれた肉体は本能の赴くままに己をむさぼって、食らって、壊れていって。

腐敗していく私。

爛熟していく私。

淪落していく私。

退廃していく私。

滾々と湧出する悪念。悪意にも似た狂気が鬱勃していく。貪婪。

破戒。墮落。破綻……。

実の兄に欲情する妹。ばれないように兄の私物を溜め込み、あるうことかそれを自慰の道具に使い、己の情欲を倫理から逸した方法で解消して、兄さんを快樂の糧にして、体の渴きを潤して、兄さんを弄んで。

私って気持ち悪い……。

「葵」

と。

くぐもった声。

それは一枚の板に隔てられた向こう側から聞こえた。

私は慌てて兄の服を手放し、背筋を伸ばした。それはさながら悪戯が見つかった童子のようだった。

「石鹸が切れてるみたいなんだ。持ってきてくれないかい？」

「はっ、はい。分かりました」と上擦った声。不自然な丁寧語。

私は熱っぽい体を稼働させて、洗面台に併設してある小さな押入れのようなところを開けた。中にはうねる配管と、生理用品。そこから箱詰めされた石鹸を取り出す。

一瞬躊躇するも、「は、入るよ」と一言入れて、ガラガラと浴室の扉をスライドさせた。

煙る水蒸気。ユラユラと陽炎のように揺れる。  
その真ん中。

「……お兄ちゃん」

「ごめん。ありがとう」

兄は私に背を向けて、小さな台の上に座っていた。下肢にはタオルがかけてある。

水滴が滴る銀の髪。顎あごからポタポタと雫が落ちていく。わずかに背を丸め、鏡越しに私を見詰める兄さんがいた。

私は後ろ手で差し出された右手に、石鹼を乗せる。ふいにそのまま、兄の手をつかみたくなる。猛烈な性欲。対象が目の前にいるのに手が出せないいらだち。フラストレーション。

……早く食いたい。

「ん。葵？」と立ち尽くす私を不思議がる声。二重まぶたの隙間から、万華鏡のように幽暗な眼球が私を覗き込む。

「あ……お兄ちゃん」と意識を取り戻す私。思考が正常に立ち返る。うん。大丈夫。落ち着け、私。深呼吸だ、深呼吸……。

「す、すぐに出るね。その、私……ちよつと目眩がして……」

その言葉を聞いた兄さんは、薄く笑ったようだった。「葵はがんばりすぎなんじゃないかな。もう少し肩の力を抜いたほうがいいと思うよ」

「に、お兄ちゃんこそ、あんまり体を酷使しないようにね」

「ご忠告ありがと。肝に銘じとくよ」

そう言っつて、頭を下げる。兄の視線は曇った鏡からタイルに落ちていった。滝に打たれる山伏やまぶしのように、兄は微動だにしない。

それが暗に、私を拒絶しているように思えて不快な気持ちになる。兄にそんなつもりはないとは思っつ。けれど、やはり疎外感のようなものを感じる。

兄は他人と群れるのを嫌う。基本的に一人で行動して、全部一人で済ませる。他人に頼らない。兄にはそんな傾向がある。

デイスコミュニケーション、と言っつわけではない。かといっつて人

見知りする性分しやうぶんでもない。単純に人と関わることをしないだけ。それは例えば、兄の携帯電話でも顕著に現れる。兄の携帯には、ほとんどメールアドレス等が登録されていない。必要最低限の人の連絡先のみが記載されている。妹である私は当然としても、該当者は肝胆相照らす仲の相原さんくらいしかいない。しかしながら、相原さんは揺籃時代ようらんから兄さんと刎頸ふんけいの交わりを結んでいるので、当然とも言える。

それと……。

それを考えるのと同時に、鈍い怒りが沈殿する。

黒々とした私憤。

鬱々とした呪詛。

陰々とした害意。

耐え難く、度し難い。

その痛み。

それは自分だけの宝物が蹂躪される感覚と似ている。どちらから歩み寄ったのか。兄さんか、それとも何某なにがしなのか。

……兄さんは。

兄さんは全ての人に例外なく優渥ゆうあくだった。寛大で鷹揚おつよう。反面、超然としていて、どこかずれた感じのする人でもあった。それは表層にこそ出ない。と言うか、兄さんはのべつ幕なしに低血压気味なので、それに隠れているだけなのだと思うけれど。

「……おまえ、本当に大丈夫？ ずっと立ち尽くしてるけど……」

「……あつ」と私は顔を下げる。「ちよつと考え事、してた」

「今度は考え事か」と兄はくすくすと笑った。「忙しい奴」

私は恥ずかしくなる。そんな表情をされると、私、困っちゃうよ。

「もう、兄さんっ」

兄は悠揚ゆうようと笑う。笑声は残響せず、ただ散っていく。

「……………」  
私は兄の背中を数秒眺めて、浴室から退室した。

## 第十一話

大量の水に沈む体。ずぶずぶと、浴槽に埋まってい。それは底なし沼に嵌っていくような錯覚をもたらした。

目に見えない鎖が私を束縛しているようで、嫌な気持ちになる。烈々と湧き上がる感情。悪意と好意を源泉にして、叶うことのない恋慕を膨張させる。ただ、一気に肥大化した想いは、現実を直視したことで燠おきのように燃え尽きた。

幸か不幸か、私は紅花家の長女として呱呱こごの声を上げた。一つ上の兄がいて、両親はともに不在。典型的な孤児みなしこ。生活がある程度安定しているだけで、やはり親の愛情を欠如させて育ったことになわりはない。

だから、兄に愛を求めたのか。

分からない。

今となっては。

その原因も、理由も、意図も、分からない。生物の枠から離反した欲求と愛憎。何度も考察や考証を繰り返す。

結果。

残ったものは、狂おしいほどの熱と、病のような執着だった。それは私の心の中で、傲然と屹立している。いついかなる時でも、忘れることも逃れることもできない感情。

水を掬すくう。湯気の立つ温水。指の隙間から漏れていく。

反面、あふれ出る。楔くわくで打ちつけ、釘で固定し、決して外に漏れないよう蓋をしておいたのに。それでも鉄格子の檻を叩き、背徳的な愛を持って、私を支配しようとする。私の中に巢食う獣は、ただ一途に純粹に、あの人を求めている。

けれど。

頭おしこがの辺りを水面につける。私は入水いすいするように、体を浴槽の中に埋没させていった。

先述のとおり、兄の交友関係は狭い。過去に遡<sup>そきゆう</sup>及<sup>ゆう</sup>してみても、兄はずっと私といてくれた。

考えてみれば、女友達を紹介されたことはない。加えて、それらしい人を見たこともない。兄の一日スケジュールを日記につけている私の知る限り、そんな人はいなかった。ただ。

そういうわけにもいかなかった気がする。

私は煩悶のため息をついて、浴槽から出た。

水滴のついた鏡には私が映っていた。

なるべく艶かしい仕草で、ふとももを指でなぞる。舌をチロチロと小出しにして、誘うような目つきを心がける。私は鏡の中にいる自分を誘惑した。

指はだんだんと秘所へと近づいていつて、足の付け根の辺りで止まる。爾<sup>じ</sup>後、私は疲れきった吐息を吐いた。

「……私ってかわいいのかな」  
思わず呟く。私は自らの容姿に対して苦手意識のようなものを持っていた。

周囲の人間は、かわいいと褒めてくれる。葵を好きにならない男なんていないよ、と私の友達なんかは言う。

実際、いる。

実際いるから、こんなにも苦労している。それも私に一番近い人なのに。

再度、青色吐息を吐き出す。あの人は、私の裸を見てもどうにも思わないのかな。

前に決意してバスタオル姿で行ってみたけど、無反応だった。露出した上腿<sup>かたまたま</sup>に目を向けるのでもなく、しどけなくさらした肩に目を奪われるでもなく、いたって平常心を保っていた。ちよつと、少し、わずかに、いや、ものすごく、ショックだった。結構落ち込む。同時に、それもそうかと思う。血縁関係にある異性に性衝動を覚える人間は皆無と言っていい。人間はそういう風にできてはいない。ど

うしたつて、縁続きの相手に色欲を抱くことはないのだから。  
全身をバスタオルで拭きながら、思う。

……浅ましい。

あまりに浅ましい。

この想い、あまりに浅ましい。

根本から履き違えた感情を、私はどう処理すればいいのだろうか？

この劣情を手なずけることなんてできるのだろうか？

私はこの無限地獄の中で苦しみ続けるのだろうか。

夜。

窓から眠った町が見える。亭々とそびえる木の柱。夜の帳の下りた草薙市は、深々と静まり返っていた。

「……お兄ちゃん」

眼下には蒲団に包まる兄がいた。幸せそうに寝息を立てて、夢路へと旅立っている。

きつと、楽しい夢を見てる。

それもそうだと納得。兄は起きない。そういう風にしてある。今夜の兄さんは、朝六時まで起きることはない。

いつ始めたのか分からない遊戯。

幾度となくやめようと思った。こんなことをしてもいたずらに虚しくなるだけだと、何度も自戒した。

けれど。

一旦始めてしまったら、もう後には引けなかった。やめることができなくなっていた。

私の中にいる獣は、この禁じられた遊びを辞することを許しはしなかった。

騎虎の勢い。私は世間の規矩準繩を差し置いて、夜な夜なこんなバカげたことを繰り返していた。

冴え冴えと照る月明かり。黒いシルエットが浮かび上がる。それは欲心が充溢した私の影だった。

燻っていた欲望。大きな口を開ける。肉欲の奈落を内包した獣が、荒々しい咆哮を上げた。

小さく呻く。兄はかわいらしい声で、「うう」と唸った。それは愛くるしい子猫が発するような、甘い泣き声だった。

私はゆっくりと近づく。  
ベッドの上。

空気感染する兄の体の熱。私はなぶるように舌なめずりをして、濁った目で就寝する兄を見た。

そして。

「ん」

私は兄さんの愛らしい唇に唇を合わせた。

心の中で何回も謝る。ごめんね、ごめんねと、どうしようもない懺悔の言葉を胸底で吐いた。

兄さんとかこういう事がしたくて。

兄さんと体を交わしたくて。

私はそういう生き物で、汚れていて、穢れていて、間違っていて、気味の悪い生き物だった。

こう言うことでしか、愛情を表現できない。行き過ぎた愛情を、こうやって消化していくんだ。

ぐちゅぐちゅと口の中をかき回す。私の舌が兄の唾液を掬い取るように蠢き、絡めとっていく。

思う。

壊したい。

兄の全てをぶっ壊して、私の色に染め上げて、私の汚らわしい情欲をひたすらに兄に向けたい。

ああ、私は。

私は。

ほかの女と一緒にいるなずっと私だけを考える私の幸せを一番に

考えてくれるんじゃないかな。わたしのために必死になつて誰よりも私の幸せを大切にしろ。私はあなたのただ一人の家族で誰よりも大切にすべきなのになんで私以外の女のメールアドレスが携帯に入つてるんだ。よ。私だけを愛して私とだけ一緒にいて私との生活だけに生きがいを感じればいいんだ。よ。私以外の生きがいなんてあなたにはいらない。そんなことどうでもいい。私を悲しませるな。嘆かせるな。私以外の人間と関わるな。私以外の全ての関係性を断ち切つて壊して。そんなくだけない関係性なかつたことにして。私と幸せな人生を送つていけばいいの。それが家族つてもんでしょ。家族はちゃんとほかの家族の面倒見ないとダメなの。それともお兄ちゃん。私のこと嫌いな。見たくもない。の。どうでもいいの。いや。そんなわけない。お兄ちゃん。私のことが大好きで。私だけが。い。れば。いい。いつて。言。つて。く。れ。た。よ。ね。も。し。か。し。て。そ。れ。嘘。な。の。嘘。な。わ。け。な。い。よ。ね。本。当。だ。よ。ね。私。も。そ。う。だ。よ。私。は。お。に。い。ち。や。ん。だ。け。い。れ。ば。そ。れ。で。幸。せ。だ。か。ら。お。に。い。ち。や。ん。と。チ。ユ。ー。し。た。り。抱。き。合。つ。た。り。出。来。た。ら。私。最。高。だ。か。ら。そ。れ。が。一。番。の。幸。せ。だ。か。ら。お。に。い。ち。や。ん。も。そ。れ。で。幸。せ。だ。よ。ね。私。と。一。緒。に。い。て。幸。せ。だ。よ。ね。そ。れ。が。正。し。い。家。族。の。在。り。方。だ。よ。ね。家。族。つ。て。の。は。何。よ。り。も。ま。ず。血。の。つ。な。が。り。を。大。切。に。す。る。よ。ね。私。を。ど。ん。な。こ。と。が。あ。つ。て。も。大。切。に。し。て。く。れ。る。ん。だ。よ。ね。い。や。大。切。に。し。ろ。私。以。外。の。こ。と。で。幸。せ。を。感。じ。る。な。そ。ん。な。も。の。は。ま。や。か。し。だ。嘘。だ。嘘。だ。嘘。だ。そ。ん。な。の。に。惑。わ。さ。れ。た。ら。ダ。メ。お。に。い。ち。や。ん。は。私。が。幸。せ。に。し。て。あ。げ。る。か。ら。一。生。尽。く。し。て。あ。げ。る。か。ら。一。生。愛。す。る。か。ら。裏。切。つ。た。り。し。な。い。か。ら。そ。ん。な。こ。と。絶。対。し。な。い。か。ら。私。の。愛。を。受。け。と。め。て。よ。私。の。唇。を。受。け。入。れ。て。よ。私。を。好。き。だ。つ。て。言。つ。て。よ。お。兄。ち。や。ん。

まだ夜の明けきららない早暁<sup>ちやうせう</sup>。東の空から太陽が昇る。  
清々しい日の出。

反対に、私の気分は最悪だった。  
眠れなかった、と言っわけではない。ただ、自分の薄気味悪さに嫌気がさしただけ。なまじ、こんなに綺麗な早暁を見てしまうと、なおのこと滅入る。その対比は鮮烈で、私を陰鬱とした気分にするのだ。

黎明<sup>れいめい</sup>の朝日が白々と明けていく。窓から引き明けの光が差し込んでいった。

私は行きたくもない遠征のために朝早くから起床して、そして兄さんのためのお弁当を作っていた。

本命は後者。前者は単に兄さんが部活に入ったら、と薦めてくれたから。どうやら兄さんは私に罪悪感のようなものを抱いているらしい。だから、できることなら部活くらい参加させてあげたいと、そう思ったのだろうか。

ひよっとしたら、新聞配達をする理由は、ここにあるのかも。兄さんは自らのアルバイトの収入を私の部活費に充てるために、アルバイトを始めたのか。

兄さんがアルバイトに着手した時期と、私がバスケット部に入部した時期はほぼ一緒。多分、そうなんだろうと思う。

優しい兄さん、と陶醉するのと同時に、余計なお世話、と思わなくもない。

兄さんが部活に入れなんていわなければ、兄さんと一緒に過ごせる時間はかなり増えていたと思う。それは明白。  
しかし。

かと言って、兄さんラブの私が兄さんの申し出を断れるはずもない。それに兄さんはたまにバスケット部の練習に顔を出してくれる。そこで活躍すると、普段はしてくれない頭などでなでしてくれるから、なきにしもあらず。私は単純な人なので、兄さんが自主的に私に触ってくれと、とても嬉しくて幸せな気持ちになる。ここ以外に兄

さんが自主的にボディタッチしてくれることは稀だから、悪くない話。むしろ、それが一つの生きがい。

丹精込めて野菜に包丁を通す。寸分の狂いなく、デコボコのない断面図が表れる。玉ねぎは包丁を扱い方が命。切ると言うより滑らせるようにするのがコツだ。

切った玉ねぎをフライパンに投入する。私は冷蔵庫からキャベツを取り出した。キャベツの葉に粘っこい唾液が残るようなキスをして、まな板の上に乗せる。そうして包丁で加工していった。

兄さんは安上がりの料理が何よりも好き。そんな変わった人だから、週二回野菜炒めでも文句は言わない。飽きたりしないのかな、とは思うけど、別にいいらしい。

兄さんは味の好みに頓着もしたりしない。その点、兄さんは手間のかからない兄ではあるけど、それはそれで難がある。思った以上にやりがいがない。どうせなら高級レストランのような料理を作つて、私の魅力を改めて確認させてあげたい。紅花葵は家事洗濯なんでもできる、器量のいい女だと。

けれど、残念ながらそんなことはできない。我が家の家計は危うい均衡を保っている状態だった。本人は謙遜するけど、兄さんの新聞配達是我が家にとって経済的な支えとなっているのだ。それがなければ、我が家はたちまち崩壊する。

私がそんな身勝手なことをして生活が困窮すれば、まさに本末転倒。それでは兄さんに申し訳がない。

ガスコンロを点火し、野菜を炒める。欠伸をかみ殺しながら、何気なく階段の方に目を向けた。

すると。  
兄さんがいた。

兄は寝癖のついた頭をかきながら、気だるそうに階段を下つていった。愛らしさを誘う垂れ目。次いで、少し頬が赤い。どうやら兄さんは微熱気味らしく、昨日体温計で計ったら、微妙に熱があったことを思い出す。

兄はキッチンに立つ私を見て、はつとしたような表情を作った。苦笑いを浮かべる。「早いね、葵。僕、今の自分の有り様が恥ずかしいよ。その反面、葵は偉いね。面倒だろうに僕の分までお弁当を作ってくれて……」

「いいの、いいの。これが私の仕事だから。お兄ちゃんは全然気にしないでいいんだからねっ！」と元氣付けるつもりで言う。

「……そう」とわずかに顔を緩ませる。「家事洗濯食事。何でもできる妹を持って、兄さん幸せだよ」

「……あつ、うん。ありがとう」

「考えたら、おまえ、できないことがないよな。本当に家事洗濯食事、何でもござれ、か。おまえ、苦手なこととかある？」

恋愛の仕方、とは言わずに、「私、音痴だよ」とそれを言うにとどめる。

「……どうやら音楽全般が苦手なのは、紅花家の血筋みたいだね。僕も全然歌えないよ」

からからと笑う。

兄は冷蔵庫を開けて、牛乳をコップに注いだ。「飲む？」

「頂戴」

「りょーかい」

二人分のコップを取り出して、牛乳パックを掴む。注がれる乳色の液体。

一旦調理の手を止めて、兄さんからコップを受け取った。喉もとを浸透する甘い口触り。

兄さんも同様に、コップに口をつけて牛乳を飲んでいた。

口の中を通過する白い液体。盛り上がる喉。液体を飲料するとき  
に聞こえるあの有機的な音。

流体が兄さんの中を嚙下えんかしていく。

知らぬ間に伸びる手。私は飲み終えていないコップをそこら辺に置いた。夢遊病者のように思考がまどろむ。

唇から漏れる儂い声。それは私の口から発せられて、泡沫ほうまつのよう

に淡く溶けた。

同時に動く私の体。

触れたい。

兄さんの体に触れたい……。

自身の自我とは無関係に動く。何かを期待するかのように、私の腕がだんだんと兄さんに近づいていった。

気づかない。後ろを向いている兄さんは、私の手に気づかない。

私の手。

「……あつ」

その手は兄さんを掴むことなく、空を掴んだ。

兄さんは暢気のんきに伸びをして、リビングの方に消えていた。

徒花あだばな。実を結ばない。それはさながら、覚めることのない悪夢のよう。

湧き出る罪悪感。洗い清めることのできない不浄。

己の罪科、その深さに諦めのようなものを感じる。

私ってダメな人間なんだ。

いけない子なんだ……。

それでも未練がましく兄さんの姿を追う両の瞳。同時に喉の渴きを覚える。さつき牛乳を飲んだばかりなのに……。

「そういえば葵」

「はっ、はいっ！」

私のほうに顔を向けた兄は、不思議そうな表情をした。「今日、何時くらいに帰ってこれるの？」

「はっ、八時くらい……」

「そっか」

私は気を取り直すように、「兄さんは学校に行くの？ 昨日熱があつたよね？」と尋ねた。

「あれくらいの熱なら大丈夫なんじゃないかな。とりあえず学校には行くよ」と兄さんは笑う。「気分が悪くなったら、保健室に駆け込むから。僕のことには心配しなくていい」

「お兄ちゃんは低血圧なんだから、きつくなったら保健室に直行なんだからね」

「……おまえは僕の母親かよ。言われなくともそうするよ」と兄はむくれた。

兄さんのすねたようなかわいい言動にはあはあしかけた私は、猛烈に死にたくなつた。

## 第十二話

「それで、あたしに何か用？」

気だるい口調で、入江浴衣いりえゆかたは本から視線を上げた。

部活動の遠征が終わった次の日のことだ。

お喋りなどで倉皇ぐわいそうとする教室。時間帯は昼休み。学園内が慌しいのも論を俟またないことだった。

そんな教室内でも、入江浴衣と言う人間は一際異彩を放つ。

浴衣はよく本を読む。それは昼休みでも変わらない。次いで、彼女が精読するのはやけに難解そうな書籍。三島由紀夫みしまゆきおや蓮田善明はすただぜんめいと言った戦前の小説家の本ばかり読んでいる。

長い睫。快活そうな目元。そして、ガラス細工のような端麗な顔立ち。髪の毛は墨を流したような黒で、背中の辺りまでである。その様相は日本人形のようなだった。

見た目はダークな感じだが、彼女の性格は意外に洒々しゃしゃ楽々らくらくとしていて、クラスの中心人物でもあった。

その天衣無縫な器量と繊細そうな姿態。その二つが混ざり合い、見事に調和したのが入江浴衣と言う佳人なのだ。

「ちよつと知りたいことがあるの」

「知りたいこと？」と浴衣は首を傾げた。

首を縦に動かす。「うん。少しね……」

この子は強者におもねらず、孤高な人間でもあった。峻厳で人を寄せ付けない。けれど、面倒見のいい姉御肌と言った面も持ち合わせてもいる。だからか、いざとなればみなに頼られる吞舟うしゅうの魚いしだった。

そんな彼女の趣味は、読書と人間観察だった。前者は底のない知識欲に起因するもので、後者は人間とは一体なんなのか、と言った根源的な疑問に起因するものだった。

浴衣はどういうコネがあるのか、妙に生徒たちの秘密や関係の仔

細を知っていた。とある生徒の個人情報や、テストの点数、恋人の有無など、あらゆることに精通している。

浴衣の鋭い観察眼によって白日に晒される秘事。ただ、それとは別に、何か特殊な人脈があるのだと思う。でなければ、あれだけ詳しい情報を収集できるとは思えない。

……むう。

私は数秒逡巡して、「不知火彼方って人、知ってる？」と彼女に訊いた。

それは、前にこっそり兄の携帯電話を確認したときに出た名前。浴衣はやや呆れたような表情をした。切れ長の瞳が細くなる。

「あんた」と浴衣は間を置いた。「それを知ってどうすんの？」

口ごもる。理由なんて言えない。

彼女はその一瞬で大体の事情を察したらしい。薄くルージュの塗られた唇を隠微に歪めた。ある程度の付き合いがなければ分からない、浴衣の表情の変化。

浴衣は面白がっている。私はそう感じた。

「なるほど。また兄責絡みか」とからかうような声。頬がかーっと熱くなるのを感じる。

「そつ、それは……！」

「別にあたしはなんとも思っていないよ。あんたが度し難いブラコンだってことは、周知のことだし」

「私はブラコンなんかじゃ」と思いのほか大きい声で反駁。周囲の人間が驚いたようにこちらに目を向ける。私は慌てて声のボリュームを下げた。「わ、私は、ブラコンなんかじゃ……。確かにお兄ちゃんのことは好きで大切な人だけど、その、そういう風なんかじゃなくって、もつと、その 家族だから！ 家族愛だからだよ。私がお兄ちゃんを好きなのは、一重に家族であることの絆が深いからよ。なら逆に聞くけど、妹が兄のことを大切に思っただけなの？」

私はまくし立てるように言うが、浴衣は垢抜けた声で笑っただけだった。

「語るねえ、あんた。兄貴のことになると、とたんに饒舌になる。忠告しとくけど、近親相姦とか洒落になんないからね」

洒落になつてないんですけど。

「けどねえ、まあ、そうかもしれない。確かに家族は大切だよ。この世に生を受けて一番初めに会う他人で、一番近い他人だからね」と浴衣はアイシャドウの入れた睫まつげを伏せた。「やっぱり、家族は大切にするに越したことはないからさ」

私は浴衣の言葉に少し救われたような気がした。

一番初めに会う他人。

一番近い他人。

家族と言うものはとどのつまり、血の繋がっているだけの他人なのだ。同じ親から生まれたと言うだけで、やはりそれだけのことなのだ。同じ親から生まれたと言うだけで、やはりそれだけのことなのだ。

しかし、社会倫理は家族同士の愛を許さない。異端なものとして退ける。そうして清純な愛は忌み嫌われ、排斥されていく。

私の愛はきつと歪んでいる。実の兄に恋々とした想いを募らせる私は、やはり人間として大切なものが欠けているのだろう。

どうだつていい。そんなの関係ない。

このことが矢面に出れば、巷間の衆生しやうせいは型どおりの批判を行う。

そして、四方山話よもやまばなしのように私と兄さんとの関係を口の端に上げる。変で面白おかしな話だと前置きをして。

私は兄さん以外の人間は嫌いだ。けれど、ゆるが忽せに思考を放棄して、相手の心情を忖度そんたくしない人間はもつと嫌いだ。

一様に中庸な意見。

当たり障りのない私見。

自分の考えがパーセントも含まれていない見解。考えることを投げ出した人間は、思った以上に醜い。

私だつて何度も考えた。何度も彼を諦めようとした。

けれど。

やっぱりダメだった。私には兄さんしかいない。そういう結論し

か出なかった。

その行き過ぎた肉欲と情動。ひよつとしたら私は、色狂いの気があるのかもしれないと思った。しかし、そう言うわけではなく、私は兄さん以外の男に性的な魅力を感じたことは一度としてなかった。むしろ嫌悪感すら湧く。兄さん以外の男に触られると、自分の純潔を汚されたように思えて、済度しがたい不快感を覚えた。

浴衣は本を閉じて、鋭利な視線を私に向けた。

「けどさ、葵。物事には限度ってものがあるわけよ」

「……限度？」

「そう、限度。あんたはちよつとばかり行き過ぎ。もう少し押さえないよ、しっかり自分をコントロールしなさいよ。別に兄貴に彼女ができたくらいで、そう目くじら立てることないんじゃないの？」

「……え？」

私の耳は不吉な単語を拾った（気がする）。それは精神の瓦解へと帰趨していった。

「その、しし、しっかり自分、をコントロールしなさいよ、の後が、きき、聞こ、えなかったんだ、けど」

「あんたねえ、動揺しまくり。もう一回言っただけよ？ あんたの愛しい愛しい兄貴に、彼女ができちゃったってことだよ」

そう言っただけで、浴衣は生徒手帳から一枚の写真を取り出した。

その写真には、信じられないくらい綺麗な女の人が映っていた。

髪の毛の色は鮮やかな白色で、対照的にその唇は艶かしい赤色をしていた。

間然するところのない麗人。清楚とした立ち振る舞いと、艶然とした微笑。地球上の男ならコロッツと誤ってしまいそうな、そんな同姓として羨ましいくらい素敵な笑みだった。

う。

「うわああああああんっ！ そそそそ、そんな、こ、とがあるはずが、ないっ！ おお、お兄ちゃんに限って、そそそそんなことが……！」

私は頭を抱えて、大声でわめいた。脳がその言葉を理解するのを拒んでいる。それでも、その言葉は呪詛のように私を侵していった。「やややややだあああああっ！　そ、そんなの、いいいいいやだよおおおおっ！　なななんで私じゃないの？　どうして私、を選んでくれ、ないのっ？　どうして、どうして……？」

目の前が真っ黒になる。私は場所と時間を無視して、盛大に泣き叫んだ。周りに知り合いや友人がいることも忘れ、ただその事実<sup>じじつ</sup>に慟哭<sup>どうく</sup>する。私は深い悲しみと怒りに身を震わせた。

何事かと周囲の視線が集まる。構うものか。そんなものどうでもいい。

それよりも兄さんだ。どうして兄さんは“彼女”なんて言う、不毛で無意味でくだらない存在を作ったのだろう？　そしてどうして作ろうとしたのだろう？　それこそが解決すべき問題なんだ！

せつかく近くには私と云ういける女がいるって言うのに、どうして私に手を出そうとしないのだろう？　いつでも大歓迎なのに。兄さんのためだったら何でもしてあげれるのに。私の唇も胸も髪も何でも捧げられるのに。兄さんのこと好きで好きでたまらないのに……。

なのに。  
なぜ。

「おお、落ち着きなよ葵」  
「落ち着けるかああああ！」

一蹴。ううと嗚咽を漏らしながら、必死に頭と心の整理をしようとする。けど、私の心は爆発寸前で、すでに導火線には火がついていた。

滂沱<sup>ほうた</sup>の涙を流して、袖を絞る私。私はあまりにも悲しくて、虚しくて、どうしようもなかった。

表裏をなして、どす黒い怒気が胸襟に広がる。悪意にも憎悪にも似た、獰猛で荒々しい感情が。

「おお、お兄ちゃんに、かかか彼女……っ！　そんなの認めない……」

…！ お兄ちゃんは私のものなんだからあつ！ 絶対に誰にも渡さないいいいっ！ お兄ちゃんに愛されていいのは私だけなんだからあああつ！」

「あ、葵つてば！ その発言はまずいつて！ みんな見てるから！ あんたのぶつ飛んだ言動に引いてるから！」

「うううううっ！ 私、私……」

私は涙が枯れ果てるまで泣いた。体裁なんか一切合財気にせず、ただあまりにも残酷な現実に嗟嘆さたんした。胸の苦しさのあまり、悶絶もんぜつ壁地の境地。

兄さん。

私の愛しい人。

誰よりも大切に、何者にも代えがたい人。

私が一番好きで、もっとも愛している人。

なのに。

これだけ想ってるのに。

うううううわわわあああああつ！

私はがばつと起き上がった。涙を手の甲でぬぐい、周囲に視線を巡らす。周りの人間はみな、呆然とした表情をしていた。

机の上に置かれた写真。それを親の仇のように荒っぽく掴み、懐に入れる。私は集まる人ごみを駆け抜け、廊下に出た。ものすごいスピードで階段を駆け上がる。

目的地は。

当然。

二年二組。

「おにいちゃあああああんっ！」

私は教室の扉を開けて、開口一番大音声を発した。だいおんじょう

一つ上の先輩たちは、啞然とした面を向ける。いきなり下級生が

怒鳴り込んできたのだから当然だろう。けれど、そんなのに構って暇など私にはない。

そんなことよりもまず、兄さんだ。兄さんに会って真相を確かめない。もう、私、死んじゃうよ……。

兄さんは窓際が一番後ろの席にいた。前の席にはパンを片手に相原さんが陣取っている。

兄さんを見つけた私は、一直線に兄さんの元へと向かった。先輩たちは私の迫力に押されたのか、自然と兄さんまでの間に一本の道ができていた。

「お兄ちゃんっ！」  
劈くような金切り声を上げる。私は兄さんの机を思いっきり叩いた。

一方の兄さんはまったく状況が飲み込めていないようだった。私が至情込めて作った魚の切り身が、掴んでいた箸から落ちた。

「あつ、葵、サン？」

私は有無を言わず、兄さんの胸倉を掴んだ。火事場の馬鹿力と言う奴なのか、女の私でも腕力だけで兄を立ち上がらせることができた。

殺意を込めた目で兄さんを睨みつける。多分、今の私は涙目だろう。それでも、裂帛れっぱくの気合を入れて、兄に尖った視線をぶつけた。

兄さんは何がどうなっているのかよく分からないようだった。

兄さんの口は何かの言葉を紡紡ごうと動く。

私の“食欲”を誘う唇の蠕動ぜんどう。

もしかしたら写真の女は、兄のとろけるように甘い唇をすでに知っているのかもしれない。

この柔らかい肌も。

この滑らかな髪も。

あの女は。

あああああああつ！

耐えられない！ そんなこと信じたくない！

そんなことないよね？ そんなわけないよね？

私は兄さんの体を上下にゆすった。揺れる兄さんの頭。私は憤怒と悲愴のあまり、口の中が粘ついて声が出なかった。

兄さんの頭がぐくと下がる。兄さんは熱っぽい目を私に向けた。けれど、その目は私を見てはいなかった。麻薬を摂取したかのように、焦点が合っていない。

嫌な予感に駆られた。

私の脳裏には、低血圧と言う文字がさーっとかすめていった。胸倉を離して、兄さんの額に手を当てる。

……ひどい熱。

兄さんはそのまま、床に崩れ落ちた

## 第十三話（前書き）

氷雨<sup>ひやめ</sup>……空から降ってくる氷の粒のこと。あるいは、冬季に降る冷たい雨のこと。気象学で定義された用語ではない。

時雨<sup>しぐれ</sup>……秋から冬にかけて起こる、一時的に降ったり止んだりする雨や雪のこと。

## 第十三話

八月。

別名を葉月といい、旧曆で言えば秋に当たる。

由来は稲の穂が張る穂張り月と言う説が有力。また、月見月と言う別名もある。

夏雲の隙間から、日の盛りの光が差し込んできた。肌をじりじりと照りつける。焼け爛れるような熱気だった。

「きゅうじゅうーはち、きゅうじゅうきゅうー、ひゃーつく！」

大きな杉の木の下で、少年は目を開ける。そうして勢いよく振り返った。

両隣に砂利を敷いた参道が少年の眼下に映った。立ち並ぶ石灯笼や阿形と吽形の狛犬も映る。

杉の木陰から飛び出して、眼前の空き缶に足を乗つけた。楽しそうに周囲を見渡す。

よし。

視線を少しだけ上げた。誰もいない。ザワザワ。木のさざめきだけが聞こえる。

静寂に包まれる境内。

少年は颯爽と駆け出した。

偉容を誇る神籬の桜。紙垂の取り付けられた注連縄が張られ、太い木の枝を大空に張り巡らせている。

新緑の葉桜を茂らす古木。それは緑の天蓋のようでもあり、燃え上がるような日差しを防いでくれた。

少年は軍隊の斥候のように、慎重な足運びで桜の周りを巡る。足音を漏らさず、檜皮色の幹に手をかけて、そーっと木の裏手を覗い

た。

少年はしめた、と言わんばかりの顔をした。

桜の裏手には、体操座りをして隠れる少女がいた。

「あおい、見つけ！」

少年はあおいと呼ばれた少女を指差した。

あおいは伏せた頭を上げなかった。

白を切るつもりだな、と思ったのか、しゃがんであおいの肩をトントンと叩いた。

恐る恐る顔を上げる。

少年と目が合うと、「うう、また見つかったよお」と服の裾を握って、あおいは臍ほそをかんだ。悔しそうに少年の頭をぽかぽかと叩く。

あおいは地べたに座り込んだまま、「なんでわたしの隠れ場所が分かったの？」とつむじを曲げて問うた。至極あっさりが見つかったものだから、無念だったのか。

「あおいはワンパターンなんだよ。缶蹴りのときは決まってここに隠れるだろー」と少年は種明かしをした。先ほどの仕返しにと、あおいの頬を引っ張ってやる。

「うー、お兄ちゃん、いたいー」

「白を切ろうとしたあおいが悪いんだ。ほら、行くよ」

どうやらこの少年はあおいと呼ばれる少女の兄らしかった。

少年はあおいを立ち上がらせた。あおいは子犬のように唸った。

萌黄色もえぎの葉が肅として散り乱れる。それが二人の肩や腕にかかり、縹はなだに染め上げられた甚兵衛じんべえに新たな色彩が加わった。

少年はあおいの服についた木の葉をはたいてあげた。この子は桜の陰に限らず、とにかく木の近くに隠れる。だからかよく衣服に葉っぱがつく。

特にお尻のところは落ち葉だらけだった。

まったく、もう。

思わず苦笑いを溢す。少年はあおいにくっついていた落ち葉を落

としてあげた。

あおいは大人しくそれを受け入れる。もはや、この作業に慣れているといった風であった。仲睦まじい兄妹。心やすい関係。ただ、ほのかに頬が赤いのは、乙女の恥じらいなのやもしれぬ。

兄をこき使って。

心の中で悪態をつく。それでも、そんなあおいの姿が微笑ましくもあった。

何年も前に母の愛をなくしたと言っのに。

少年にはあおいが無理をしているように思うことが時々あった。

妹は気丈で優しい子だ。つらくて悲しい思いを胸にしまって、ひたすらに一人背負い込んで、笑顔を振りまける健気な妹だ。

それでも。

だからか。

あおいは少年によく甘えるようになった。母親を失う以前は兄妹で手を繋ぐなんぞ恥ずかしいと言っていたが、やはり肉親の死は感に堪えないものがあつたのか。

……当然か。

あおいに催促されて手を繋ぐ。仲のよい兄と妹は本殿の表を回った。

兄妹は仲良くせなあかん。

少し前にとある人から言われたこと。

家族は広い世界にほんのわずかしかない。世の中の大半は赤の他人で、家族と呼べる人は少ししか存在しない。

勿論、替えなんて効かない。家族とはそう言うもので、我が身を賭しても守らなければならぬものなのだ。

だから。

あおいを守るのは自分だけ。あおいは、妹は、兄である自分が守らなくちゃいけない。なぜなら、兄とはそう言うものだからだ。

お父さんもお母さんもない。とうに死んだ。あおいがすぐれるのは、もはや兄だけなのだ。

ぎゅつと握り締める。あおいの指はほっそりとしていて、このまま強く握ってしまえば、たやすく折れてしまいそうだった。

「あおい」

「なに？」

「あおいは心配しなくていいからね。ぼくがあおいを守ってあげるから」

あおいはしばらくの間目を点にしたが、やがて、「うん」と頬を赤らめながら頷いた。

あおいを拝殿の近くにある杉の樹下に連れて行った少年は、次の目標に標準を当てていた。

小祠の設けられた摂社。妻入りの屋根の下には木の戸があり、手前には神饌しんせんが供えられていた。

透き通るような松籟しょうさいの響き。

少年は亭々と立つ松の間を抜けていった。緑陰を渡る風を感じる。

清浄な気の満ちる神苑しんえん。

清らかな風や松の葉の音もあいまってか、清々しい気分を少年に起こさせた。

静かに近づいていく。眼前には巖いわのような巨岩。苔むした表面は幾年もの星霜を経た森厳さがあつた。

相手は少年に気づいていない。木々を迂回して、そっと背後から忍び寄る。

「ひさめさん、見つけ！」

「……ぬう」

ひさめと呼ばれた青年は苦い顔で唸った。口を真一文字まごちまごに結び、親の仇を見るように少年を睨む。その視線は鋭く、少年は怒らせてしまったのではと心中気が気でなかった。

と。

一転して、朗らかな笑みを浮かべる。ひさめはニコニコと大黒様のように笑った。

考えてみれば、少年の親炙しんしやするひさめと言う男は、大人気のない男でもなく、癩癩しかしか持ちの男でもない。たかが缶蹴りと言う遊戯ごごときで、若年じやうねんの子供に怒りを覚えるはずもなかった。むしろ、満足げな表情を浮かべている。

「楔みくわはどうして人を見つけるのがこんなに上手いんじや。おまえが鬼だと、すぐに終わってしもうわい」

鮮やかな銀髪を涼風に揺らして、みそぎと呼ばれた少年に微笑みかける。その男にも女にも見える中世的な顔立ち。ひさめの視線は涼しげで、とても同姓とは思えない妖艶さがあつた。

「ほんで、僕のほかに誰か見つかったのか？」

「ひさめさんは二番目！」

その言葉で大体の状況が把握できたらしい。みそぎより二つ年上のひさめは水平にした掌に握り拳を当てる。すると、ポンとかわいい音が出た。

「なるほど。葵は見つかってしもうたか」

「開始早々に見つけた」

「おまえも小ずるい奴じや。どうせ、葵の隠れ場所をぞ、前々から分かつていたのじやろ」

ひさめは本当に勘が鋭い、と楔は思う。

それを察したのか、「僕は勘はええんじや。勘だけが取り柄の男なんや」とひさめは豪放磊落と笑んだ。剛毅で放胆な笑い声。まるで荒々しく落ちる瀑布ばくふのようでもあつた。その裏側には、包み込むような温情や慈しみが見て取れる。

ひさめは十一と言う歳でありながら、その風貌は大人びていた。華奢で引き締まった体躯。髪は生来の銀で、染めたわけではないらしい。本人曰く、遺伝だそうだ。

ひさめの実家は、この美作神社の神主を勤める家系だった。また、ひさめの生まれた大槻おおつきの家は元武家であるからか、武芸にも秀でて

いた。習字や俳句をたしなむ一方で武道にも造詣が深い。

大槻家の歴史は平安時代にまで遡る。そのころの大槻家は衛士だった。

詳細は知らない。蔵の古文書曰く、どこかの武門の分家であると確か、名伽なとしきとか言う武家の支流であったとか。髪の色が淡い銀色なのも、本家との血の交わりに起因するようだった。事実過去にひさめは、名伽の跡継ぎと顔を合わせたことがある。それはそれは見事な白銀であったことを覚えている。

時は移うつろい、世相は動き、時代は巡り、大槻家は変わること余儀なくされた。大槻家は元来、伝統を重んじ、先人の知恵に学ぶ家であった。ただいささか退嬰たいえい的な風であり、しきたりに囚われた権威主義の家でもあった。

その結果、大槻家は時代の荒波に飲み込まれる破目はめとなった。御一新にともなつて渡ってきた異国の思潮や思想。既存の考えとは一線を画す外国の文化、風俗。尚古主義の大槻家は、新時代の到来にただ困惑するのみであった。

それでも大槻家は古来の慣わしを固持し続けた。大槻家は武家であると言つ矜持も邪魔をしてか、新時代に受容、もとい迎合することとはなかった。本家本元の名伽家が伝統主義を堅持したこともその一因だった。

そのような中。

その停滞する雰囲気を更新し、今一度明治の風を迎え入れようと立ち上がったのが高祖父母であった。

今から百年以上も前のことである。高祖父母の尽力もあってか、大槻家はどうか凋落へんらくを免れることができた。時流の憂き目にあった大槻家は、多事多難を乗り越え、漸進的にだが再興した。

と言ったものの、爾来の伝統をいまだ捨てきれずにいた。伝統の日本文化をそう易々と捨て置くことなどできぬ。新しいものが入ったからお払い箱とは先祖に対して不敬であると。

大槻家は日本文化の根本をなす神道に注目した。

会合に会合を重ね、大槻家では侃々諤々と物議がかもされた。ここで再度紆余曲折を経たのであった。

とどのつまり、当初の通り大槻家は武の一字を捨て、かなながら惟神の道へと転進することとなった。そのころの時代、武士が商いに失敗して没落することはよくあることであった。それを重々承知していた大槻家は、商法ではなく神職と言う武家とは正反対の職を手に入れることにしたのだった。

以後大槻家は様々な変遷を遂げる。普遍であるものは、伝統主義に基づく古色を帯びた家風であった。それは草薙の村も同様で、慣習や流俗に忠実だった。

あるいは塵埃じんあいにまみれていないと言う意味では桃源郷であるやもしれぬ。草薙の村は清浄で、せせこましい塵芥ちりあかたが氾濫する都会とははるかに縁遠い。みそぎやおおいも、純粹で素朴なこの村が好きだった。

「残りは姉様あねさまとあやつか」

「五分もあれば見つかる、見つかる！」

「それはどうか。姉様はともかく、すばしっこい庵いおりを捕まえるのはたいそう難儀じやじゃ」

ひさめは楚々と興じた。そうして方向転換。どうやら自ら杉の木に仮設した牢に入るようだった。

後ろざまに手を振るひさめ。わずかに見える横顔は楽しそうな表情をしていた。

夏の風に松の梢がなびき、松韻しょういんが辺りに残響していく。  
切なく感じる。

「はよせんと、誰かが缶を蹴っつてもうぞ」

その声にはつととなって、後ろざまにひさめが笑っているのが分かって、少し恥ずかしくなつて、慌てて走り出した。

## 第十四話

柄杓が整然と置かれた手水舎ちようすい。水盤から滾々と水が溢れている。深邃しんすいとした神域。手水舎の前に立つたみそぎは、木の柄杓で湧き出る水を掬った。嚙下する。清らかな聖水は、我が身の穢れを洗い清めてくれるようだった。

水を飲んで小憩し、改めて神経を尖らせる。幽玄とした気配。巡らせて見れば、巍峨ぎがたる山の頂が見えた。

そういえばと、みそぎはとあることを思い出した。

山には神様が御座おわしまして、人々を見守っているのだとか。

だったら、なんで神様は、ぼくのお母さんを見ごろしにしたんだろう。

常々思う。何度考えても理不尽だと思う。そして、神様なんてこの世にいないんじゃないか、とそう帰趨するのだった。

それでも。

それでもみそぎは、今の暮らしは幸せであると確信を持って言う。お父さんやお母さんがなくて寂しいけど、みそぎには大好きな妹と、敬愛する人々、そしてなんだかんだで仲のよい親友もいた。自分よりも不幸な人はいくらでもいる。栄養失調で苦しんでいる人もいれば、戦場に駆り出されている子供もいる。この瞬間とて、死に瀕している人間は枚挙に暇がないだろう。

贅沢は言わない。文句も言わないし、愚痴も漏らさない。そう心に誓っている。じゃないと、妹が苦しむだろうから。

もし自分が陰鬱な感情を表に晒せば、あおいは落ち込むだろう。ひよっとしたら、その原因が自分にあるものと思ひ込むかもしれない。それだけは避けたかった。儉しい生活つまも近隣の悪童から苛められるのも、決してあおいのせいじゃないし、あるいは自らのせいだとも思えない。

幼い子供は無邪気に排斥的なものである。どうせ一時の行動だろ

うと思うし、時が立てばいずれ止むだろう。いじめとはその程度のもので、しょせんその程度でしかない。しかし、そのときに受けた傷は生涯、みそぎやあおいを苦しめるだろう。

みそぎはあおいが苛められているところを見ると、許せない、と闘志を燃やして突っ込んでいく。

が、たいてい、負ける。多勢に無勢。結局、喧嘩にめっぽう強い朋友か、ひさめたちが緩衝に入ってきてくれる。

助かったと思うのと同時に、やり場のない怒りと情けなさを覚える。自分は何一つできない。妹を守ることすらできない。そうして年若いみそぎは自己嫌悪に陥る。

その時は無言であおいが抱きしめてくれる。助けてくれてありがとうと、涙を流してお礼を言ってくれる。十分もしたら、みそぎは再び立ち上がるのだった。

みそぎたちの生活は苦しい。一家を支えてくれる人は当然のことながら、いない。

親切な祖父母が二人を養ってくれているが、いずれ自立しなければならぬ。兄妹と二人だけで身すぎ世すぎしていき、これまで助けてくれた人に恩返しをしなければ。みそぎはそんなことをいつも思っていた。

口元についた水をぬぐう。

袖が湿る。

楔は手水舎の脇にある社殿に向かって、薄氷を踏むように歩いた。鼠のような抜き足。砂利を踏まないよう気をつける。ここでじやりじやりと鳴ってしまったのは、これまでの苦労が水の泡である。だから、砂利を踏まないよう余分に距離をとった。やや過剰で遠回りな気もするが、石橋を叩いて渡る、とも取れる。

そして。

「しぐれさん、みーつけた!」

「あらら、これはやられた」

と、しぐれと呼ばれた少女はかわいらしく舌を出した。

しぐれは社殿の裏に身を潜めていた。華奢な瘦軀いたちを丸めて、鼯いたちのように雌伏していたようだ。

雅やかな口元を涼しげにして、ひょいと立ち上がる。しぐれが少ししゃがむと、襖と目の位置がほぼ一緒になった。

「うちで何人目じゃ」

「しぐれさんで三人目！」

しぐれは少し驚いたようだった。小股の切れた笑みを浮かべて、よしよしとみそぎの頭を撫でてくれる。

「そうか、そうか。相変わらずようやる、ようやる。襖に鬼い、やらしたら敵なしやわ」

「それ、ひさめさんにもいわれた！」

「む。と言うことは、氷雨の阿保はとうに捕まってもうたか」

「ひさめさんはあほじゃないよ！」

そう言うのと、しぐれは優しく目尻を下げた。見るものを安心させる、臍へらたけた笑み。みそぎも嬉しくなつて、微笑み返す。すると、しぐれも花開いたように笑った。

しぐれはひさめの双子の姉である。性格はおしとやかで、大和撫子のような佳人であった。また、大槻家の血なのか、ひさめと同様に髪の毛が銀色であった。それが腰の辺りまであるからか、透徹として典雅な印象を与える。所作も品があつて、洗練された美しさを感ずるのだった。

「残り一人は誰じゃ」

「あいはらのバカじゃ」と口まねをする。

みそぎがそう言うのと、しぐれは静かに相好を崩した。

「おうおう、俺か俺か。襖が見つけるのの鬼やったら、俺は隠れるのの鬼やな」

「ぼく、角がはえるの……？」

「はえん、はえん。これはな、比喻、と言う奴じゃ。国語の時間で習ったじゃろ」

「ひゆ？」

「いや、わからんならえんじや。楔はまだ年端の行かぬ子供じやもんな」

慈愛に満ちた表情でみそぎの頭を撫でる。胸の中がすーっと温かくなつて、心地よい熱が全身を包んだ。

それは母の愛に似ている。

献身的で無償の愛。打算も計算もない。しぐれはそうして、みそぎたちに愛情を注いでくれた。特に両親共にはいないみそぎとあおいにとって、しぐれの存在は本当の母親のようだった。

なら、ひさめさんはお父さんかな。

しぐれもひさめも優しく、清廉潔白ないい人、とみそぎは思っていた。誰よりも尊敬する人たちで、みそぎの目標でもあった。

……がんばらないと。

もっと、頼りがいのある“おとこ”にならないと。

最後に残ったのは、みそぎの幼馴染兼悪友だった。

一旦、缶のところに戻る。杉の木の下には、これまで捕まえたあおい、ひさめ、しぐれと、三人いる。目を閉じて寝ていたり、木にも垂れていたり、樹陰で涼んでいたりしていた。

拝殿の前の参道。阿吽の狛犬に挟まれて、みそぎは周囲を警戒していた。

空き缶はすぐ近くにある。もし、奴が奇襲してきてもすぐに対応できる。理想的な陣営。鉄壁の布陣。死角なし。

常に空き缶のそばに控えるのはずるい気がした。けど、あいつだけには負けたくない。その一心。

その一心が、腹の底から敵愾心と対抗意識に火をつける。生まれてこの方、あいつに弄ばれ続けてきたみそぎにとってこれは、ある種の意趣返しとも言えた。

あいはらいおりはみそぎにとっての竹馬の友であった。小さいこ

るからずっと遊んでいて、気の置けない間柄だった。

あいはらはみそぎの目から見ても変人に映った。鴨が葱を背負ってくる、と言うことわざ通りに鴨に葱を紐でくくって背負わせたり、真冬に海に飛び込んで溺れそうになることもあった。だが、本人にとって、それは大真面目なことである。

どう考えても変な奴だった。けれど、人の痛みに敏感で、人のために自分を犠牲にできる奴でもあった。妙なところに知識が傾倒しているところも、旺盛な知識欲の発露であった。色々なことに好奇心を向けるあいはらが自由に見えて、みそぎはその奔放さが羨ましくもあり尊敬もしていた。

将来、こいつは大物になる。

そんな予感をさせる男であった。

そよぐ樹梢が荒ぶる酷暑を慰めるように響いていた。猛烈な暑熱。涼感のある風が、汗ばむ皮膚を冷ましてくれる。

世紀の一騎打ち。雌雄を決戦がための差し向かい。

その戦端は唐突に開かれる。

「楽にしてやる」

声。

奴の声。

枝葉の揺れる音。不自然に大きい。

奴の声の源はどこか。前か、後ろか、右か、左か。

あるいは。

「……上！」

「『』名答！」

鋭利な声ははるか上空から聞こえてきた。

瞻仰する。燃えるような日差し。目を日光でやられないよう手をかざしながら、相手の姿を探す。その刹那、網膜が人影を捉えた。そいつはあるところか、杉の木から落下してきた。初めから木に登っていたのか？ いや、そんなはずは。

むささびのような俊敏さ。縦横無尽。気随気儘。相変わらず型に

囚われない動きをする。

完全に背中をとられる形となったみそぎは、つかの間周章狼狽してしまった。

まずは缶を死守すべき。

空き缶の位置を確認する。  
と。

「笑止！」

カーーン、と高らかな音が響く。小気味よい金属音。それはあまりにも短兵急たんぺいききゅうであった。

「みんな逃げろーっ！」

したり顔の少年。その言葉を嚆矢こしつに、蜘蛛の子を散らしたように退散するみんな。缶は目に見えないところまで転がっている。早く、空き缶を回収しないと。

「唸る黄金の右足……！ 日本代表も夢じゃない……！ べにはな、このままハットトリック決めてやっから覚悟しろよ！」

少年は盛大な哄笑を上げながら、一目散に逃走していった。

木登りとか反則だろ、と思いつつも、缶を拾いに行く。怒りと屈辱に震えながら、必死に缶を探すみそぎ。

「くそっ、あいはらあーっ！」

蒼穹にまで届く怒声。再度空き缶をセツトする。

そうしてみそぎは、獣のように缶蹴りに打って出たのだった。

## 第十五話

柑子色の薄暮。千切れては彷徨する雲。

暑さは和らいでいる。時刻は午後六時くらいで、ちょうどいいくらいの温度だった。肌を射す日光もどこか柔らかい。

簀子に腰を落ち着けて、みそぎは燕の群れを目で追った。日の落ちる空。燕たちは暮れ行く夕空を飛翔していった。やがて山の方に飛んでいき、見えなくなる。

「葵は寝たか」

「寝ちゃいました」

みそぎは膝の上で寝息を立てている妹の髪を撫でた。癖のない艶やかな髪。缶蹴りに疲れたのか、昏々と寝入っていた。

かれこれ、三十分近く寝ている。いよいよ膝関節が痛い。

「幸せそうな寝顔じゃ」

夕日の淡い陽光が、ひさめの頬に風雅な透影を作る。温かい光に照らされて、ひさめが温容な笑みを浮かべているのが分かった。

みそぎは静かに笑って、あおいの髪をもう一度撫でた。自分の指があおいの清い髪をつーつと抜ける感触が心地よかった。

「おまえのそばにしていると落ち着くのやもしれん。ほーれ、見てみ。

葵の顔。安らかじゃ」

「それよりも膝の辺りがひりひりして痛いです」

「我慢せい。男やる。大和魂みせてみーや」

「やまとたましい……?」

「そうじゃ。身はたとひ 武蔵の野辺に朽ちぬとも 留め置かまし 大和魂、じゃろうて」

そういうひさめは優姿で目を細めた。対するみそぎは、その和歌の意味が咀嚼できず、頭の上に大量の疑問符が浮かぶ。

敷島の道に達者なひさめは、よく先人の和歌を話題の俎上に上げる。それはしぐれも同様で、双方とも歌道や俳諧など、学殖豊かだ

った。この村の風土がそうさせるのか、あるいは学問を尊ぶ家風にあるのか。それとも、彼らの生きる時代がそうさせるのか。

「ぼくにはよくわかんないや」とみそぎは投げ出してしまふ。年齢が二桁に達していないみそぎにとって、和歌とは異国の言語のようでもあった。

表裏をなしてその異国の言語を巧みに操るひさめは、みそぎから見れば魔法使いのようにも見え、畏怖のような憧れを抱かせた。

ひさめはみそぎと二歳しか歳が違わぬ。それなのに、ひさめの毎日はお琴や武術の稽古等で忙殺されている。一方のみそぎは、忙しいひさめやしぐれに無理を言つて、こうして遊んでもらっている。

幼心お幼心ながら、罪悪感を覚える。ひよつとしたら、ぼくがみんなに迷惑をかけているのかもしれない、と。

「いや、それでいいんじゃない。ちーと難しかったやもしれん。いかにせん、おまえはまだ物心のついたばかりの幼子じゃから」

ひさめはぬくもりのある微笑を向けて、わしゃわしゃとみそぎの髪をかき混ぜるように撫でた。

それでいい。

うう、と唸る。みそぎの心は弾んで、思わず笑みが漏れた。ひさめの言葉は凶らずも、みそぎの悶々とした思いを払拭した。そして、ひさめの言葉に安堵する自分がいることにも気づいた。

「やっ、あおいが起きる！」

ひさめが荒々しくみそぎの頭を撫でるので、大きく揺れる。その細腕からは想像できぬ力。ぐらぐらと揺り動かされる。

膝枕をされているあおいも、異変を感じ取ったのか、小さく唸り声を上げていた。ひよつとしたら地震が起こったのか、と錯覚しているのやもしれぬ。それはそれでかわいい奴、とみそぎは思った。

「わはははは、それもそうじゃ」

剛直に笑つて、手を離す。体の振動がゆっくりと止まっていった。ひさめと言う男は長身でほっそりとした体つきをしている。しかし、その体は屈強で強壯で壮健だった。

みそぎは試しにひさめの腕を掴んでみる。

綱のようだった。

みそぎが胸底で感嘆していると、ひさめは意地の悪い笑みを浮かべた。

ゆっくりと手を忍ばせて、みそぎの体をくすぐる。ひさめはみそぎの反応が面白かったらしく、何度も執拗にくすぐり続けた。それも、あおいを過度に刺激しないような、絶妙な匙加減で。

みそぎが必死にひさめの手から逃れようと体をよじっていると、わたどの渡殿を歩く足音がした。

「なんじゃ、男同士戯れて。気味悪いわ。氷雨もそこら辺で仕舞いにしなさい」

しぐれは苦笑交じりにそう言いながら、お盆に載った菓子おぼろを簞の上に置いた。橘の文様が織り込まれた紬ちゆうを羽織ったしぐれは、みそぎの隣に腰を下ろした。

「葵が起きたらどうするんじゃ」

「姉様も楔と同じことを仰る。けどまあ、それもそうやの」とひさめはみそぎをくすぐるのを止めた。

みそぎはほっと一息ついた。その後、あおいが起きてないかどうか心配になった。そーっと覗いてみる。どうやら起きていないようだった。

その様子を見たひさめは興じながらも、微笑ましげだった。穏やかに頬を緩める。そして、しぐれに一言入れて、大福をほおばった。「楔も食え。ありがたきかな、姉様の手作りじゃぞ」とひさめは笑いながら、みそぎに大福を手渡した。

みそぎはぱーっと笑顔になって、大福を口に含んだ。

「うまいか」

「おいしい」

「それもそうじゃ。これは姉様が丹精こめて作ってくださった菓子じゃ。うまいにきまつとる」

ひさめが自分のことのように誇らしげに言う。事実、しぐれの大

福は美味だった。

そうしている間に盆の上の大福がなくなっていく。のべつ幕なしに大福が二人の口の中に入っていった。しぐれはそれを嬉しそうに眺めていた。

と。

「わたしの分は？ ええ、もう食べちゃったの？」

あおいが泣きそうな声を上げたのは、大福が全てなくなったころであった。

「すまんの、葵。僕と襖で全部食っちゃったわ」とひさめは申し訳なさそうに言うが、その表情は満足げですらあった。

あおいは己の兄の胸にすがった。「本当、お兄ちゃん？」

「ごめんね」とみそぎに言えることはその程度であった。だっておいしかったんだもん、とは言えない。

「そんなあ……」

あおいは青菜に塩をかけたようにうな垂れた。ひよつとしたら、時たま出されるしぐれの差し入れを楽しみにしていたのかもしれない。そう思うと、みそぎはいたたまれなくなった。ぼくも食べ過ぎたかな、とも思った。

結局、「おー、よしよし」とあおいの背中を優しく叩いて慰撫することしかできなかった。子守唄を歌うようにポンポンと調子をとる。「大丈夫だよ。こんなこともあるうかと、もう一個、とっておいたから」

みそぎはどこからともなく大福を取り出した。まるで魔法。あおいの顔も魔法がかかったように明るくなった。

「お兄ちゃん、あおいに食べさせて」

あおいはねだるように言う。わくわくと期待に胸膨らませた目を向けて。

一方のみそぎは困ったように頭をかいた。気恥ずかしさが心の隅まで周匝し、同時に胸がポカポカするような愛おしさを覚えた。

「しかたないなあ」と観念したのか、あおいのいとけない笑みに参

ったのか、「あーん」と大福を食べさせてやった。

頑がんせはない微笑み。あおいは喜色を浮かべ、破顔一笑した。モグモグと美味そうに咀嚼する。やがて、安らかにまぶたを閉じた。すうすうと寝息を立てる。

寝てしまったようだ。

自然と口角が緩む。みそぎもひさめもしぐれも、邪気のないあおいの姿に和んでしまった。

みそぎはほっと息をつく。

そうして。

こっそりと、隠しておいた二つ目の大福を取り出した。

あいはらに一発殴られて、大福を奪われた。

はや乗燭く。地平線の先には夕の日の沈む海原。

みそぎはすっかり眠り込んでしまったあおいをおぶっていた。兄の背は安心するのか、あおいは幸せそうに寝入っていた。

あいはらはだるそうにポケットに手をつ込んで歩いていった。時折暮れなずむ空を見て、眩しそうに目を細める。

十歳にも満たない二人の少年。一人の少女をおんぶして、田んぼ道を進んでいく。ぬかるみに足を取られないよう、気をつけて。

二人の間には心地よい静寂があった。互いに気心の知れた友達である。なんだかんだと衝突こそするが、二人は紛れもなく膠漆の間柄であった。

そんな莫逆の友の二人ではあるが、性格はまさに正反対の一言に尽きる。かたや常識人、かたや変人。それは昔も今も、そして今後も不変であるように思えた。

紅花楔は、妹思いの少年であった。複雑な家庭環境が影響しているのであろう。必死に妹を悪童から翼蔽し、特には諛言やおべっかを用いても妹を守ろうとした。

それは強き者が弱き者を蹂躪すると言う世界の縮図であった。ただ、楔は気骨のある男だった。それは幼いながらも外柔内剛の相を呈していた。時として阿諛追従に構えることもあったが、そう易々と悪に屈することはなかった。

一方で考えなしに軽はずみな行動をとることも多い。それも妹への愛ゆえか。

一方の相原庵は聊爾に欠けるところもあるが、確固たる信念を持った少年であった。自分の意志を貫き通す。一見簡単なように見えるそれは、その実限りなく難しい。

しかし、相原にとつて信念とはまさに己の存在証明。好奇心や探究心の顕現は自分が自分たる証拠でもあった。

だから、曲げない。相原は生まれてこの方、他に追従したこともないし、媚を売ったこともない。尊敬する人間に謙りこそすれど、狷介として振舞うことはなかった。

対極の位置にいる二人であるが、妙に馬が合った。出会いは幼稚園であった。すぐに意気投合した。

それに楔の妹の葵を加え、年上の氷雨と時雨を加え、五人でよく遊んだ。日の暮れるまで遊んだ。遊び場所は決まって美作神社の境内と決まっていた。理由は単純であった。敷地が広く、遊んだ後、

たまさかに時雨がお茶菓子を作ってくれるからだった。

葵は一年前に母を失ったばかりで傷心であった。そこを乱暴者が配慮の足らぬ容喙をし、抵抗、抗弁をしなかった葵は格好の的となった。元から蒲柳の質の気があった葵は、精神的な苦痛もあいまって、大いに苦しんだのであった。

しかし、氷雨と時雨の介入で、葵への苛めは日に日に陵夷していった。楔と相原の尽力もあり、苛めは下火となった。

最近では笑顔を見せるようになった。楔はそれがたまらなく嬉しい。みなに感謝しきれぬ。

また、葵も筆舌に尽くしがたい恩を感じていた。特に兄の楔には本当に助けてもらった。

その胸を借りて何度も泣いた。

その腕で抱きしめてもらった。

その指で涙をぬぐってくれた。

その心で自分を愛してくれた。

楔と葵は固い絆で結ばれていた。それを紐帯するものは何も血だけではない。すなわち、山よりも高く海よりも深い愛情であった。

ただ。

それが後になって歪みをこしらえると、当の本人とて露にも思わなかった。

## 第十六話

炎暑の砌。みきり

ひたすらに涼が恋しくなる季節。

学校から帰宅したみそぎはテレビを見ていた。九歳のみそぎにとつて、テレビは魔法の箱だった。中に人が入っているのでは。そう思いテレビを調査してみても、それらしい形跡はない。ではなぜなのか。それは小学校高学年になるまで解決されることのない疑問だった。

画面には教育番組が放送されていた。ちょうど昆虫の生態系に関する番組だった。

みそぎの網膜にはヒラヒラと舞う蝶々が映っていた。綺麗な翅を広げ、飛ぶ。広漠とした草原で、静々と。それでいて意志を感じさせる。生きたい、と言う願い。それを翅に任せ、儚げな軌道を描き、そよそよと飛翔していくのだった。

その姿は自由と言う単語を連想させた。

美しい。

そう思った。

と。

食われる。

蝶々が食われる。

画面の中では、両の鎌で蝶を捕らえるかまきり螻蛄の姿があった。むしゃむしゃと無遠慮に、蝶の翅や触覚をかじっていく。

食う。

食う。食う。食う。

みそぎは身を乗り出した。

「うわぁ……」

呻いた。頬は赤く上気し、目は恍惚に溺れる。握り拳を作って、生唾を呑みこんだ。

蟻螂が蝶を捕食する映像は、みそぎに多大なショックを与えた。初めはかわいそうだと思った。けれど。

すぐに、喉の渴きを覚えた。

ソファーから立ち上がって、その映像を凝視した。目を皿にして、穴が開くくらい眺めた。

みそぎの思いを知ってかしらるか。

蟻螂はいよいよ、その妙なる蝶の軀を三角の口で食らった。小さい目はやけに無機質だった。何の感情もたたえていない。しかし、口や鎌はせわしく動く。その様子に陶然としている自分がある。忘我の境<sup>ジヤク</sup>。だらりとした快感。

……気がつけば応援していた。

もつと食らえ。もつと食らえ、と。

体中が熱を発していた。みそぎは徐々に高揚していった。

それは蟻螂が完全に蝶を食い終わったところで頂点に達した。達成感に囚われた。食らってやったぞ。そう言った思いで一杯になる。

みそぎは完璧に蟻螂に感情移入していた。と。

「お兄ちゃん」

いいところだったのに、とみそぎは柄になく苛立つ。

それはお風呂場の方から聞こえてきた。

「回覧板、お願いしていいかな？」

ああ이었다。おそらく風呂掃除をしてくれているのだろう。

その言葉でつき物が落ちたようだった。みそぎは妙な罪悪感を感じながらも、急いでテレビを消した。

「うん。分かった！」

そう言って、玄関へと向かう。

頭の中では先ほどの映像がぐるぐると巡っていた。

隣の家に回覧板を届けた後、しぐれと会った。

しぐれはＴシャツにジーパンとラフな姿だった。買い物籠を携行している。大根や長ネギが籠から出ていて、中は大きく膨らんでいた。

「あら、楔じゃないか。どうしたんじゃ」

「回覧板を届けていった」

「そうか、偉いの、楔は。婿にほしくらいじゃ」

しぐれは冗談交じりにそう言つて、窈窕とした笑みを浮かべた。艶のある銀の髪が風に揺れる。その姿態は儂げで可憐であった。

婿とはどう意味なんだろう。そう思ったが、それよりも心奪われるところがあった。

それは、しぐれが蝶々に似ている、と言つた点であった。この折れてしまいそうな雰囲気や振る舞いが、脆くも甘い何かを想像させる。

事実、しぐれは美しかった。その容姿もさることながら、身に纏う雰囲気、何気ない起居までもが、時雨の美しさを際立たせた。本当に蝶のようだった。

胸に打つものがあった。それは楔の内に波紋を投げかけ、妖しげに広がっていった。

「どうしたんじゃ、楔？ ぼーっとして。気分が悪いののか」

「いや、ぼく、大丈夫だよ。へーき、へーき」

みそぎは身振り手振りを交えて言つた。

しぐれはふふふと、興じた。その余韻が涼風にさらわれていく。

「お買い物に行つてたの？」

「そうじゃ。氷雨が刺身を食いたいと図々しく宣つてな、そのついでに野菜やら何やらを買つたと言つわけでの」

とは言うものの、しぐれは静かに笑っていた。

「ご飯は全部しぐれさんが作つてるの？」

「無論。料理は女の仕事じゃ。うちがしなくて誰がする？ ゆつとくが氷雨はできぬぞ。あいつは料理家事と、てんでダメじゃ。どうしようもないのよ」

「ぼくもぜんぜんできないや。朝ご飯も昼ご飯も夜ご飯も、あおいががんばってしてくれてる……」

「おいおい、気に病むな。おまえはまだ子供じゃろう。別にいいんじゃない」

「いいの？」

「ええの。おまえには時間がある。力もある。年も若い。一步一步努力していけばいいんじゃない」

気障じゃったかな、としぐれは恥ずかしそうに笑う。

みそぎは胸を突かれた想いだった。しぐれが蝶に似ているとか言う以前に、やはりしぐれさんはすごい。なんだかよく分からないけど、なんとなくすごいのが分かった。しぐれの一言はみそぎの胸におおになる感銘を与えた。

みそぎは叫びたい。大槻時雨は頭もよく、綺麗ですばらしい人だと。他人を気遣えるかっこいい人だと。

すっかり高揚してしまった。ますます気持ちの整理がつかなくなる。

今日のぼくは変だ。

そう思った。よくは分からない。けど、そう思った。

普段感じたことのない法悦。背筋を這いずるような冷氣。熱にうなされたような狂喜。それは体に大蛇が巻きついているような不快感、そして名状しがたい興奮をもたらす。

可憐なものが散華していく。蝶が蠅螂に食われていく。儂く散る。命の灯火が潰える。その一瞬。

陶醉。言い尽くせない陶醉。その一瞬に感じるは、想像を絶する  
愉悦。愉悦。愉悦。

幼いみそぎにはそれをどう表現すればいいのか分からない。分からないが、感じる。

大切にしていたものが壊れる。

それに刹那の愛を感じる自分がいる。

暗然として露呈する想い。剥き出しになる心の軋み。無邪気なみそぎを塗りつぶす闇。漆黒。晦冥<sup>かゐめい</sup>。渦を巻く暗黒。

じわりと表出する歪み。

まだ自覚できない。

「しぐれサンは……蝶々、好き？」

「なんじゃ、藪から棒に。……まあ、好きじゃよ。蝶々は好きじゃ」

「ぼくも好き」

「ほう、そうか」

みそぎはしぐれを見た。

しぐれは笑っている。深々と笑っている。口元に手を当てて、優雅に笑っている。

と。

みそぎは見た。しぐれの綺麗な瞳を見た。

無極。茫漠。果てしない。

あまりに果てしない。

しぐれの眼窩は空々漠々とした宇宙であった。茫々たる無<sup>むへんざい</sup>辺際<sup>へんざい</sup>の彼方であった。

それでもどこか、憂愁に閉ざされた暗鬱を感じさせる。そう見えるだけなのか。しぐれの面の造詣は、見る角度によつては妖艶な憂いを感じさせるのだ。それがまた、しぐれの魅力を加味する。憂いを帯び、濡れた睫毛に飾られた双眸は、幽寂とした深淵を思わせる。みそぎはさよならの言葉を入れて、しぐれと別れた。

自宅の扉を開けて、玄関口に入り、靴を脱いで初めて分かった。みそぎの胸は冷たい熱を持って、どくどくと高鳴っていたのだ。

## 第十七話

祭り囃子はやしが聞こえてくる。

その陽気な音調は聞くものの心を高揚させ、奇妙な一体感を抱かせる。

みそぎもその中の一人であった。

生まれて初めての夏祭り。みそぎの胸は大いに高鳴っていた。何より隣にあおいがいることが嬉しい。

あおいは元より人見知りをする性格だった。意志が薄弱で自分の気持ちを相手に伝えることが苦手であった。

加えていじめのこともある。あおいはますます人間不信に陥った。しかし。

みそぎやあいはらたちの献身のおかげでいじめは確実に沈静化していった。いじめつ子たちもあおいから手を引き、二、三人ではあるが友人と呼べる子もできるようになった。

その結果、あおいは人と関わるようになっていった。以前では考えられないことであった。それくらいあおいは内向的で塞ぎがちな少女だったのだ。

二人で過ごす夏祭り。

だんだんと自分に自信を持ち始めたあおい。以前は人ごみなんぞ大嫌いであったが、今はだいぶ慣れたようだった。

こうして祭事に顔を出すことができる。

みそぎは妹の克己心を心から褒めてやりたかった。

藍で染め抜いた浴衣。木綿の心地よい肌触り。兵児帯へいおびをしごいて締め、鼻緒の赤い下駄を履き、みそぎは意気揚々と祭りに繰り出す。あおいも兄に連れられ、カラコ口と下駄を鳴らしていった。

片夕暮れの草薙村は和気藹々と活気盛んだった。参道の両側に屋台や露店が軒を連ねる。辺りでは美味そうな匂いが漂い、金魚掬いで一喜一憂する人々の声が聞こえる。囃子の音頭に合わせて老若男

女が浮かれ騒ぎ、夏祭りはよりにぎやかになった。

「何食べよつか？」

みそぎがそう問いかけるとすかさず、「りんごあめ！」と勇ましい声が返ってくる。

「りんごあめか……。ぼくも食べよつかな」

みそぎはりんごあめの幟（ぼし）が立てられた屋台に目を向けた。そこには鉢巻を締めた恰幅のいいおじさんがいた。人のよさそうな笑みを浮かべている。恵比須（えびす）顔で子供たちにりんご飴を配っていた。

「これください」とみそぎは慣れない手つきで懐に手を入れた。虎の刺繍がされたかわいらしい財布。そこから小銭をいくつか取り出す。

「君とお嬢ちゃんの分かい？」

「はいっ」

「おおっ、ちよつと待ってな」とおじさんはりんご飴を二つ取り出した。それをみそぎとおおいに一つずつ手渡す。

あおいはぱーっと花開いたように笑った。鬘（まげ）甲（かぶ）の簪（かんざし）で結わえられた髪が小さく揺れる。あおいはりんご飴を舐め、おじさんに微笑みかけた。

みそぎはりんご飴の代金を払おうとした。けれど、屋台のおじさんは豪放磊落に笑い、「代金はいらぬ、いらぬ」と差し出されたお金を受け取るうとはしなかった。「今回はお譲ちゃん（おんじょうちゃん）の笑顔でまけてやつからな。特別だぞ？」

おじさんは秘密を打ち明けるように小声で言い、その後太っ腹に笑って見せた。

「ありがとう、おじさん！」

「いいってことよ。がははははは！」

みそぎは何度もお礼を言った。最後にぺこりとお辞儀をしてその場を辞す。りんご飴の甘い風味が口に広がる。おじさんの心意気が嬉しくてたまらなかった。

「よかったね、あおい」

「うん。あのおじさん、優しかったね」

あおいは兄の手を握った。伝わる体温。伝播する感情。みそぎもその手を強く握り返した。

火灯ひともし頃の縁日。小粋な祭囃子が人々を鼓こし、意気軒昂いきげんきゆうと焚きつける。美作みまさかの境内では楽しげな笑い声や話し声が乱舞し、その盛り上がりは止まるところをしない。

みそぎとあおいは次の屋台へと足を伸ばそうとしていた。

次は何を食べようかなと思案していると、見知った人影が視界に入った。

「ひさめさんっ！」

焼きそばの屋台の前には三尺帯さんしゃくおびを一重に締め、紅の浴衣を纏うひさめの姿があった。肩の辺りまである銀髪を一本に結わえてある。その後姿は小股の切れ上がった花魁おいらんのように映った。姿勢がよく、長身のわりに華奢な体つきだからか。

「おお、楔くわに葵。奇遇きぐうじゃのう」

振り返ったひさめは明朗と莞爾かんじを浮かべた。冴え返る双眸は一転の曇りもなく、穏やかに二人を認める。

ひさめは袖口から手を出し、二人を手招きをした。その肌は雪のように皚々がいがいとして白く、変な色気があった。しかし、ひさめの笑う様子は男らしく豪快で、いかにも筆太の墨絵を思わせる無骨さがあった。

「おまえたちも来ておったのか。それで、目当てはこいつなんじゃろ」

ひさめは鉄板に広がっている焼きそばを指差す。ソースであえられ、じゅっじゅっと焼き上げられる焼きそばの匂いは二人の食欲を刺激した。

「おやじ、あと二人分ほど焼いてやってくれぬか？」

「お安い御用だぜ、大槻おおつきの兄ちゃん。けど、こんなところにいてもいいのかい？」

「神楽のほうはええ。僕は和琴を弾くでの。神楽の舞を奉納する姉様はともかく、僕はあくまで裏方やから」

「時雨様はご多忙なこつた。と言うことは今も着物の着付けやら、襖みぞぎ被はを肅せい々と執り行いっていらつしやるのか？」

「その通りじゃ。姉様は今、裏の滝で御身おんみをお清めになられておる」

「兄ちゃんは今も済ませたのか？」

「済ませた。斎戒さいかい沐浴もくよくし、さきほどまで白装束で滝に打たれておつたわ」

「けど兄ちゃんよ、本当に時間とか大丈夫か？ もうすぐ始まるんじゃないのよお、時雨様の神楽舞は？」

「息抜きじゃ、息抜き。姉様がの、暇ひまじゃつたら飯でも食って来いと仰つての、それでおやじの焼きそばをこつして食たんじや」

そう言いつて美味めいそうめんに麵めんをすする。注文した二人分の焼きそばも出来上がりつつつあつた。

「そら、一丁上がりっ！」「  
どうやらできたようであつた。

焼きそば屋のおやじは、「二つ分だぜ。金はいらねえ、こいつは俺のおごりだ」とやはり物惜ものおししみしない度量りかばの深さを見せる。おやじは豪たか気に構かまえ、焼きそばをみそぎとあおいに差し出した。

「いつ、いいの？」とあおいがちらちらとおやじの気色きしきを窺うかがう。

あおいは知らぬ間に相手の顔色かおいろを窺うかがう癖くせがついているようであつた。卑屈ひくつ、卑下ひげ。改善かいぜんせねば、とみそぎは思おもう。

しかし、眼前がんぜんのおやじは竹を割わつたように小気味せうきよい男であつた。飾かざり気きのない笑わらみを浮うかべ、あおいの頭あたまを撫なでる。「いいんだぜ、お嬢ちゃん。これはおじさんからの贈たまり物ものさ。俺も商売しょうばいとは言え、いたいけなガキに金貰かうなんざ目覚めめが悪いからよお」

「ほれ、おやじもこつ言いつとる。こつ言いつときはありがたく食たつと

くのが礼儀じゃ」

ひさめも便乗するようにそう言い、「おやじ、おかわりをくれ」  
と空になった容器を突きつけた。「青海苔を死ぬほどのつけてくれ。  
後紅しようがもじゃ」

「兄ちゃんも注文が多いねえ、遠慮つてもんがねえ。まあ、作つて  
やつけどよ」

俺もつきが回ったもんだぜ、とおやじは苦笑しながらそう言うが、  
その表情は満足げであった。

みそぎはひさめに促され、焼きそばを口に運ぶ。

「おつ、おいしい」とその味に感動するみそぎ。おやじの焼きそば  
はまさに天下一品、極上の品であった。屋台の焼きそばはこんな  
も旨いのか。みそぎは夢中になって焼きそばをかきこんだ。

あおいも頤あごが落おつこちるような心地だった。兄と軌きを一いつにしてひ  
たすらに焼きそばを食べる。無我夢中、羽化登仙うかとうせんの心境であった。

焼きそばで舌鼓を打つみそぎとあおい。

おやじは景気よく焼きそばを焼く。

ひさめは今か今かと焼きそばの完成を待ちわびる。

祭りも佳境。時は夕を過ぎ暮夜ぼやの刻へと移ろいつつあった。

頭上には星の煌きが鮮やかであった。皓々と冴え渡る月光。漆黒  
の夜空。深々と更ける。

時の推移に合わせて、灯籠には赤々と燃える火が灯るのであった。  
それが縦に並び、参道の脇を無数に伸びていた。その近くには轟々と  
と活気立つ露店が軒を寄せ合う。

祭りは終わらない。

「そろそろじゃな」

狐の面を斜めにかぶったひさめは本殿のほうに目を向けた。

本殿では巫女舞の準備が肅然と行われているであろう。

さすがに戻らねばならぬ。

「楔、葵。僕はそろそろ行くでの」

「ひさめさんは踊るの？」とみそぎは無邪気にそう問うた。

ひさめは首を横にふり、「僕は踊らん。奏でるんじや。こういう風にの」と言つて琴を弾くような動作をした。

その素振りだけでは、どういふ楽器をひさめが奏樂するのか窺い知ることにはできない。当然のことながら、みそぎは邦樂について無知であった。

ポカンと口を開けるみそぎ。それを見たひさめはぶつと吹き出した。みそぎの仕草があまりに邪氣がなくて、なんだかおかしかったのだ。

「まあええ。それよりも僕は一旦戻る。後三十分もすれば神樂の舞が捧げられるはずじや。時間になったら本殿に来るといい」

ひさめは狐の面をみそぎにつけて足早に去つていった。置き土産、と言ふことが。

「行っちゃった……」

ひさめは人々の間をすいすいと通り抜けていった。その後姿を果然とした風に見る。風みたいだ、とみそぎは思った。

「そだね……」

気がつけばひさめは視界から消えていた。

「どうする、お兄ちゃん？」

「うーん、どうしようか……」

「なら、おれのたこ焼きを食いやがれっ！」と。

「あつ、あつつう！ 何するんだ！」

「何するって……おれさまの最上級のたこ焼きを食わせてやろうと思っただけだ」

「あ、あついだろ！ びつくりするじゃないか」

ふがふがと口に突っ込まれたたこ焼きを食いながら、みそぎは盛大に文句を言った。

一方の相原のほうはと言うと、まったく堪えた様子はない。いつも通り飄々と意地悪い笑みを浮かべるだけである。

「ちよつと、お兄ちゃんが困ってるよお」

「いいんだってこれくらい。あおいちゃんも食ってみろって。死ぬから。これ、旨すぎて死ぬから」

あいはらはたこ焼きの入ったトレイをあおいに渡した。

あおいは半信半疑な視線をたこ焼きに、そしてあいはらによこす。恐る恐るたこ焼きを食べてみた。するとたちまち、その表情は満ち足りたものとなった。

「……おいしい。このたこ焼き。おいしい！」

「だろ、だろ、だろ？ このたこ焼きはうまいんだよ。神がかってんだよ。けどこいつは文句しか言わねー。ことあるごとに文句しか言わねー。罰当たりなやつめ。呪われるっ。たこ焼きの神に呪われるっ」

「……なんだよ、たこ焼きの神って。八本足の神様なんていないだろ。おすしでおいしく頂ける神様なんていないだろ」

「これはたこ焼きだっ」

「分かってるよ！」

みそぎは肩で息をした。たこ焼きはすでに咀嚼済みだった。慮外、美味しかったことが腹立たしい。

「……それで」とみそぎは一旦息を整えて、「それでおまえはなんでここにいるんだ？ しかもそんな格好で」とあいはらに問いかけた。

「ああ、これだろ」とあいはらは己の服装を改めて眺めた。「おまえは知らないだろうけどよお、熱いんだよ鉄板。ほら、たこ焼きって鉄板つーか穴がたくさん開いたやつで焼くだろ？ あそこでずっと焼いてるとよお、焼け死んだりする。あまりの熱に焼け死ぬんだよ、これが。熱が体にこもっちゃう。だから下着姿に短パンつーラフな格好になっちゃう。自然に、いつの間にか。抗いがたい。しかたねえだろ」

「……おまえ、意外と大変なんだな」

「店、任されてるからな。小学生に運営やらせるなんて鬼だろ、おれの親」

そう言うとおおいはびくんと体を引きつらせる。その目は遠いものを眺めていた。

あいはらはばつが悪そうな表情を作った。「いや、そうだった。

ごめん」

「別にいいよ。気にしないでいいから」とみそぎは妹の体を引き寄せた。あおいは耐え忍ぶようにまなじりを決した。

いまさら悔やまない。親がいないとか、愛がないとか、仕方がない。両親共々、すでに鬼籍に入ったのだから。

今更親が恋しいとか言つてられない。また、妹がそう思ったら、兄である自分が何とかしなくちゃいけないのだ。あおいが寂しくならないよう、悲しい思いをしないよう必死に寄与しなければならぬのだ。

母親が死没してしばらくになる。それでもやはり、母の温もりを忘れることはできない。あおいもだし、みそぎも例外ではない。常にどこか虚しい思いに駆られる。空々とした哀惜を覚える。

仕方のないことだといつても、割り切れない。それはみそぎたちが人の子であるからか。

息苦しい沈黙。

それを破ったのは不自然に明るいついでであった。

「そ、そう言えばひさめさんとしぐれさんのあれ、見に行かねえ？

まだ時間的に余裕あるけど、早く場所を陣取りしとかねーと」

「うん。早く行かなくっちゃー！」

同様に不自然な声。みそぎはあいはらに同調するように陽気に言った。

……あいはら、ごめん。

気を遣わせてしまつて立つ瀬がなかった。あいはらに悪意はない。それは明白。少なくともあいはらは悪くない。

だから罪悪感を感じてほしくない。あいほらはいほらのペースのままできてほしい。

その思いが伝わったのかどうかは分からない。けれどもあいほらはより一層楽しげに笑い、本殿の方へと歩き出した。

みそぎとあおいもそれに倣う。

その途中、店番とか大丈夫なのかな、と思いはしたが、口にはしなかった。

## 第十八話

易に太極有り。これ両儀を生ず。両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず。八卦は吉凶を定め、吉凶は大業を生ず。

「うわあ……！」

みそぎは胸底からの感嘆の息を吐いた。  
迦陵頻伽かりょうびんがな調べ。笙しょうや箏じゆの音色。箏そうや琵琶びわの和音。厳肅な雰囲気を作る。その様相は非日常を思わせる神々しさを呈していた。

小高い台の上。

肅々と舞う巫女装束の少女。赤の伊達襟を重ね、半襦袢と白衣の間に着け緋袴を着付けている。飾られた花簪に赤の行灯袴。少女は静々と神楽鈴を片手に舞を奉納していた。

巫女舞を謹んで拝見する観衆。その目は舞い遊ぶ巫女に釘付けであった。彼我ひがの混濁。トランス状態に陥る巫女の少女。そして、観衆。それは想像を絶する一体感となって全てを包み込む。

鳳凰ほうおうの神紋の入った千早。太極図を模す足運び。  
その裏。

「あつ……あれ、ひさめさんじゃねーか？」

あいはらは和琴を奏でる少年を目で示した。

「……ほんとだ」

「お琴、弾いてる。なんだかすごいねっ」

あおいは感動した風に言う。事実、その荘厳さに震え上がっていた。耳は流麗な調べを脳に刻む。準じて鈴の音がさらさらと流れていた。

筆舌に尽くしがたい。しぐれの玲瓏<sup>れいろう</sup>たる舞。ひさめの高雅な和琴の音調。雅やかな調和。渾然とした秩序ができあがる。その諧調<sup>かいちょう</sup>の取れた神楽。陶然とまどろんでいく。

みそぎの脛の裏にはよどみなく舞い踊るしぐれの艶姿があった。白装束がたゆたっていく。その姿に蝶々を投影するみそぎ。

脳裏に四角い画面が過ぎる。その中でうごめく何か。そいつがそよそよと飛ぶ蝶を捕獲していく。

重なっていく。二つの光景が一つに重なっていく。

現出する幻。そうした幻想の中に一つの感情。産声を上げて、みそぎを闇へと飲み込んでいく。

飲み込む。

飲み下す。

飲み倒す。

飲み潰す。

「……………っておい。べにばな  
ん」

「ん、じゃないだろ。見てみるよ。しぐれさんすごすぎだつ。言葉に表せねえ。表せねえけどとにかくすごい。だろ、べにばな？」

「あつ……………うん。すごい、ね」

「そうだよ、お兄ちゃん。しぐれお姉ちゃんすごいよ。わたしもお姉ちゃんみたいになりたい……………」

「なれるよ」

「そうかな？」

「あおいなら」

みそぎはにっこりと笑った。確信のこもった笑みであった。

あおいは照れたようににはにかなかった。「だといいけど……………どうかな」  
「なれるだろ。あおいちゃんかわいいから。超絶美少女だから」

「それは微妙に方向性が違うだろ」と突っ込むと、あいはらはニヤニヤと笑った。

「けどよあ、あおいちゃんがかわいいのは事実だろ。苛めたやつらもあおいちゃんがかわいくて、こっち見てほしかったから苛めたように思うんだけどよ」

「かもしれない……。ちょっと複雑」とみそぎは目を細めた。「そうだとしても許さないけど」

「典型的ないじめっ子心理。気をつけておけよあ、べにはなよあ。あおいちゃん超絶美少女だから、もたもたしてつとどこぞの馬の骨に搔っ攫われるぜえ」

「……こう言うのを娘を嫁に送り出すお父さんの心情なんだろうね」とみそぎは儂げな表情を作った。考えてもみなかったが、あいはらの言うとおりだ。

あおいもいつか、自分の元から自立する。雛鳥が巣立つように、時が過ぎればあおいもそうなるのだ。

寂しい、とは思う。けど、歓迎してやりたい。いつか来るその日を楽しみに待っていたい。

あおいはぎゅーつとみそぎの服の袖を掴んだ。「大丈夫だよ、お兄ちゃん。わたし、どこにもいかないから……」

みそぎは苦笑しながらも、あおいの頭を撫でてやる。

黙って受け入れる。

「お兄ちゃん」

「なに？」

「お兄ちゃんもどこにも行かないよね？」

「行かないよ」

「わたしもずっとお兄ちゃんのそばにいる。あいはらお兄ちゃんと遊んで、しぐれお姉ちゃんにお裁縫習って、ひさめお兄ちゃんに木登り教えてもらう。だから……お兄ちゃんをドキドキさせるようないい“おんな”になるんだからっ！」

びしっとな言われる。あおいはみそぎに指を突きつけた。顔は

赤い。その後すぐに、恥ずかしそうに指を下ろすのだった。

「おおつ、宣戦布告だぜ、べにはな。こいつは覚悟しとかねーとなあ」と平生どおりの茶化すような口調。「くれぐれも実の妹に惚れるなよお、べにはなよお」

みそぎはあおいのかわいらしい物言いに困惑しながらも、その勇ましさにも頼もしさを覚えていた。

ぼくも。

ぼくも、がんばらなくちゃ。

「だったらぼくは、頼りがいのある“おとこ”になるっ！」

「だったらおれは、世界一危ない“おとこ”になるっ！」

みそぎとあおいはあんぐりを口を開ける。一方の本人はポーズを決めて空に指を突き上げていた。

「……なんだよ、それ」

「なにもどうにも目標だろ、目標。おれは世界一危ない“おとこ”になると誓ったんだ」

あいはらは風雲の志を堂々と二人の前で披瀝ひれきした。しかし、あいはらの志を理解するものは誰一人としていなかった。

「そもそも危ない“おとこ”ってなんだよ。ナイフでも振り回すのか？」

「違うから。全然違うから」とみそぎの言を訂するあいはら。「おれの言う危ないってのはよお、思想的なやつだ。それによお、日本語の表現で、危ない男ってあるだろ？ そんな感じだ」

「ぼくにはまったく分からないんだけど……」

みそぎは呆れたように苦言を呈した。あいはらの理解不明な言動は二人を大いに戸惑わせた。それは単純にあいはらが天性のバカである可能性もあったが、燕雀えんじやくいずくんぞ鴻鵠こうくの志を知らんや、と言う可能性もなきにしもあらず、である。

「まあ、いいか。とにかくおれは世界一危ない“おとこ”になつてやる。だからよお、おれに近づいたら火傷するぜ」

なんじゃそら、とみそぎは辟易するが、あいはらは構うことなく

変な一家言を二つに教授し続けた。

「そう言えば前におまえが、蝶々が好きだと言っておったの」  
拜殿裏の庭。

照る月明かり。葉桜の湿気ったにおいが夜風に運ばれていく。その静けさは祭りの終極を暗示しているかのようであった。

ポツポツと畳まれる幟や屋台。業者の手によって提灯ていとうが外されていく。余った仮面や金魚は物悲しく回収されていった。

夏祭りの締めである神楽舞の奉納が終わり、非日常を作り上げていた舞台が解体されていった。人々は非日常から日常へと帰趨していく。それが祭りの本質であった。

「それがどうかしたの？」

「ふふふ、みて驚くでないぞ……」

しぐれはおもむろに厚い本ののようなものを取り出した。  
開けてみる。

すると、その中には展翅てんしされた蝶の標本があった。鮮やかな色彩をした蝶々。列を成すように針でとめられている。

みそぎは歓声を上げた。

「これはな、曾御祖父ひいおじい様秘蔵のコレクションでな、曾御祖父様は熱狂的な蝶の収集家だったんじゃ」

みそぎは恋焦がれるように標本を眺めた。

展翅板にとめられた蝶々たち。

整然とした美しさ。どこか妖しげで妖艶ですらある。  
ただ。

言い換えてみればそれは、しょせん物言わぬ遺骸であった。

死。

死。死。

蝶の死。

「曾御祖父様はすでに身罷っていらつしゃつてな、これは曾御祖父様が残してくださった大切な遺産じゃて。うちの宝物じゃ」

「いいなあ、いいなあ。ぼくもほしいなあ」

「さすがにやることはできません。できんがこうして見せてやることくらいはできる。見たくなつたらここに来るがよい。いつでも見せてやるからの」

「うん！」

みそぎはぶんぶんと首肯した。それくらいしぐれの提案は魅力的だった。

大げさなみそぎの反応。幼心の発露。しぐれは楚々と表情を緩めた。

みそぎの頭の中は無数の蝶々で一杯だった。留め針で身を穿たれた蝶々で一杯だった。

前翅に二十本。

後翅に二十本。

計四十本の針に刺し抜かれた軀。不自然に整えられた触角、翅。それがやけに細い針で串刺しにされていた。

まるで十字架を思わせるそれは、罪人の手足に杭を打ち込むような残酷さを思わせる。

展翅板は十字架で、針は杭。それが生あるものに突き立てられていく。

無様、と言うわけではない。むしろ、秀麗。咎の桎梏に捕らえられた肉体は人の浅ましさを、愚かさを神聖なるままに解放しているように思った。まさに神の掌たなこころによって打ち付けられた咎人のようであった。その想像、着想はみそぎの全身に官能的な熱を巡らせた。

空っぽな穴が口を開けて待っている。晦冥の無へと続く扉が開こうとしている。

知らず知らず。

通り過ぎよつと。

している。

「しかし、いつ見ても綺麗なもんじゃ。特に好きなのはこのアゲハチヨウかの。襖はどれが好きじゃ?」

「ぼくは……これかな」

「おまえはいい趣味をしておるの。うちもこの鮮麗な彩りには目を見張っていたところじゃ」

「しぐれさんも?」

「と言うより、どれもがすばらしくて甲乙つけがたい、と言ったところか。どれもこれもが秀逸。これだけ見ても飽きんわ」

それはみそぎも同意見だった。神秘的な超の標本はみそぎとしぐれの心を掴んで離さなかった。

「……腹が減ってきた。そろそろ氷雨たちのところに戻るかの」

しぐれは後ろを振り向く。きつとしぐれの家の中ではひさめたちが餅を食っているところだろう。みそぎとしぐれは例の標本を見せるためにそこから抜け出したのだった。

みそぎの腹の虫が鳴る。祭りの最中にそれなりに食べてきたのだが、やはり成長期と言ったところか。

「襖も腹ペコのようじゃな。今夜はお母様特製の草餅じゃから、はよう戻らんとみなに食われてしまうぞ」

その姿が容易に想像できたみそぎは、「早く行かないとあいはらのバカに全部食べられちゃう!」と大慌てでしぐれの家へと向かった。

「おいおい、そんなに急がんでも」

「どつちが先に着くか勝負だ!」

「ほう。自ら敗北を選ぶか……」

しぐれはパタパタと草履を履いた足でみそぎを追いかけていった。当然のことながら、しぐれの勝利に終わる。

## 第十九話

その兆はずつと前から現れていたのだと思う。

僕は雑踏の中にいた。

途切れぬ足音は蝉時雨のように僕の耳朶じだを打ち付けた。引きつるような笑い声が残響する。

すれ違う人々。

それを横目に僕は壁面に背を預けた。ポケットに手を突っ込んでぼーっとする。

仰視してみれば突き抜けるような空があった。翡翠ひすいのような色合い。爽やかな碧天へきてん。

視線を戻す。

眼下には無数の人間、人間、人間。どこまでも人間。飽きるくらいに人間。

辟易する。

駅前のショッピングモール。

そこは草薙の村でも都会と呼べる場所だった。店は多いし、ビルも多い。何より人が多かった。草薙村の人口の大半はここに集中しているように思う。

ここに向かうための通行手段はほぼ電車に限られる。徒歩や自転車で行くこうにも遠い。まして僕は自動車を運転できる年でもない。

その所要時間は約三十分。大して距離は離れてはいないのだけれど、たったの三十分でこうも違う。長閑で何も無い自宅周辺とは違って、ショッピングモールは乱雑に人が行きかっついて、息が詰まる。同じ村と言っても大違いだった。

普段、ここに来ることはそうそうない。人ごみが嫌いだからだ。にもかかわらず。

ここにいます。

なぜか。

「お兄ちゃんっ!」

妹が店の自動ドアから出てきた。手には膨らんだポリエチレンの袋が握られている。

葵は屈託のない笑みを浮かべていた。肩で切り揃えられた黒髪が風になびく。それに準じて羽織っていたパーカーもはためき、チエツクのスカートも揺れる。露出した大腿だいたいは艶やかで、やたらと目に立つ。今日の葵の格好は妙に扇情的に映った。

「何を買ったの?」

「これ」と葵はポリエチレンの袋から二つのマグカップを取り出し、「私とお兄ちゃんのおそろいのカップだよ。すごく悩んだんだけど買ったちゃった」とかわいらしく舌を出した。上目遣いに僕を見る。

葵の買ったらしいマグカップ。精密そうにできている。「その、お金の方は足りた?」

「大丈夫、大丈夫。これ、見た目が凝ってるわりに割と安いやつだったから」と葵は僕を安心させるように笑み、マグカップを袋に戻した。

そして。

葵は僕の手を引き、指と指とを複雑に絡めた。確かめるように、味わうように、指を交差させる。当たり前のように肩を寄せて、ぎゅーっと僕の腕にしがみついた。喜色を浮かべて、実に嬉しそうに法悦のこもった笑みを浮かべる。

「あつ、葵……」

「ん。どうしたの?」

僕は名状しがたい違和感を感じながらも、「変じゃないかな、こんな風にするの」と言っつて、腕を上げた。葵は僕の腕にしがみついているので、葵が僕にぶら下がっているように見える。傍から見れば間抜けな構図だった。

一方の葵は不思議そうに首を傾げた。射止めるような流し目。そ

の瞳は女としての愉悦が含まれているようで、僕を単なる兄とは認識していないように見えて、重要なネジが何個か落っこちているようだ。

「変かな、これ」

「変だよ。普通じゃない」

「普通……?」

「普通の兄妹はこういう風に腕を組んだりしないだろ」

「……お兄ちゃんは私と腕を組むの、嫌なの?」

そういうわけじゃないんだけどなあ、と思う。僕が言いたいことはそういうことじゃない。もっと根源的な 社会の一般常識に関することだ。

世間一般の兄妹は公衆の前で手を繋いだりしないし、腕を組んだりもしない。僕たちが年端の行かない子供なら話は別だけど、僕はもう中学生だし、葵は小学校六年生だ。大人の領域に足を踏み入れつつある年齢。その境界線は曖昧だけど、これくらいの分別はすでにあつてしかるべき。

感じる。

モヤモヤとした違和感を感じる。

あるいは。

背徳の悦のような、一線を越える狂気のような……。

葵は濡れた唇を僕に向けた。湿った口唇は妖花のように艶麗で、男の情欲を誘う。目もあやな瞳も整った鼻梁も、葵の魅力をより輝かせる素材だった。

ぎゅーっと手に力がこもる。指の関節が痛い。葵は僕の手を握り潰すかのように力を加えた。

痛いと言える雰囲気ではなかった。葵は能面のように無表情だった。その気配は荊いばらのように刺々しく、鋭利に尖っている。

その雰囲気気圧された僕は口を噤んだ。

「家族じゃん」と呟く。「私たち、家族じゃん」

「え」

「家族は大切にしなくちゃダメ。一緒にいなくちゃダメ。それくらいお兄ちゃんも分かるよね？分かるよね、分かるよね、分かるよね？だから、腕を組むくらい、なんでもない。それこそ普通なことなんだよ？家族が家族のことを大切にすることで何か変なことかな？別に变じやない。普通。当たり前。だから、私のやってることとは正しい。お兄ちゃんと手を繋ぐことは正しいことなの。こうしてお兄ちゃんとの仲を深めようとすることはごく普通の行為なんだよ。だってわたしたちは二人だけの家族、兄と妹なんだから。だから、二人でお買い物に行ったり、二人で映画を見に行ったり、二人で喫茶店に入ったりすることは、不自然なことじゃない。まとも。いたってまとも。そうだよな？」

まとも、なのか？

前に周囲の連中に聞いてみたけど、そんな答えは返ってこなかった。おかしいだとか、異常だとか、そういう返答ばかりだった。

当然葵のことは大切にしているし、今後もしたい、と思っている。葵の言説どおり、葵は僕の唯一無二の家族で、かけがえのない妹だ。その考えは今も昔も変わらない。

しかし。

今のこれは少々様相が異なるように思えた。

葵の言う家族愛と僕の想像する家族愛はなにやら根本的に違うようだった。葵の提示する家族愛は倫理に基づく絆などではなく、もっとその……兄妹の境目を踏み越えた先にあるもののように思えるのだ。

見識の不一致。どこかが致命的で、ぞっとするような怖気を覚える。それは人の踏み行すべき道に悖るもとような気がするんだ。

「あのね、葵」と懇々と諭すような口調で言った。「それは僕もそう思う。思うけど……これはちょっと違うんじゃないかな。確かに僕は葵が好きだし、葵も多分僕のことを好きなんだと思う。けどね、行き過ぎてる。おまえは外してはいけない箍を外しているように思うんだ。度を越している。考えても見ろよ。さっき僕たちの見た映

画で兄と妹が登場した。その中の二人は今の僕たちみたいに手を繋いだり、腕を組んだりしてなかったよね？ 変なんだ、どこかが。そもそもおまえ、本来なら浴衣ゆかたちゃんと一緒に遊びに行く予定じゃなかったのか？」

葵の眉が神経質に蠕動ぜんどうする。手の力ははずると緩んでいた。が、反面、葵の押し潰すような重圧が眼に見えて濃くなったように見えた。

雑貨店の店先。

通行人が不思議そうに僕たちを流し見る。無遠慮な視線や詮索するような視線。ひよっとしたら、僕たちが喧嘩中の若い恋人同士に見えたのかもしれない。

違和感。猛烈な違和感。

冷たい腕に心の臓を鷲掴みにされるような感触。身の毛のよだつ物恐ろしさが生起する。それは床が抜け落ちるような恐怖だった。「……なんで。なんで浴衣のこと、知ってるの？」

と。

呟く。

押し殺したような声で。

呟く。

「昨日彼女と会って聞いたんだ。僕たちがさっき見た新作の映画。あれ、元々浴衣ちゃんと見に行くはずだったんだろ？ 二人分のチケットも用意していたみたいだし」

「会った……の？」

「うん。夕刊を配達しているときに偶然会って、そんなことを聞いた。それよりもいいのか？ きつとさ、浴衣ちゃん、楽しみにしてたんじゃないかな」

「そう……」

「浴衣ちゃんの予定でも変わったの？」

「うん。そうだと……思う」

「思う?」

「……………」

葵は無言だった。口を閉ざし、話そうとしない。

話す素振りもない。

奇妙な空白。停滞する空気。ぽっかりとした空洞が穿たれる。

「……そういえば」

ふいに。

ふいに声。

「そういえばお兄ちゃん。昨日の夜に携帯で誰かと話してたみたいだけど……誰?」

暗い目で問いかける。

「ああ、浴衣ちゃんだよ。せつかくだからってメールアドレスを覚えて貰ったんだ」

葵は空ろな表情で返事をした。雲散霧消。消え行く余韻に喉がひりつく。葵の意識は薄弱でその目は暗褐色に混濁していた。

色々な人が目の前を通り過ぎていく。

男、女、子、鳥、犬。

性別、年齢、種族、関係ない。スーツを着こなした男性、ハイヒールをはいた女性、天衣無縫な子供、禿頭の老人、電線に足をかける鳥、リールにつながれた犬。

生物の増埒さかば。各々の道、人生。離反しては交錯していき、連綿と繰り返される。点や線。入り混じる。僕たちのあり方。運命。出会っては離れていく本性、宿命、その螺旋。

草薙村の駅前には雑然としていて、騒々しかった。

表裏をなして、葵は静かだった。不自然なくらいに静かだった。

海風。僻陬へきずうの村に吹きすさぶ潮の匂い。それが人の匂いと混交して僕の隣を滑っていった。

蒸し暑い夜。

「うだあー」

粘っこい暑さにすっかり参ってしまった僕は、ソファアの上でぐだつた。足を投げ出し頭を上へ向ける。そうしてぼんやりとする。それがここ最近の日課となっていた。

「もう、そんなにぐだらないのー」

妹の注意も何のその、僕はソファアに全身を預けた。「僕は暑いのが何よりも嫌いなんだ」

「誰でもそうだと思っけど……」

葵は皿を拭きながら、呆れたように言う。  
と。

「……誰だろう？」

ふいに鳴る携帯電話。僕はそのそーっと手を伸ばしてテーブルに放置された携帯電話を手を取った。

「もしもーし。誰ですかー？」

『僕じゃ、楔。いや、それよりもなんじゃ、その腑抜けた返答は。うだる夏の暑さにやられた口か』

みるみる意識が鮮明になる。僕はソファアから飛び上がった。「ひ、氷雨サン！ どうして、その、いきなり……」

『うるたえんでええ。別に赤紙渡すわけでも、冥界からの電話と言っわけでもない。ちーとおまえたちに頼みたいことがあってな』

「頼みたいこと、ですか？」

『ああ。そう難しい話じゃないぞ。時期的にもこの頃であるうな』  
僕は氷雨サンの言いたいことがなんとなく分かった。時節のことを鑑みれば、すぐに類推できることだった。

「夏祭りのことですか？」

『ご明察。後三日もすれば夏祭りじゃろう？ だからの、おまえと葵に明日、祭りの準備を頼み申したいと、そう言うことじゃ』

そう言えばもう夏祭りの時期だったんだっけ。

カレンダーを盗み見てみれば確かにその通りだった。

「葵。明日は大丈夫？」といったの間にかすぐそばに来ていた葵に問いかける。葵は逡巡することなく頷いた。

「葵も僕も大丈夫です」

『そうか』

「相原のほうにも声をかけたんですか？」

『俺はすとリーとらいぶなるもので忙しいそうじゃ』

「……なるほど。あいつは今夜からずつと暴れまわる魂胆か」

『むう、そうかどうかは知らん。……まあ、あいつはあいつで楽しくやつとるじゃろ。それにおまえにも世話をかけっぱなしじゃ。すまんの』

「そんなことはないですよ。僕のごとは全然こき使ってくれて構いませんから」

『……おまえらしい物言いだな。勿論働き手は丁重に扱うからの。』

では、また明日じゃ』

「はい」

電話が切れる。

僕は携帯電話を閉じようとした。

と。

「……あれ」

異変に気付く。

それは電話帳に現れていた。

おおつきさめ それは電話帳に現れていた。  
おおつきさめ 大槻氷雨はあ行に登録されている。あ行はほかにあいらいおり相原庵、おおつき大槻きしくれ時雨きしくれと続いている。

「どうしてだろう？ 浴衣ちゃんのメールアドレスが消えてる……」

いじえゆかた 入江浴衣はあ行の段に属している。なのに電話帳にはそれが載っていない。昨日の夕方に登録したつもりんだけど……。

と。

「消したよ」

冷え冷えとした声。

「……え」

「私が消した」

「……葵が？」

葵のほうを向く。

葵は柳腰で僕の隣に座っていた。こちらを見る目は妖にして艶で、やけに澄み切っている。

なのに。

なのに、その雰囲気は僕の心胆を寒からしむる毒があった。人としての道義を踏み越えた淫靡いんびさがあった。

「そうだよ。イヤだった？」

主軸からずれたような問い。イヤとかイヤじゃないとか、そういうことじゃなくて……うう、なんていつたらいいんだろう？

「その、勝手に見たの？ 僕の携帯」と小さな声でそんなことを言った。

「見たらダメだったかな？」

「うーん」と僕は呻吟した。言葉を慎重に選ぶ。「あんまり……感心しないな」

すると。

葵は不機嫌そうに眉を顰めた。邪よこしまな色をした双眸はどんよりとしていて、獣のように息を荒らげる。唇はわなわなと震えていた。

「そ、そうやって、もも、もっともらしいプライベートを、わっ、私たちの間に持ち込むの？ 携帯見るくらいにしたいしたことじゃないよ。携帯をこっそり閲覧することはいけないことかもしれないけど、それは人間心理の必然でしょ？ お兄ちゃんがバカな女に騙されないかとか、ほかに女ができてないかとか、私としては気になるの。私だってお兄ちゃんが気になる。お兄ちゃんがどういう交友関係を持ってるか知りたい。全部知りたい。それなら携帯見るのが一番手

っ取り早いから。だよな？ お兄ちゃんもそう思うよね？ 私がほかの男と一緒にいたらお兄ちゃんはどう思う？ イヤだよな。不快な気分になるよね。私だってそんなことを思ってるんだよ。お兄ちゃんが私以外の女と会ってないか気になるの。イヤな気持ちになるかもしれないと分かっても、お兄ちゃんのことを知りたいの」

粘着質な視線が僕を貫く。

艶かしい舌なめずり。笑みの形を作る顔。人形のように可憐に整った面貌。

それは妄執。常軌を逸した妄執。

「それにお兄ちゃんにはあんまり私の友達とは仲良くしてほしくないかな。あんまり無駄な関係ができちゃうと、私がお兄ちゃんと一緒にいれる時間が少なくなっちゃうから。家族はやっぱりずっと一緒にいないとダメだよな。それにお兄ちゃんはかっこいいから浴衣がお兄ちゃんに惚れちゃうかもーとか、逆におにいちゃんが浴衣に惚れちゃうかもーとか思ってるし。そんなことないと思うけど。ありえないと思うけど……」と言いかそんなこと、絶対に許さないけど……けどね。もしもだよ。もしも、お兄ちゃんがほかの人に惚れたり、惚れられたりしたらイヤだから。そんなことになったら私、シヨックで死んじゃうから。生きていけなくなるから。お兄ちゃん抜きだったら私、生きていけなくなる……。それに。それにお兄ちゃんが私のいないところで笑顔になってたり、楽しそうにしていたら私……。うう、うううううう！」

葵は泣きそうな目で僕を見ていた。

「……葵？」

「そういえばお兄ちゃん。昨日街に行ったとき、派手な服の女の子たちに取り囲まれてなかった？ お兄ちゃんはそう言う人じゃないから分らないと思うけど、あれはね、逆ナンって言うんだよ。その人たちはお兄ちゃんに気があったんだよ。私が横から割り込まなかつたら大変なことになってたかもしれないよ？ 変なことさせられてたかもしれないし、もしかしたらお兄ちゃんの貞操奪われてた

かもしれないし……。そこで私は思うんだけどね、お兄ちゃんは今から離れたらダメなんだよ。私がそばにいないとお兄ちゃんはどこか抜けてるから災難に遭っちゃうよ。それを未然に防ぐためにも、ずっと私のそばにいてよ。ずっと隣にいてよ。それが一番の良策だと思うな。だから、お兄ちゃんが私以外の人と関わってたらいけないの。その分お兄ちゃんが危険にさらされるから。ほかの人たちだったらお兄ちゃんを守れないよ。だからこうするんだよ。こうすればずっとお兄ちゃんが私のそばにいられるから。当たり前のことだよ、これくらい。だって私たち、家族なんだし。家族は絶対に離れたらダメだし。でしょ、お兄ちゃん？」

## 第二十話

いつどこで葵がおかしくなったのは定かではない。  
ただ。

気がつけば葵は変な具合になっていて、知らぬ間に折り紙つきのお兄ちゃんっ子になっていて、いつの間にか過剰なまでに僕に依存するようになっていた。

ああ。どうしてなんだろう？

自室の机で頬杖をつきながらそんなことを思う。

僕の頭の中には先刻の葵の様子が想起された。

それは独占欲のように思えた。葵の振る舞いは常軌を逸していて、貪婪どんらんですらあった。

あるいは。

何かに懊惱ういぼうしているようでもある。抗いがたい鎖に身を絡めとられていたようにも見える。宿業、修羅の妄執。何気ない口吻から漏れる言葉。所々の片言隻語へんげんせきごからそのような雰囲気が窺えるのだった。狂ってるのかな、僕たち。

薄々と葵の罪深さに気付き始めた僕。けれど、あえて知らない振りをして、これまで生活してきた。葵の気持ちを徒あたや疎かにして糊こ口こうを凌いできた。

そうしなければいけないような気がしたから。

そうしなければこれまでの関係が崩れてしまいそうだったから。

兄と妹と言う普遍で変わることはない関係がまったく別のものになっってしまったから。

僕と葵は家族で、血の繋がった兄妹だ。これは確然たる真実。絶  
対だ。

けれど。

そのことを知っているのに葵は……。  
流されてはいけない。

葵に流されてはいけない。もしそんなことになってしまったら、人の道を二人して踏み外すことになってしまう。人倫に悖<sup>もと</sup>ってしま<sup>う</sup>。それはなんとしても回避しなければならぬ。僕は葵の兄で葵は僕の妹なのだから。

イノセントタブーだなんて洒落にならない。家族同士で契るなんてどうしたつて了見違<sup>い</sup>だ。色々なものに違法している。

……とは言え。

それを一概に悪だとは思えない僕もいた。

血縁関係にある異性が情交を結ぶことが悪だとは言わない。

けれど。

それは、誤りなんだ。人間として間違っているんだ。そうだと、

葵？

それに。

僕は正義が嫌いだ。もつともらしい正義を掲げて懶惰<sup>らんた</sup>に生きる人間が嫌いだ。

誰かが困<sup>つ</sup>つていても自己の損得を何よりも優先する人間。弱き者を助けない人間。そんな人たちが今の世には飽和している。感冒のように猖獗<sup>じやうせつ</sup>している。

もしくは。

今のご時世は、正義のヒーローが悪をフルボッコにして賞賛されるような世界なんじゃないのかな。正義と言う錦の御旗を掲げて、悪を滅ぼす。そうして殲滅、根絶やしにする。そんな偏執的な世界のように僕は思う。

悪が悪いんじゃない。悪いことが悪なのだと思う。少なくとも身勝手に悪だと決め付けるのはよくない。犯罪とか人殺しとか当然いけない。けれど、何々だから悪だとか、おまえはこうだから悪だからとか、偏<sup>へん</sup>つてるし変だ。巷間の言う悪とはそんな単純なものなの？ もつと悪人の感情を忖度してほしいよ。

人の悪意とか害意とか、好意とか善意とか、もつと複雑で深遠なものだ。入り組んでいて多重の層を成しているのだ。

だから、葵の感情も悪ではないのかもしれない。悪いことではないのかもしれない。ひよっとしたらごく当たり前の感情なのかもしれない。

分からない。

何がどう正しくて、何がどう間違っているのか、僕には分からない。何を判断材料にすればいいのか、皆目見当がつかない。

それは僕の了見の狭さを示しているのか。それとも僕の心の弱さを示しているのか。

前者なのか後者なのか。

後者なのか前者なのか。

分かるわけがない。

昔日に思いを巡らす。

数年前の夏祭り。ちょうど葵が苛めから復活した頃だったかな。

僕と始めて夏祭りに行ったんだっけ。

楽しかった。あのころの僕は純粹で無知で何も知らなかった。こうして悩むことも煩悶することもなかった。いたって幸せで何も考えなくてよかった。

葵も僕を兄として慕ってくれた。兄として生活、妹としての生活が成り立っていた。それが当時の平生だった。

否。

もしかしたら。

もしかしたらあの頃から禁忌の兆が萌芽していたのか。

僕がああ粘ついた視線を感じたのはいつの頃だったのか。

舐めずるような仕草で触れてきたのはいつの頃だったのか。

それが致命的に間違っていると感じたのはいつの頃だったのか。他者と異質であることは罪なのか、そうではないのか。

罪とはなんなのか。

愛とはなんなのか。

「……寝よ」

そうため息をついて、さっきから無聊ぶりように弄んでいた猫の死体を無

造作に投げ捨てた。

次いで、二ヶ月に渡って徳島県草薙村で中年男性（41歳）と専業主婦（36歳）、男性フリーター（22歳）が相次いで刃物でめつたざしにされる事件についてですが、県警の調べによりまずと一連の事件は通り魔的で、被害者にこれと言った共通点はなく、捜査は難航している模様です。また、地域の小中学校では集団下校が行われ、地域住民の協力もあり

「最近の村は物騒になったもんだね、お兄ちゃん」  
朝の膳。

僕と食卓を囲んでいた葵はそんな旨のことを言った。

おもむろにテレビを見る。テレビにはニュースキャスターらしき男性が草薙村の殺人事件について報じていた。その悲惨、残酷さを真摯な姿勢で訴えている。

「そうだね」と気のない返事をして、焼き魚に箸を突き立てた。ぐしゃと音がして、魚の身が崩れていく。解体される肉。誰でもない何かに搾取されていく運命、摂理。

「お兄ちゃんも夜道は一人で歩いちゃダメなんだからね」

「それは僕のセリフだよ。葵こそか弱い女の子なんだから、夜道には注意するんだよ」

「へー、お兄ちゃん、私のこと心配してくれるんだ」

「当然だろ」と口を尖らせて、「僕はおまえの“兄”なんだから」と“兄”の部分を強調させる。

葵はむつと顔をしかめた。

それでいいんだ、と思う。これでいい。これこそが家族のあり方。正しい、正しい、家族のあり方なのだ。

許されざるものは僕一人で十分なんだから。

「けど、なんだか変だよ。こんな長閑で平和な村に殺人事件だなんて、似合わないよ」

「似合わない、ね」と唇を歪めて問う。「なんでそう、思う？」

葵は僕の奇妙な物言いに首を傾げた。「何でって言われても……ほら、この村は辺鄙で平和。殺人なんて無縁のところじゃん。だからその、風土って言うのかな？ うーん、平和な草薙村の風土に合わないなって思ったの」

「風土なんて関係ないと思うよ。いつどこでも、悪意は芽生える。それはいつしか溢れ出る。すると、さっきみたいにニュースになるんだ」

「……悪意、かあ」

「そもそも思うんだけど、こうやって殺人事件を放送するだろ？ ありえないとか、信じられないとか言って。アレはね、嘘なんだ。全然、まるつきり、思いつきり、嘘。多分世間のみんなは考えていないだけ。自分が殺される可能性、その発生率の高さに。……それでね、僕は思うんだ」

飯を無遠慮に咀嚼していく。歯ですり潰された魚の骨、身、肉。唾液とともに嚥下されていく。

「町に行くだろ。するとシャツを着た子供とすれ違うんだ。ほかにも、喫茶店に入る女性。ベンチに座る男性。携帯を片手に歩くサラリーマン。色々な人を目にする。それでね、その人たちは考えていないんだ。自分が殺される可能性。極論を言えば、すれ違いざまにナイフを振るわれる可能性はゼロじゃない。だよ？ 車が突っ込んでくる可能性も、通り魔に遭う可能性も、テロに遭う可能性も、もつと言え隣にいた人に殺される可能性もある。ウエイトレスが料理に毒を盛ってる可能性も、ベンチの下に爆弾が設置されて

いる可能性も、携帯から毒ガスが出る可能性も、十分ありうる。起こりうるであろうことは、起こるべくして起こるんだ。その確率がゼロに近くても、人はいつかは死ぬんだから、死ぬのが早いか遅いかだけの違い。わずかな差異。ほかにも人が死ぬ可能性は無数にある。殺され方にも惨殺、強殺、撲殺、刺殺、絞殺、扼殺、轢殺、圧殺、毒殺、謀殺、銃殺、屠殺、薬殺、叩殺、斬殺と星の数ほどあるし、死に方にも病死、戦死、爆死、縊死、圧死、客死、事故死、衰弱死、過労死、窒息死と枚挙に暇がない。ほら、世界にはこんなにも死の可能性がある。だから、人が死ぬってことは思ってるほど不思議でもないんでもない。普遍的なこと、ありふれた日常の一片。けど、普通の人間はそんな想像はしない。そんなの力オスだ、ありえないって　そう思うんだ」

葵は目を点にしている。

それもそうか、なんて思う。僕の話は倫理観に接触するものだったし、常識とか言う奴とはまったく相容れない空論でもあった。その論拠もまた極めて恣意的で、独善的で、盲目的だった。

「……なんか、相原さんみたいなこと言うね。どうかしちゃったの、お兄ちゃん？」

「相原もここまででは言わないよ。けどまあ、僕もあのバカに感化されたのかもしれないね」

僕は静かに笑い、ふと、月曜日の夜に刺し殺した男の顔を思い出した。

美作神社は露天や屋台などで輻輳ふくそうとしていた。まだ夏祭りは始ま

っていないと言うのに、早くもわいわいと賑わっている。銘々楽しそうに飾りつけをしていた。

僕と葵に割り当てられた仕事は、参道一带に提灯を巡らすこと、そして境内の清掃だった。

参道の辺りには葉桜の葉が幾重もの層をなしていた。落ちた枯葉や朽ちた病葉<sup>わくらは</sup>。携えた竹箒でそれらを掃き、一箇所に集める。その量は尋常ではなく、蓋し<sup>けだ</sup>、緑の絨毯のようだった。

集く<sup>すだ</sup>蝉のけたたましい騒音に包まれて、僕たちは竹箒を動かす。夏の日差しはうだるような暑さだった。それを回避するために参道から少し離れ、木陰へと避難する。すると草がこんもりと薈蔚<sup>わいうつ</sup>していて、実に涼しいのだ。端無くも、茂った草木の上で大の字になった。

見上げてみれば青い空があった。うららかな昼下がり。つつい眠くなる。いつの間にか瞼が重くなり、夢路へと旅立つ準備をしている僕がいた。葵にもこの心地よさを実感してもらいたいなと思いつながらも、僕はうとうとと華胥<sup>かしょ</sup>の国を訪問しようとしていたのだ。

「うぎゃっ」

「おまえは何様のつもりよのお、楔や」

僕は竹箒で盛大にぶっ叩かれた。頭にフルスイングだったから猛烈に頭が痛い。脳内が攪拌される。

「おまえらしくもない怠惰、精神のたるみ。男が一度決めたら最後までやり通すのが筋ではないのかえ？」

「……時雨サン」

「ほれ、葵を見てみ。一生懸命がんばっちやるぞ」と時雨サンは参道のほうを指差した。

上体を起こして見てみれば、確かに葵はがんばっていた。落ち葉と懸命に戦っていた。

「いくらうちらが頼んだ仕事とは言え、女の葵だけにやらせるのは感心せん」

時雨サンの言う通りだと思った。いくらなんでも、仕事の途中で居眠りとは自分が情けない。自分に課された責務はしっかりとこなさなきゃ。そんなことを思った。

その気持ちが伝わったのか、「わかっとなるようじゃから、まあええ」と時雨サンは額の汗をぬぐって、たおやかに口角を緩めた。「それに、うちもすまんと思っとなんじや。わざわざこんな猛暑におまえたちを引っ張り出して、悪かったの。んで、これは侘びじや」受け取るがよいと言って、時雨サンは握り飯を一つ差し出した。

時雨サンは悪戯っぽく笑んだ。「なんだかんだで仕事は捗々しくいっとなるようじやな。一応もうしばらくしたら飯の時間になる。それまでの辛抱じやな、襖」

巫女姿の時雨サンはもう一度笑んでどこかに行ってしまった。きつとほかの人たちにも握り飯を配るつもりなのだろう。

握り飯を片手に時雨サンの後姿を目で追う。

清浄な袴を着付け、竹箒を携えたその艶姿。

凝然として眺める。まじろがずに、ずーっと。

すると、胸の奥底から不思議な感情が湧き上がってきた。黒いよくな白いような、黒白つけがたい奇妙な感情の波、うねり。波濤はとうのように押し寄せていく。

「……あつ、つう……」

突如、酩酊感に襲われる。僕は頭痛のする頭を抱え、そこにうずくまった。

それは猛烈な痛覚だった。想像を絶する冷気が全身を包む。疎ましい悪寒。苦しい。吐き気がする。

どうなってるんだよ、僕。

そんなことを思いながら頭を上げると、目の前には黒ずんだ何かがあった。

……え。

気がつけば僕の右手には黒光りするナイフが握られていた。どす黒い血。ナイフは勿論、頭の天辺から足の先まで、どす黒い血で濡

れている。

「うう……えづく」

声にならない呻き声。それは目の前の何かではなく、僕の口から発せられていた。

たまらなく気分が悪い。

それでいて。

たまらなく気分が良い。

僕は物言わぬ死体を見下ろした。睥睨する。それでも男の死体は何も言わない。何も聞かない。何も見ない。

何も言えない。何も聞こえない。何も見れない。

そんな存在に堕ちていった男。苦悶の表情を浮かべ、天に向かつて手を伸ばしている。しかし、その手が月や星屑を掴むことはない。物悲しく虚空に静止するだけ。

ああ。

納得する。今の状況、その狂態に。

僕は。

僕は。

「、、、、つつ」

歯の根の噛み合わせ恐怖、後悔。そして恍惚。溢れんばかりの恍惚。恍惚、恍惚……。

段々と思考がクリアになっていく。これまで僕が何をしていたのか、何に勤しんでいたのか、何を欺いていたのか、何を騙していたのか、全部分かる。うっすらと肺腑にしみていく。

繁茂する竹林。

冴え冴えと月の明かりが射しこむ。

そんな幻想的な風景の中、僕と、男は、いた。

対峙していた。

否。

退治していた。

眼前にいる男は悪事をねちねちと重ねる悪党だった。タバコをポ

イ捨てしたり、老人を恫喝したり、覚醒剤を売りさばっていた。そんな、どうしようもない人間だった。

だから。

だから、僕は正しい。……多分、正しい。

少なくとも役には立ってる。社会の役には立ってる。これで世の暗部は僅少なから刷新、矯正されたはずだ。腐敗した世俗に新しい風が吹いたはずなのだ。

鮮血に汚れた己が体を省みる。穢れた男の血。服の隅々まで染み渡っている。

僕は男に近づいていった。地に付かぬ足取りで男のそばにきて、しゃがむ。

そして。

刺した。

刺した、刺した、刺した。とりあえず、ふいに、なんとなく、き

まぐれに、刺した。

刺しぬいた。

地面に縫い付けられた男。事切れた死骸に鋭利な刃が突き刺さっていく。ぐちゅぐちゅと肉がかき混ぜられていく音もする。

振り上げるのをやめると、粘ついた糸がナイフに引いた。銅のように変色した血液。新鮮さの失われた血糊。

僕は言いようのない法悦に囚われていた。

血しぶきに舞う夜。

機械的にナイフを上げ下げする僕。

肉の破片を飛び散らせる男。

遊戯。

終わらない遊戯。

いつになったら終わるのか。

どこに行ったら終わるのか。

なぜ終わらないのか。

なぜ終わろうとしないのか。

なせ終わらせやしないのか。

## 第二十一話

愉快的な祭囃子が聞こえてくる。

混濁する意識の中、それを聞く。

「どうしたの、お兄ちゃん？ 狐につままれたような顔して」

「……えっ」

「……まったくもう。せつかくの夏祭りなのに、気が抜けちゃって……。お兄ちゃんのバカ」

葵は頬をふくらませて怒気を表現した。

僕はあつげにとられ、鳩が豆鉄砲を食らった風になった。奇妙なズレ、世界の隔たり。卒時、僕を放心状態に陥らせる。

「もう、しっかりしてよお」と叱咤して、首を曲げる。葵はポンプンと頬を膨らませて下から僕を覗き見た。愛くるしい瞳が僕の間抜け面を見据える。

「……あつ、ごめん。そうだったね、夏祭りだったね。ちょっと僕、寝ぼけてたのかな……？」

改めるようにそう言うけど、葵はむすつとした表情を崩さない。睨むように僕を見詰めている。

と。

「まあ、いいよ。お兄ちゃんだし」と言って、僕の手をつかんだ。幸せそうな表情。葵は悪戯っぽい笑みを浮かべ、「それよりも、いこ！ お兄ちゃんがへとへとになるまで連れまわすんだから！」と威勢良く走り出す。

釣られて僕も引き摺られるようになる。薄染めの着物を着た葵は颯爽と鳥居をくぐった。次いで、一驚を喫した僕は早くも息が上がっていた。

「まずはどこ行こっか？ 金魚掬い、焼きそば、射的、わたあめ……うう、悩むなあ。お兄ちゃんはどこに行きたい？」

僕はおずおずと、「ひ、一休みって言うのはどうかな？」と提案

した。  
が。

「きゃーっか！」

と意地悪くそう言って、僕の手を引つ張った。

「夏祭りは始まったばかりなんだよ？ 何でいきなり休むわけ？」

「疲れた」

「疲れた、じゃない！ そんなに早く疲れない！ しゃっきつとするの！」

いつになく苛烈。葵はきびきびと僕を駆り立てた。

人でごった返す境内<sup>けいだい</sup>。混雑して込み入って、実に雑然としている。それでもみんな楽しそうで、嬉しそうで……。

著しい落差を覚える。先刻の世界と、現在の世界。それは超然とした不一致だった。あまりにも噛み合わない。僕の体験している二つの世界は。

夢か。

現実か。

画面越しに自分を眺めているような不自然な感じ。自分のことなのに他人事のように感じる自分がある。主観なのか客観なのか、杳として知れない。

それはノイズの混じる過去。不確定で不透明。それこそ白昼夢のように実感がないのだ。

葵の声が聞こえる

葵の声が聞こえ

葵の声が聞こ

葵の声が聞

葵の声が

葵の声

葵の

葵

月光が男と僕とナイフと血を照らす。

すっかりぐちゃぐちゃになった男の腹部。血濡れの臓物がおぞましく蠢うごめいている。渦状のとぐるを巻き、血腥ちひまぐさくのた打ち回った。

蛇みみたいだ、と思った。

蜘蛛みみたいだ、と思った。

寄生虫みみたいだ、と思った。

男の臓器は体の中、と言う軀かみから解放された。綺麗な月明かりに照らされて、ずぶずぶと血を噴き出す。その様は湧水こんせんが滾々と湧き出る温泉を思わせた。命の泉。赤く染まった死のオアシス。

僕は男をえぐったナイフをつうと撫でた。鋭い刃の側面に指を沿わせる。白銀に輝くナイフは不思議な力を称えていた。

憑り付かれたようにナイフを愛でる。男の臓を繰り出し、男に死を与えた一閃のナイフ。

その洗練されたボディ。流線形のフォルム。肉や野菜を加工するために作られたもの。ただ、その意図とは違った使い方もされる。

だって、しかたないじゃん。

こんな綺麗な形されてちゃ、殺したくなっちゃうよ。お腹の中、えぐりたくなくなっちゃうよ。

もはや、人を殺めるために製造されたとは思えない。人に害意をぶつけるために作られた凶器とは思えない。

具体的な形を持った悪意。

それそのもの。

人の負の感情が一つに帰結した姿。殺意を実際のものとする。

「……つつう」

一滴の血。指を流れる赤い液。僕の中を脈々と流れていくはずだったもの。

どうやら指を切ったらしい。それもそう。あんなことしてたら、切れる。切れるに決まってる。

と。

痛み。

やけに新鮮な感覚に震える。漸次して鬱勃する痛覚。僕は吐き気  
のする嗚咽と、矢も盾もたまらぬ欣喜きんぎを覚えた。

……自分の醜い部分と美しい部分を見た気分。

うつとりとナイフ、そして男の死骸に恍惚とする僕は、やはり恍  
惚としたままぼんやりとする。

おぼろげな明かりが差し込んでくる。

究極の悪意は生きること　それ自体だ。

だとすれば、僕にとってこれは、生きると言うことなんじゃない  
のかな。

僕を焚きつける悪意は　本能。そう言うことなんじゃないのか  
な。

なら。

仕方ない。

それを享受していくしかない。

己の業だと受け入れるしかない。

「……誰を」

誰を。

殺そうか。

飽きた。そろそろ飽きた。もう醜い奴に手をかけるのは飽きた。

もっと美しいものを。

もっと儂いものを。

先ほど僕が葬ったのは、真に醜悪な人間だった。醜悪で醜悪で、  
吐き気がした。殺し甲斐がなく、いたってつまらない人だった。

とくれば。

とくれば。

「次は」

次は。

「……それでね、それでね、私……これがほしいな」  
「……へ」

「だーから、私、あのクマの人形がほしいって言ってるの！ほんと、何も聞いてないんだから……」

ポン。

小気味よい音が屋台に響き渡る。

「あつ、あああああ」

周囲の人々、そして屋台の店主の絶叫。阿鼻叫喚、酸鼻の悲鳴。

「あてつ、当てやがった……！ 金城鉄壁、難攻不落のクマちゃんをもの見事に当てやがった……！」

「れっ、歴史の変わる瞬間に立ち会っちゃったぜ、俺たち」

「お兄ちゃんすごい！ さっすが私のお兄ちゃん！」

葵が抱きついてきて、ほっぺにちゅーしてきた。

呆然とする。僕は何をしたのだろう。

その姿を見咎めた葵は、「当てたんだよ、お兄ちゃん！ クマさん！ お兄ちゃんがクマさん当てたんだよ！」と喜色満面に言った。ぐりぐりと頬擦りされる。

まったく状況をつかめていない僕。右手には筒の長い銃が握られ、目の前には無数の景品が並んでいた。

僕はそんな状態で店主からクマの人形を貰った。かわいらしくデフォルメされたデディベア。

ギャラリーが割れんばかりの拍手で称えてくれる。段々と状況を飲み込む僕。

ああ。

そういうことか。

僕はデディベアをあげた。葵は、「大事にするね」と目を潤ませ、それを受け取る。ますます拍手の度合いが激しくなった。

拍手の喝采に恐縮してしまう。それでも照れたように笑う僕がい

て、自然と心に温かいものが流れ始めた。

僕は恥ずかしさのあまり葵の頭をわしゃわしゃとかき回した。葵は困ったように笑って、クマの人形を抱きしめた。うるうると湿った目で僕を見る。

紅に染まった手。今か今かとナイフ片手にてぐすね引いた手。それが葵の髪、頭皮に接触する。

何かの間違っていているような気がしたが、棚上げ。

それはそれ。

これはこれ。

僕は僕で、僕は僕じゃなくて、僕は僕であって、僕は僕でないのだ。

どれもが僕で、どれもが僕ではない。

と言う詭弁きへん。嘘を弄する僕。

「宝物がまたできちゃった……」

「そのクマの人形って原価は何十円くらいかな」

「夢のないこと、言わない！ 私はいいの。お兄ちゃんが私にくれたプレゼントだからいいの。いくら安くても、私にとっては特別なの！」

「変な奴」

射的屋を抜けた僕と葵はあてどなく店を散策する。

様々な幟が目についた。どれも魅力的で、各々盛況している。次はどこに行こうかな、なんて思う。

僕の目が和装姿の時雨サンを捉える。

「次は……」 『 にしようかな』

ポツと出た案は紛れもない名案だった。それがあつたか。僕は熱に浮かされたように沸き立った。

あの細い体にナイフを突き立てたらどういう気持ちになるだろう。  
あの美しい体にナイフを突き立てたらどういう気持ちになるだろう。

「どうなるだろう、どうなるだろう」

ふわふわと高揚していく僕の肉。

ぞくぞくと興奮していく僕の心

ほろほろと発狂していく僕の脳。

それは背徳の芽生えだった。これまで世話になった人を刃にかけ  
る。まったくもって義理を欠いている。はしごを外すようなもの。

でも。

でもでもでも。

いいんじゃないか。

殺すくらい、いいんじゃないか。

ちよつこつとだけ。ほんとちよつと、殺すだけなら……。

僕の欲心は早くも明確な像を持ちつつあった。

そうなれば話は早い。

こうなったらもう、殺すしかない。なんだかんだと自問自答する  
まえにまず、殺すしかない。逡巡、呻吟するまえに、とりあえず殺  
しておくしかないじゃないか。時間ももつたない。やると決めた  
のならテキパキと済ませよう。

それがいい。

決めた。僕は決めたぞ。

その途端、力が抜けていった。さっきまで力んでいたのか、軟体  
動物のように脱力していく。思索を重ね、矯めつた眇めつすがして考えた  
反動なのか。

で。

「いつにしようかな……」

できれば早いほうがいい。

けれど、どうせなら華やかに行きたい。

「……そう言えば、もう少ししたら、夏祭りがあるような」

思考が一つに収斂しゅうれんしていくのを感じた。言葉にしたら、それがたえようもなく魅力的なものに見えた。

雅やかな着物に身を包んだ「」。長い銀の髪を上うへに結わえ、女丈夫のごとき佇まいをする麗人。たおやかな大和撫子を思わせる。これぞ日本の女。男たちの岡惚れを禁じえない傾城傾国。

壊こわしたい、と思う。間然するところのないものを一思いにメチャクチャにしたい。

この痛みを知ってもらいたい。

僕は傷ついた指を見る。血で赤く汚れていて、やけに扇情的せんじやうてきだった。

流れ出た血は不思議なカタルシスをもたらす。そいつは高ぶる情動と連動するのだ。

その想いがいかに有害であつても。

## 第二十二話

「……ありや。時雨サンじゃないですか」

夏草なつくさ花文はなぶんの浴衣を羽織はねおりった時雨サンは莞爾かたじを浮かべた。カランコロンと下駄の音を響かせて、静々とこちらへと向かう。一本に結わえられた銀の髪が小粋に揺れた。

「楔くわに葵かの」

「見て分かりますけど……」

「いやねえ、葵があんまり綺麗じゃから」と相好を崩す。富士額ふじかみの時雨サンはよしよしと葵の頭を撫でた。

「そ、そんなに綺麗ですか、私？」

「そうじゃよ。葵も粋な女になったもんじゃ。この様子じゃと男に不自由しとらんように見受けられるが」

「いいよあ、お兄ちゃん以外の男なんて！。私はお兄ちゃんと結婚するからいいの」

なんだか聞き捨てならない言葉だった。きっと冗談のつもりなのだろうけど、目が本気っぽかった。

僕には分かる。

葵は本気なんだって。

けれど。

一方の時雨サンは単なる洒落だと解したらしかった。瀟洒しょうしやに笑って、葵の言動を真に受けていない。

それもそうだよなあ、とか思う。時雨サンには氷雨サンと言う弟がいるけど、普通、家族同士でそう言うのは……ないしなあ。

少なくともこの二人に限ってそれは……。

「それに楔は楔でいい男になっちよるの。氷雨なんぞ目じゃないわ」「ぼ、僕ですか……？」

藪から棒の一言。僕は気恥ずかしさでうろたえてしまう。やにわにそんなことを他人の口から言われると、どうしたって恥ずかしい

のだ。

僕の反応が面白かったのか、「意識しとるな、意識しとるな。いんじゃよ、楔も男じゃから」と楽しそうに興じる。「やっぱりお年頃、楔もお年頃じゃ。けどのお、やっぱり男はそういう自覚がないといかん。じゃないと、いざつて時に相手を悲しませる。男は肝も据わってなくちゃ、男とは言えんもんじゃ。ただし……くれぐれもとつかえひつかえの女たらしになるんじゃないぞ」

「なな、何を言うんですか！ 僕は女たらしになんかなりませんよ」「さすがに妹にまで手を出すもんじゃないぞ」

「出してません！」

ふふふと時雨サンは巧みに受け流す。時雨サンは手練手管の策士だった。

「葵も楔のこと、好きじゃろ？」

こくと顔を赤くして頷く葵。つんつんと両の指の先をぶつけて、顔を下げた。そしてちろちろと僕の面色を窺うのだった。

その仕草は完全にアレだったが、不覚にもかわいいと思う自分がいた。

「わ、私ね……お兄ちゃんが好き、ですよ。すごく、すごく、好きなんです……」

最後は消え入るような声だった。はあーっと葵は恥ずかしくなったのか、勢いよく顔を伏せた。その表情は前髪で窺い知ることではできなかつた。

その様子を見た時雨サンは、妙案を思いついたようなしたり顔になった。

と。

「じゃあ、接吻するかの」

時雨サンはふいに、そんなメチャクチャなことを言い出した。

「は？」

「じゃから、接吻するか、と尋ねておるんじゃ」

「ただだ、だつ、誰とですか？」

「いや、おまえと」

時雨サンはまず僕を指差した。

そして……。

葵のほうを指差した。

「なんだ……時雨サンとじゃなくて、葵とか……って、はあ？」

僕は大いに仰け反った。あまりの事態にめまいを覚え、卒倒しそうになった。

「ぼぼぼっ、僕と……葵が、ですか？」

「気に入らんか」

「気に入らないとかそういうんじゃないかって僕たちは、その、兄妹なんですよ？ 兄妹がそんないかがわしいことしたら、ダメに決まってるじゃないですか！」と強烈な舌鋒を向けるが、時雨サンは首をすくめる程度だった。

「別によいではないか。葵もしたいんじゃない？」

時雨サンが葵のほうに目を向けると、葵はブンブンと激しく首肯した。

「ほれ、葵もしたいんじゃない？ そうじゃ。まあ、それほど問題にはならん。欧米では接吻が日常の挨拶だと聞く。本邦も異国の文化を学ぶべきだと思うんじゃない？」

「そそそ、そうだよ、お兄ちゃん！ たっ、たまにはこういうことしてもバチは当たらないんじゃないかな？ ほら、少しくらい、ちよっとだけでいいからさ……ね、お兄ちゃんってば！」

「ダメダメダメ。遊びでそういうことしたらダメなんだって！ こ、こう言うことは愛し合うもの同士がすべきなんだよ。葵も分かるだろ？」

「なら問題ない。葵と禊は互いに愛しあっとるからの。その点において、不都合はない」

揚げ足を取られた、と気付く頃にはもう遅かった。手遅れだった。

葵は鼻息荒く僕の肩を掴んだ。目の焦点は合っていない。はあはあと肩で呼吸している。

その様子が、ものすごく怖い。

時雨サンも少々引き気味だった。「あっ、葵や。そ、それはちょっと強引ではないかえ？」

「いいんです、時雨さん。私、前にもお兄ちゃんにキスしようって言って迫ったんですけど、逃げられちゃった苦い過去があるんです。あれは悲しかったなあ。お兄ちゃんも、あんなに血相変えて逃げなくてもいいのに……。その雪辱を晴らす機会を私に与えてくれた時雨さんには感謝しています。今ここでお兄ちゃんの口を吸っても、大丈夫なんですよね？ 大丈夫なんですよね？」

「いやの、葵。それはその……。おかしいような、おかしくないような……。とっ、ともかくも、穏便にな。穏便に済ませるんじゃぞ」さすがの時雨サンもこれはまずいと思っただけならいい。軽い気持ちで言っただけなら、こんな風になったのだから仕方がない。

時雨サンは慌てて葵を引き剥がそうとするが、葵は乱暴な仕事で時雨サンを振り払った。その間隙を縫って逃走を図るも、あっけなく阻止される。葵は僕の右手を強く握って、逃げられないようにした。

葵は僕の腰に手を回した。浴衣の上を這う指。それは僕の首のほうに迫ってきた。

「お兄ちゃんもなんで逃げるのかなあ？ 時雨サンもしろって言ったんだからさあ、男らしくしちやえばいいのに。ただ互いの口同士をくっつけるだけなんだよ？ 全然いかがわしくない。それこそアメリカの人たちはたくさんしてるよ。家族同士でも、兄妹同士でも、見境なく……。お兄ちゃんも覚悟決めよっか。私とキスしよっか」  
「おお、おい、それはいかん。それはいかんぞ。それは大人の世界と言う奴じゃ。いくらなんでもそんなにべたべたしたら、べっ、別の……。あ、あぶのーまるな世界に行ってしまうぞ」

尻餅をついた時雨サンは必死に説得をするも、無視。葵の目はずっと僕だけを見ている。蛇のように舌なめずりをして、唾を何度も飲み込んでいた。

事態の深刻さを悟る。時雨サンは半場諦めたように肩を落とした。どうやら。

どうやら時雨サンは僕と葵の仲のよさを、単なる家族愛に起因するものだと思っていたようだった。年頃になっても懇ろなのだから普通、そう思う。誰だって僕たちの様子を見れば、家族の絆のすばらしさを実感するのだと思う。

けれど。

超越する。葵は世間一般の常識、倫理を超越する。

血縁関係とか、問題じゃない。粉碎する。そんな常識、打ち砕いて、蹴散らしてしまう。

勿論、家族の絆はある。僕と葵は間違いなく、家族の絆で固く結ばれているのだ。

ただ、強いているならそれは、赤い糸、だったり……。

「アブノーマル、上等です。だってしょうがないじゃないですか。愛し合ってるんだから。私とお兄ちゃんは心の底から愛し合ってるんですよ。愛に性別も年齢も、そして血の繋がりも、関係ないんです。だって好きだから。好きだからこんなことするんです。好きだからしたいんです。時雨サン、ありがとうございます。嬉しいですよ。私嬉しいですよ。こうやって時雨さんのお墨付きで兄ちゃんの口を吸えるなんて、幸せです。……きつと周りの人も、私たちをただの恋人だと思ってるんでしょうね。公衆の前でキスしようとするバカッブルに見えるんでしょうね」

葵は小さく笑った。凄絶。葵の言葉は柔らかく聞こえるけど、致命的に異様だった。

「んじゃ、するね」と。

僕を見た葵は。

吸った。口を吸った。

葵は閉ざした僕の口唇を無理やりにごじ開けた。舌で強引に開錠し、僕の歯茎や口腔を舐めていった。

葵の身長は僕より若干低い。だから爪先立ちをして、できる限り深く吸えるようにしていた。僕の首に両手をかけて、思いつきり吸った。

涎が参道に落ちる。僕のものか葵のものは不明。

周囲の人たちは僕たちを避けるように過ぎていった。

ある人は好奇の視線で。

ある人は下卑た視線で。

ある人は頬を赤らめて。

ある人は静かに笑んで。

葵はもう、見えていないようだった。周りなんぞ視界に入らないようだった。視線は常に僕のほうに向いていた。

舌が侵食してくる感触が強くなった。葵は僕の舌と自分の舌とを濃厚に絡めた。

終わる気配はなかった。

そのまま数分もの間、葵と接吻した。

「ううう……」

葵は僕にもたれかかっていた。全体重をこっちに預けてくる。長時間におよぶ接吻で精根尽き果てた僕は、葵と一緒に倒れそうになった。

「……っ」と

どうにか葵を抱きすくめる。葵は疲れたのか、目を閉じていた。

耳を済ませてみれば、寝息を立てていた。

考えてみれば、葵は夏祭りが始まってからはめを外していた。小鹿のようにはいしゃいでいた。

その疲れが今になって出たのか。

僕はほっとすると同時に、ついにしてしまった、と言う罪悪感を覚えた。きっかけが僕ではないにしろ、してしまったのだ。

それもすつごいエロい奴。

色々な葛藤、せめぎあい。僕の中で理性が悲鳴をあげていた。

「おっ、おまえたちは……」  
と。

躊躇うような声。

時雨サンだった。

「おまえたちは……その、付き合っているのか。互いを異性として愛し合っているのか？」

僕の目の前に立った時雨サンは神妙な面持ちで問いかけた。端々ですまなさそうにしているのが分かった。

沈黙。暫時の沈黙考。

「……分らないです。僕には全然。けど、少なくとも僕は、葵をそういう風に思っではいません。ただの妹、単なる家族です」

「そう、か。では、葵の一方的な片想いであると？」

「……かもしれません」

「報われんな、それは。実に兄に恋した妹か。まったくもって報われんし、救われん。その先には不幸しかない。結婚もできないし、子供も産めない。一緒になっただとしても、辛いだけじゃ」

時雨サンは感慨深そうに言った。どこか遠い目をしている。まるでここではない何かを見ているようだった。

「昔はそうではなかった。葵は普通の少女じゃった。おまえも普通の少年じゃったし、俺も、そして氷雨も……普通じゃった。なのになぜ、狂ってしまったのか。うちらはいつどこで、選択を間違ったのじゃろうか……。実はの、楔。うちもなんじゃ」

「何がですか？」

軽い気持ちで問いかけた。

それが深淵へと続く扉だった。

「うちもしたことあるんじゃ、接吻。……氷雨に」  
「……………」

「初めは興味本位じゃった。単なる気まぐれじゃった。けど、けど

……気付いた。自分の感情に気付いてしまった。うちは実の弟が好きなのだと、弟ではなく一人の男として愛しておるのだと……気付いてしまった」

時雨サンの独白は続く。

小さな声なので、辺りに響くことはない。

「昨日も、まぐわった。氷雨と一夜を共にした。……幸せじゃった。葵の言うように幸せで幸せで、どうしようもなかったのよ」

すうすうと規則的な寝息。僕は葵の背中を撫でながら、時雨サンの話を聞いた。

場違いな祭囃子。やけに陽気なそれは、この場に著しい乖離をもたらす。

祭りは非日常の象徴とされるものだ。普段の生活でできないことが、祭りの場では許される。禁じられたものの解放。それは祭りでしかなしえないカタルシスだった。

ただ。

非日常の中に非日常。時雨サンの話は紛れもなく、この世の理を違えていた。葵と同じように人の倫理観からずれていた。

時雨サンは薄い雲の先にある本殿を遙拝した。眦まなじりを決した様子。時雨サンの表情には覚悟と決意とが浮かんでいる。

もうそろそろ神楽舞の刻であるように思う。後数分で、時雨サンたちが舞ったり、楽器を奏でたりするはずだ。

「……とまあ、これは嘘じゃ、嘘。そんなわけあるまいに。いくらなんでも家族同士で関係を結ぶなんぞ、ほらもいいところじゃろうて」

時雨サンは乾いた笑声を上げた。

嘘だ、と思った。それこそが嘘。だったらそんなに悲しい顔をするはずもない。

真実なんでしょう、時雨サン？

そんなことは言わなかった。

愛の形なんて人それぞれ。口出しするつもりも、横槍を入れるつ

もりもない。それが正常だとか異常だとかは、周囲の人間じゃなくて、あくまで本人が決めることだ。

それに。

正しい人生とか、正しい恋愛とか。

そんなものは、ない。絶対ない。あるほうがおかしいし、考えたくもない。そもそも正しいことなんてない。世の中で絶対に正しいこと、曲げられないものなんてのは、人の生き死にくらいしかないのだ。

別に間違ってもいいんだ。間違いのない人生が正しい人生だなんて、空虚。薄ら寒い。僕はたくさん間違った人生を歩むつもりだ。間違つて間違つて、それでも生きていくんだ。

「楔よ。うちはそろそろ神楽を奉納せにやいかん。おいとまするわ」

「ま、待つてください」

「なんじゃ？」

「その、祭りが終わつたら本殿の裏手のところに来てくれませんか？　ちよつと伝えたいことがあるんです」

時雨サンは不思議そうに首を傾げた。どことなく悲壮な顔。まるで大切な人が死んでしまったように悲しそうな表情だった。

「……ええよ。話を聞ければな」

それだけ言つて、時雨サンは僕に背を向けた。踵かかとを返す。その後姿はすぐに人ごみに紛れてしまった。

葵は満ち足りた表情で寝入っている。僕の首に手をかけたまま、僕を抱きしめるような形で。

僕の顔に微笑がとる。なんだかんだ言つても、葵はかわいく僕の大切な人だ。必ず更生させてみせる、と決心を新たにす。もつと普通の女の子に戻つてもらうんだ。

僕は暢気に欠伸をして、懐にしまつておいたナイフの感触を確かめた。

## 第二十三話

人がなぜルールを破るのか、と問われれば、快感だから、としか言いようがない。

人は元来、ルールを破りたがる生き物だ。小学校の頃に宿題をサボったりとか、門限を破ったりとか、誰しも一度はそんなことがあると思う。誰だってルールを破る。明々白々。実に当たり前のことだ。

あるいは。

なぜ犯罪者と言うものが減らないのか、と問われれば、それも犯罪者がとりわけルールを破りたがる生き物だから、と考えれば問題なく解決する。

では。

どうして人はルールを破りたがるのか。

やっぱり答えは決まっています、そこに快感があるから。ルールを破る事は、他の人がやっていない事をするということ。そこに人は優越感を感じ、優越感が快感に変わる。優越感と快感は等価。同一であると言える。

本来ルールとは人が快適に過ごすために作られたものだ。なら、人はルールを破る事によって快感を得るのならば、ルールを作った本来の意味から外れている。それこそが決定的なズレだった。本質からの遊離だった。

否。

そうじゃない。ルールを破り、快感を得るためのもの。それがルールが存在意義と見ることもできなくはない。ひよっとしたらそれが、犯罪者が減少しない要因なのかもしれない。

そして。

この考えこそが、禁忌のタブーなのかもしれない。

誰だってそういったタブーの幻想を抱いている。ただそれを表層

に出していいだけ。異端なものとして遠ざけているだけ。

生き物は異端で背徳なものを求め、そのかたわら、表向きは異端でも背徳でもない、ということを求める。その異端で背徳なものを求める心。そいつを何事もなかったかのように蓋をして、市井の人々はさも善人面をして生きているだけだ。

そんなの偽りだ。

悪が悪い。

善が良い。

もはや固定化した価値観。窃盗や放火、殺人などを忌避<sup>きひ</sup>する心。

悪を憎み、善を愛する。

善を愛し、悪を憎む。

僕は悪も善も好きで、悪も善も善も嫌いだ。そんな安っぽい二元論で人の性質とか本性とかを見極められるはずがない。もし見極められるとしたら、そいつはむしろ人間としての欠陥を抱えているように思う。

だからねえ、いいんだよ。殺しても。

「大丈夫。痛くないですよ」

ニコニコと笑って、ナイフを突き刺す。ぷしゅーっと血が飛び出て、肉の破片がそこかしこに散らばった。僕の服は返り血だらけで、ナイフも腕も真っ赤に染まっていたりする。

終極への渴望。終わることへの恍惚。僕と一緒に滅びてください、と言う楽しくて面白い欲心。

勿論僕も死ぬわけじゃない。僕はただ、事務的に（ナイフを持った）腕を上げたり下げたりするだけ。結局、死ぬのはあなただけです、と言うことになる。

そうして僕は、気まぐれに一人一人、葬っていく。身勝手に適当に、人を殺めていく。

ここ最近は情性に近い。習慣になってしまっただけでもない。

ダメだと分かっているのに、止められない。分かっちゃいるけど止められない。そんな状況。

人を殺すことが論理的に悪いわけではない。  
かといって。

人を殺すことが論理的に良いわけでもない。

少なくとも、殺人は社会で許容されていないし、許可されてもいない。人が人を殺すことは法律でも禁止されているし。

「まあ、それはそれ。これはこれ。法律は法律。僕は僕。そうですよね」

鼻歌交じりに大きめの石を振り下ろした。鈍い音がして、倒れる。目の前の人はあつという間に死の床に着きましたとさ。

石が思ったより重かったので、腕がひりひりした。筋肉痛にでもなったらしい。最近運動不足だったから、それが祟ったのかな。やっぱり健康には気をつけておかないと。

人の本能は究極に言えば、支配欲であるといえる。誰かを支配したい。そんな欲求が人を動かす原動力になる。どんな行動にだってそれはついて回る。善意に裏づけされた行動だって、それに該当する。

だって、人間だもの。暇したら、人を殺したくもなるよね。

表の僕と裏の僕。

表の僕は至って常識人だ。けれど、裏の僕はごく普通の殺人鬼だ。人間誰しも仮面をかぶっている。それは僕にも当てはまる。僕とてそれなりの仮面をかぶっているのだった。

そして。

近頃、裏の僕のほうが表の僕に囁く。

あの女を殺したい、と。

表の僕は少し困惑する。だってその人は、僕の大切な人だから。僕の尊敬する人だから。

けど、裏の僕はどうしても彼女がいいと言うものだから、泣く泣く了承した。まあ、仕方がないか。だって、人間なもの。どうしたって好みは出てくるものだし、人間って我慢するの苦手だから、どうしようもないよね。

と言うわけで僕は、夏祭りの日に時雨サンを殺すことにした。

時雨サンの巫女舞は終わり、夏祭りもまた幕を閉じた。

僕は寝たままの葵をおんぶして、帰途に着いた。葵は相変わらず眠たそうなので、ベットに連れて行って、寝かせてあげた。

辺りは夕闇に覆われていた。

僕は美作神社に向かって歩み始めた。

当然。

ナイフその他もろもろの狂気　もとい凶器は服の裏にちゃんと忍ばせてあった。

ぬかるみのある畦道。両隣には長閑な田園が広がっている。月明かりに照らされた人影を見るが、それは畑の真ん中で佇立しているカカシだった。

腰に巻いたチェーンがジャラジャラと鳴るが、気にしないことにする。音こそすれど、浴衣に隠れているのに多分大丈夫だと思う。

二十分くらい歩いて、美作神社についた。鳥居を潜って本殿のほうへと向かう。途中で参道の砂利がジャラジャラ鳴ったり、腰のチェーンがジャラジャラと鳴ったりした。

やっぱり気にすることもなく先へと進む。寝静まった境内は、清浄な気に満ちていた。

ここに来るといつも思い出す。往時への懐古。かまびすしい蝉時雨とか、夏の盛りの日差しとか、時折吹く涼風とか、そんなことを思い起こすのだ。

そんな昔のことを懐かしんでいると、いつの間にか本殿はすぐそ

こだった。

自然と胸が高鳴る。激しい興奮。狂おしい歓喜。そういったものが湧き上がって、わくわくしてしまふ。これからのことを想像すると、ぱーっと目の前が明るくなるような気がした。

懐から小刀を取り出す僕。ゆっくりとした足取りで神社の本殿へと近づいていく。

本殿の近くにはやけに大きい古木がある。注連縄の張られた神聖な木だ。きつと時雨サンはそこで待つてくれているのだろう。僕に殺されるのを心から待ち焦がれているのだろう。

しかし。

しかし、しかし、しかし。

カーンカーンと音がする。何かを打ち付けているような音。金槌で釘を穿っているような音だった。

忍び足で覗き込んでみる。

すると。

そこには。

なぜか氷雨サンがいた。

氷雨サンは染み一つない白装束を着ていた。そして何かに憑り付かれたように槌を振るっていた。打ち付けていたのは僕の予想通り釘だった。

釘だった。

けれど。

打ち付けられていたのは。

「……時雨サン？」

そう、時雨サンだった。

まったくもって状況が呑み込めなかった。氷雨サンは嬉々とした様子で時雨サンに釘を刺している。時雨サンは注連縄の張られた古木に磔はりつけにされ、手足に釘を縫い付けられていた。その様相は痛々しく、どくどくと血が噴き出している。見るに耐えかねない光景だった。

あまりの悲惨さに目を覆う。こんなこと、人のすることじゃない。どうなってるんだよ、と猛烈に思った。

氷雨サンは狂ったように時雨サンを痛めつけていた。時雨サンはぐったりとしている。どうやら気を失っているようだった。

あるいは。

死んでいるのか。

おもちゃを取り上げられた子供が感じるような理不尽さ。あるいは先を越されたことへの焦り。僕は憤怒と焦燥感、そして一抹の不安と義憤に駆られた。何とかしなくちゃ。そう思った。

一旦小刀を懐に戻した。深呼吸をして、覚悟を決める。

そして。

「ひっ、氷雨サン！」

と。

呼びかけた。

恐怖と興奮で語尾が震えるのが分かった。なんにしる今の氷雨サンの状態は明らかに異常だったからで、本能的な危機感を覚えたのだった。

ピタリと動きが止まる。槌を振るうのを一時止めて、こちらを振り向いた。

月夜に銀の髪が反射する。それは近寄りがたい神々しさすら感じさせた。氷雨サンの面容は不自然なくらいに整っていて、まるで粘土をこねくり返して作られた人形のように見える。悪意のようなものが見え隠れする美しさ。作られた笑顔。月明かりに反射して、にこやかに笑っている。

氷雨サンは僕を見て驚いたようだった。唇を真一文字に結んで、僕と虚空を睨んでいる。

刹那の沈黙。

「……月が、綺麗じゃの」と。

氷雨サンは言った。

この場には似つかわしくない言葉だった。

「こんなに月が綺麗じゃと、外に出たくなる」

「……………」

「そこで散歩がてらに歩いておると、たまたま姉様がおった。月光に照らされる姉様は美しく艶かしく、妖艶じゃった。月なんぞ目じやのーて。事実、今の姉様は天女に見まがうかのごとき可憐さじや」  
氷雨サンは愛でるように時雨サンの頬を撫でた。

反応はなかった。

「……………姉様も僕の愛撫に恥ずかしがっておるのじゃな。いつものようによがっておればよいものを…………。今日の姉様はつれんな」

「……………」

「それとも僕のことを嫌いになったのか…………。いや、ならん。そんなことはあつてはならん。姉様は僕に誓ってください。一生僕のために尽くしてくれると、僕と添い遂げてくれると約束してください。それをいまさら反故にするつもりですか、姉様？ そんなの僕が許しませんよ」

「……………」

「……………ねえ、何で反応してくださいさらないんですか？ 返事をしてください、姉様。僕のことを構ってください。いつものように笑いかけてください。いつものように僕と口付けてください。姉様……………時雨姉様！」

氷雨サンは完全に僕のことを無視しているようだった。ひたすらに時雨サンに呼びかけていた。その顔には死相すら漂っているようだった。

返事なんか返ってくるはずがなかった。それでも氷雨サンは健気に時雨サンとコンタクトを取ろうとしていた。

背中に空々しい寒気が襲った。夜は快適な気候なのに冷や汗が肌を伝う。僕とはまったく違うベクトル。僕は氷雨サンに度を越した恐怖心を抱いた。

あるいは、悪意。 純粹培養された、夾雑物のない悪意。

「なっ、何をやってるんですか！ し、時雨サンはとっくにもう

」

「……月が、綺麗じゃの」

氷雨サンはその事実を否定するように僕の言葉を遮った。

「こんなに月が綺麗じゃと、外に出たくなる」

歌うように言う。儂げに月を仰ぎ見る姿は幻想的で非現実的な風だった。

「そこで散歩がてらに歩いておると、たまたま姉様が追った。月光に照らされる姉様は美しく艶かしく、妖艶じゃった。月なんぞ目じやのーで。事実、今の姉様は天女に見まがうかのごとき可憐さじゃ。……姉様も僕の愛撫に恥ずかしがっておるのじゃな。いつものようによがっておればよいものを……。今日の姉様はつれんな。それとも僕のことを嫌いになったのか……。いや、ならん。そんなことあつてはならん。姉様は僕に誓ってください。一生僕のために尽くしてくれと、僕と添い遂げてくれると約束してください。それをいまさら反故にするつもりですか、姉様？ そんなの僕が許しませんよ。……ねえ、何で反応してくださいさらないんですか？ 返事をしてください、姉様。僕のことを構ってください。いつものように笑いかけてください。いつものように僕と口付けてください。姉様

……時雨姉様！」

壊れたように呟く。音量はだんだんと上がっていった。最後は怒髪天につく勢이었다。

狂ってる、と思った。なんかもう異常だった。今の氷雨サンは平生の氷雨サンではなかった。氷雨サンの皮をかぶった別の生き物だった。

僕の安っぽい殺人願望とは対極をなす感情。氷雨サンの言動は大事な箇所が全て破綻していた。

氷雨サンはうわごとのようなことを幾度も呟いた。精神病にむしばまれたようなおぼつかない足取り。千鳥足で足を絡ませ、やがて倒れた。金槌はどこかに転がっていく。

あわてて駆け寄る。氷雨サンは泡を吹いて気絶していた。

よくよく見てみれば、氷雨サンの手の指の内三つが欠けていた。根元の部分で切断されているようだった。しかも、切断したのはつい先ほどだったように思う。氷雨サンの欠けた指の断面は血漿けっしょうで固まっていたばかりだった。醜い傷跡。生々しく、凄惨だった。

幸い、利き腕である右腕のほうは無事だった。だから槌を振るえたのだろう。これと言った外傷はない。……外傷は、ない。

僕は雑に爪の剥がされた氷雨サンの右手を両手で包みこんだ。氷雨サンの指はぼろぼろだった。次いで、観察してみれば首筋には縄の跡があつたり、手首には刃物を当てたような傷があつたり、腹部には何かで深くえぐられたような傷跡があつた。足首のほうも右足首のほうが極端に細かった。まるで縄状のものできつく締められたような……。足の指もいくつか欠けていた。

虐待の形跡。僕は何がなんだか分からなくなった。

軽い気持ちでやってきたのに。何でこういう展開になるんだ。僕はただ、時雨サンを殺そうと思っただけなのに……。

なぜか目の前が見えなくなっていた。拭っても拭っても目蓋にたまった水滴は取れなかった。

## 第二十四話

私は罪深い女で御座いました。<sup>わたくし</sup>

それは生まれながらの業であり、私を苛む桎梏でもありません。何にしても私について回り、決して私から離れぬのです。

その罪の名は愛でした。穢れを帯びた、身の毛のよだつ愛で御座いました。

いや、愛とは実に人聞きのよい表現でしょう。あるいは私にとって都合のいい方便でもありました。私の持つ感情はいわゆる愛情であり、そう己を責めることもないだろう、と。

しかし私の業を愛と表現するにはあまりにおぞましいことなのです。むしろ憎悪、と表現したほうが正鵠を射ているでしょう。私の罪科とはすなわち、近親に対する歪んだ愛なのですから。

それを自覚したのは物心ついた頃でした。きっと燻っていたのでしょう。幼い体が段々と女になっていくにつれ、私は異性を意識し始めました。当然のことでしょう。誰にも思春期と言うものは存在するのです。ですから私がそのような情動を抱いていても、その情動がいささか邪よこしまであっても、なんら問題はないことなのです。それ自体はいたって純粹無垢なことなのです。

しかし、情動を向ける矛先が明らかに異質であったことは認めざるをえないことです。なぜなら私が常日頃から欲情し、恋焦がれていたのは、紛れもなく私の弟なのですから。

弟の何気ない所作や言動。頭を掻いたり腕を回したりする姿は私の心をざわめかせました。ちょうど池に小石を投げかけるように。弟は知らず知らずのうちに姉である私の胸に波紋を投じたのです。その威力は強大で強烈でした。私は罪深いことに弟に男を感じていたのです。

気がつけば私の中の弟は単なる弟ではなく、一人の男性としてそこにありました。血が繋がっているというのに、同じ母親の腹から

生まれてきたと言うのに、私はそんな背徳的な妄想を抱いていたので御座います。何より性質が悪いのは、それは妄想ではなく、現実として私の精神を侵食してきたことでしょうか。一度自覚してしまつたからか、その妄想は常に私の感情を支配しました。弟を意識せずにはいられませんでした。

特に苦痛だつたのは入浴のときでした。基本的に私か母様が最後に入浴するのが我が家の慣わしでした。初めは決まつて大黒柱である父様が入浴し、次いで弟が風呂に入るのです。

私は好んで弟の後に入浴しました。私は湯浴みする弟の姿をガラ又越しに視姦し、水の滴る音に愉悦を覚えていたのです。弟は今石鹸で体を清めているのだ、桶の湯で身の汚れを落としているのだ、深々と浴槽に浸かつているのだ、と。そう思うと胸のときめきが止まることはありませんでした。弟の小さな呻き声や、水滴の混じる音、独り言らしい弟の声などが、私の耳に入ってくるので御座います。そのときの私は弟の服を鼻に当てています。弟の体臭が染み込んだ服のにおいを嗅ぎながら、私は絶頂の極致に立っていたのです。そして、弟の生の声に渴きを覚えたのです。あるいは飢えでしょうか。私は今にも弟の体に触れて、弟を全身で感じたいと心底から思つていたのです。

それは青臭い恋慕の情でした。私は性的に弟のことが好きで好きでたまらなかつたのです。今すぐにも弟を犯したいと、弟の体に私を刻み込んでやりたいと、腹の底から思つていたのでした。而してもしそれが成就したら、私は幸せのあまり死んでしまつてしよう。それくらい私は弟にのめり込んでいたのです。誰よりも弟のことが好きで、弟のためなら命すら辞さない覚悟でした。

そんな私にも慕つてくれる子供たちがいました。ここで名前を出すのは彼らにとつても迷惑でしょうから、伏せておくことにします。明記しておきますが彼らに一切の罪は御座いません。悪いのは全て私で責任も全て私にあるのですから。

そんな彼らは純粹でした。私の邪悪な恋心など知るよしもなかつ

たでしょう。彼らは愚直でまっすぐでした。ひたすらに私に親愛の情を抱いていました。改めて申し訳ないことをしたと思います。私はあるうことか純真な彼らを騙し、欺き、腹藏を持って彼らに接していたのですから。本当に彼らには申し訳ないことをしました。

しかし、言えるはずもありませんでした。まさか彼らが私と同じくらいに慕っている弟に、血のつながりを超えた感情を抱いていたなどと明かせるはずありません。少なくとも彼らは家族とはそういうつながりを持ってはいけないことくらい、本能の部分で承知していることでしょう。家族とはそういう風にできてはならず、家族に恋愛感情を持つことは間違っているとそう思うことでしょう。私はそう言った糾弾が怖かったのです。彼らに正しい家族のあり方を切々と説諭されることを恐れていたのです。

なので彼らの前では何事もないように接しました。あたかも仲の良い姉と弟を演じていたのです。幸か不幸か、弟の方も少なからず私を意識していたようでした。しかしそれは思春期特有の、異性に対する興味にほかなりませんでした。私のどす黒い恋慕とは明白に乖離していました。弟もまた彼らと同様に清らかな心の持ち主だったのです。

そんな弟が好きでした。穢れを知らぬ弟が好きでした。私は世におもねらず、気高い弟に惚れていたのです。ですから弟がそういうある意味淡泊な対応を取っても悲しくこそ感じれど、仕方のないことだと諦めもしました。弟はいたって普通の人間でした。実の家族に恋々とした想いを芽生えさせることもありませんでした。そういう点もひっくりかえりて弟を愛していました。

ただ私に影響されたのか、弟は弟で時折ねっとりするような視線で私を見ることがありました。風呂上りの私を見て生唾を飲んだり、私がお口をつけた箸を口に含んだりもしていました。私の着物に顔をうずめたり、私の私物をひそかに盗んでもいました。

さすがに気付きました。そして歡喜しました。ひよっとしたら弟は、私にそう言った感情を抱いているのやもしれぬと。その想いに

苦しみ、悶々とした日々を送っているのだと。

事実そうでした。とある日の夜、弟の寝室へ出張って意地悪く問いただしたところ、弟はその事実を認めました。私のことが好きだと、私のことが好きで好きでどうしようもないと。弟はそう言ったことをいつになく低い声で告白したのです。

そうだったのかと私はまず納得しました。近頃の私に対する弟の行動は不可解の一言に尽きました。ただそう言う実情があるのなら、弟の行動も得心がいきます。

おまえは罪深い奴だ、と私は彼を責めました。実の姉に色欲を覚えるなんぞあつてはならん、と苛烈な舌鋒を彼に向けました。弟の感情を知って得意になった私は意地悪く弟を非難したのです。そこにあるのは優越感でした。畢竟弟も私のことが好きなのだ、実の家族であつても恋愛感情は成立するのだと、私は舞い上がったのです。それが歪んだ形を持つて彼に当たったのです。

そのときの私の行動は暗に、常軌を逸した恋情を持つていた私を責め立てるものにはかなりませんでした。私は自分の感情がおかしいものだとするにして知っていたのです。人としておかしいと理解していたのです。それでも弟に懸想する自分がいました。そんな自分とは人として薄気味悪い存在だと思つていたのです。

同時にこれで両想いになれる、とも思いました。幸せの頂点に達していました。図らずも弟は私のことが好きで、私もまた弟のことが好きだと明々白々になつたのですから。

私は一通り弟をそしつた後、己の真情を吐露しました。私もおまえのことが好きだと言つてその唇を奪いました。弟の膨らんだ唇に私の唇を当てて、舌で彼の口を吸いました。弟も私の体に手を回し、私の想いに答えてくれました。私を受け入れてくれました。

私と彼はそのまま一夜を過ごしました。

十三歳の夜のことでした。

私の片想いは弟の告白によって実を結んだのです。そして存外あっさり、体の関係へと発展していったのです。

あの一夜から私と弟の関係は劇的な変化を遂げました。私と弟はひそかに逢瀬を交わし、互いを貪り合いました。両親の目の届かぬところで愛を語り、褥を共にしました。

情事の閨房は決まって私の部屋でした。昼頃に弟と示し合わせて、夜中に人知れず彼と体を重ねていたのでした。

夜が更けると弟は自室へと帰っていききました。そうしなければ両親に私たちの禁じられた関係が白日の下に晒されることになります。それは絶対にあつてはならないことでした。一度でもこのことが両親や親類の知るところとなれば、私たちは離れ離れになってしまうでしょう。二度と会えなくなってしまうでしょう。そう思うと気が狂いそうになりました。私と弟の仲はもはや纏綿てんめんとしていて、世間一般の恋人とさほど違いはなかったのです。

しかしながら、弟が去っていった閨は物寂しく、弟恋しさに何度も泣きました。両親に聞かれぬよう声を殺して咽び泣きました。それくらい私は弟のことが好きで、弟をずっと独占したいと思っていました。弟と永遠にいたいと切望しました。もっとも私と彼は疑いなく家族であつたので、人目を盗んで手を繋いだり、接吻をしたりすることもできました。たいてい私が接吻をせがんで、弟が人気のない場所に連れてきてくれて、そこでしました。ねっとりとした接吻を息が切れそうになるまでしました。

罪の意識はさほどありませんでした。ただひたすらに幸せで胸がいっぱいでした。大好きな人と一緒にいられる。そんな歯がゆいような想いで私は悦に浸っていたのです。

しかし現実とはあまりに残酷で、あまりに不条理でした。とある日のことです。ふとしたきっかけで火のついてしまった私と弟は、日中であるにもかかわらず野外で情交に耽っていました。本殿の裏手にあるご神木の前です。そこは人気が少なく閑散とした場所でした。ですからこう言った情交には絶好の場でした。

そうした油断が祟ったのかもしれない。今思えば己の短慮が惜しまれます。私は愚かにも忍び寄る足音にも気付かず弟とまぐわっ

ていたのですから。

それは呻き声にも聞こえました。弟かそれとも私が出した喘ぎ声かと思いました。

しかし現実は違いました。その声は母様の声だったのです。

母様は腰を抜かしたようでした。当然でしょう。実の息子と娘が媾合こうごうに夢中になっていたのでのですから。

腰を抜かした母様は慌てて私たちの元へ駆け寄ってきました。髪は乱雑に乱れ、焦点は合ってはいません。それくらい母様は仰天し、衝撃を受けたのでしょうか。母様は半狂乱になって、私と弟の人倫に反した房事を差し止めようとなりました。

ふと首くびを巡らせて見れば、父様の書斎でした。正面には仏頂面の父様がいて、私たちは正座させられていました。脇には不安そうにする母様もいました。

胡坐をかき、腕を組んだ父様は暫時無言でした。重苦しい雰囲気おんきが澱のように落ちてきました。私はひたすらにじっとしました。弟も歯を食いしばっているようでした。私は自分の思慮の浅さに忸怩じくじたる思いでした。

父様は一言だけ言って、部屋から退出しました。そう、別れると。文字数にしてわずかなその言葉は確かな重りとなって、私と弟を苛さいなみました。父様は厳格で謹厳実直なお人でした。ただ頑迷な分からず屋、と言うわけではありません。父としての責務おんじき、大槻の長であることへの自覚、どれをとっても立派な領袖りゅうしゅでした。父親としても、褒めるところは褒め、悪いことは悪いと私たちに忠告してくれる出来過ぎた父親でした。

そんな父様を持ってしても、私たちの関係は異常で異質で、どうしようもなかったのです。さすがの父様も対処に困ったのでしょうか。状況があまりに埒外なためか、どういった対応をとればいいのか困惑しているようでした。怒りよりも恐れよりも先に、なぜこうなったのかと詰問したい風でした。

しかし、あえて問いただすことを父様はしませんでした。どうせ

理由を聞いたところでどうにもならぬと悟ったのでしようか。私と弟の救われない関係に幾許かの憐憫を覚えたのでしようか。いくら我が子だと言つても、それに至る経緯には何かただならぬものがあると察したのでしようか。

だから聞かなかった。

それがむしろ辛かったので御座います。いつそ一思いに難詰してくればよかったです。なぜそのようなことをしたと詰め寄ってくればよかったです。そうすればひよっとしたら弟との関係に踏ん切りがついたのかもしれない。諦めがついたのかもしれない。

結局、私と弟は何時間もの間、畳の上で正座をし続けたのです。

十五歳の夏のことでした。

ちょうど文月の砌みきりのことで御座います。

その頃からでしょうか。私と弟の間で常軌を逸脱したやり取りが行われるようになったのは。

手紙は一旦、そこで途切れていた。

その紙を捲つて、次の紙を取り出した。

目から涙のようなものが出てきた。

## 第二十五話

私と弟の禁忌の關係はたちまち一家郎党の知るところとなりました。父様は大槻家本家の醜態を秘していたのですが、人の口に戸は立てられぬとはよく言ったものです。その秘事はたちまち大槻の親戚、係累に漏洩したのでした。

幸いなことに大槻家の一家郎党の絆は極めて深いものでした。ですから私と弟の秘め事が公になることはありませんでした。私たちの秘密は大槻家とその關係者以外に知るものはいなかったのです。

とは言え、いつ私たちの秘密が知れ渡るか、私は戦々恐々としていました。もしそれらがお天道様の下に明かされたのなら、本当に離れ離れになってしまうでしょう。父様は今後そう言った蜜月關係を解消するよう、私たちに厳達しました。こんなことはあつてはならぬと峻厳たる様子で注意されました。逆に言えば、私たちが恋人同士ではなく、単なる姉と弟の關係に戻れば、その罪を許すのもやぶさかではない、と言うことでもありました。大槻家の継嗣は私と彼、ただ二人です。大槻家の跡取りは代々、大槻の人間が継ぐことになっていきます。大槻家の支流や本家以外の人間が継いでならぬのです。そう言う点も考慮されたのでしょう。父様は私と弟に厳しく釘を刺し、ある程度の体罰を施しこそすれど、それ以上の罰を与えることをしませんでした。

ただ、体罰や誹謗よりも辛かったことは弟と一時隔離されたことでした。大槻家の裏手には大きい離れが立てられております。そこは独房のような造りになっていて、外から鍵をかければまさに牢屋となる恐ろしい離れでした。

私はそこで三日もの間幽閉されました。頭を冷やせと、父様にそう申し上げられて。

私は三日三晩離れの中で泣き明かしました。悲しみのあまり、身も世もなく泣き伏したので御座います。足元に広がる板敷きの床は

冷たく、足の指がひどく冷えました。季節は夏であると言うのに、私の心には冷え切った風が吹いていたのです。

弟に逢いたいと思いました。何が何でも弟に逢いたいと強く望んだので御座います。弟の艶めいた唇に口付けたいと、そのたくましい腕に触れたいと、そう渴望していたのです。

そして三日が経ちました。私は三日ぶりに弟と再会したのでした。一日千秋の想いで待ち侘びた弟の顔は蒼白でした。頬は痩せこけ眼窩はくぼみ、全身から生気が抜け落ちていました。けれども私の顔を見たたん、瞳に灯がともり、ぱつと明るくなつたのが手に取るように分かりました。弟もまた私と再会することを心から切望していたのです。

弟の顔には涙が伝つたらしい跡がありました。私は弟を強く抱きしめたい欲求に駆られました。しかし再開の場には父様と母様が立ち会っていました。なので抱擁を交わすことも、熱い接吻を交わすこともなく、ただ寒々しく互いの顔を見合わせるにとどめたので御座います。

父様は改めて私たちに峻峭しゅんしゅうとした注意を促しました。そして私たちは金輪際男女の契りを結ぶことなく、健全な生活を営むことをここに誓わされたのです。

正直、これ以上父様や母様を困らせたくはありませんでした。両者とも私と弟をかわいがってくれ、目に入れても痛くないほど愛してくださつたのですから。

ですがそれとはまったく別に、私と弟はもはや偕老同穴かいらうどうけつの仲間になつてしまつたのです。今後一切の触れ合いを断ち切られてしまつては、もう私たちに希望はありません。深い奈落の底に落ちるのみなので御座います。

私は後一年もすれば結婚適齢期となります。我が大槻家は昔から早婚でした。母様も十七で輿入れをしましたし、父様も十八で母様と結婚しなされたのですから。二人はちょうど高校生でしたので、同じ学校に夫婦が一組在籍することとなつたのです。

もう少しすれば、私もどこかの家に嫁ぐことになるでしょう。それは大槻の女の必然でした。いや、大槻の女に限らず、全ての女性はその運命なので御座います。

そんなことを思い至った私は、ふいに血の気が引く思いでした。このまま行けば私は、どこその馬の骨とも知れぬ男と縁付くことになるでしょう。それもこういつた不祥事が起きた今、すぐにでも嫁に出されることでしょうか。弟も十八になれば、私と同じようにどこかの家に婿入りするのでしょうか。

身の毛のよだつ思いでした。目の前が真っ暗になる気分でした。吐き気すらします。そのような事態は決して気持ちの良いものではありません。なかつたのです。

弟と結婚したいと思いました。猛烈にそう思いました。そんなことができたらどんなに幸せでしょうか。誰も悲しむこともなく、みんなが幸せになるのですから。傷つくものといえば世間体と、大槻家の看板くらいなのです。ですからそう過敏にならず、私たちの仲を認めてほしいと心底から望んだのです。出なければ私は、自刃すら論を俟たないであろうことなのです。

しかし認められるはずありませんでした。父様は無情に私と弟を引き離しました。

後から振り返ってみれば、それは父様なりの優しさだったのかもしれない。あえて私たちを引き離すことで過ちを正そうとしたのかもしれない。今からでも遅くはないと考えたのかもしれない。しかしながら、どうしたって手遅れでした。父様の通達は生木を裂くことと同義だったのです。私にとって弟は愛しい恋人であり、生涯の夫でもあったのです。臥所ふしどの中で、私と彼は一生添い遂げることを誓った仲なのです。

私は弟のいない寝室でくず折れました。弟のいない寝台はあまりに空々しく、あまりに空虚でした。私の胸も穴が開いたように空っぽでした。今すぐにも弟に抱いてもらいたいと思いました。そうすれば私の心はたちまち狂おしい愛に満たされ、体も温かい血が通

うようになるでしょう。凍結した心は氷解し、弟の穏やかな愛情に触れることができるでしょう。

私はたまたまなくなって弟の寝室へと向かいました。弟に逢いたい。その一心でした。

弟は蒲団に包まって声を詰まらせていました。枕に顔を押し付け、必死に涙を堪えているようでした。

それを見た私は狂おしくも切ない感情に囚われました。やはり私たちが離れ離れになってしまっただけでどうしようもない。私たちは二人で一つなのだ、と。

私の足跡に気付いたのでしょうか。弟はかすかな不安と多大な期待を持って、振り返りました。

言葉は要りませんでした。私と弟は激しい抱擁を交わしました。それだけで全てが伝わりました。

いきおい接吻の流れになりました。私と弟は専一に互いの唇を貪りました。無我夢中になって接吻に没頭し、互いの鼓動を感じ合いました。

彼は私を蒲団の中に誘いました。抵抗はしませんでした。私は彼の望むとおりに彼に身を預けました。彼が接吻を望むなら接吻を、指を舐めると言うなら指を舐め、耳を噛めと言われれば甘く噛んであげました。彼が身をよじらせると、嬉しくなって彼の口に舌を入れました。

しばらくの間戯れた私たちは、早くも幸せの絶頂にありました。このまま時が止まってほしいと、柄にもない詩的なことも思いました。

やがて弟は凝然と私の目を見詰めました。澄み切った漆黒の瞳でした。

私がかいつと顔が真っ赤になるのを感じました。彼の視線は真剣そのもので、実にまっすぐな目をしていました。私は体をよじらせて顔を伏せました。気恥ずかしさのあまり耳まで熱を持ち始めます。やはり私は弟に惚れているのだ、と恥ずかしさと平行してそんなこ

とも実感しました。そうなのです。私は弟に完膚なきまでに惚れていたのです。完全に骨抜きにされ、弟のためなら何でもできるような女になっていたのです。

弟は上体を起こして私の足を掴みました。慈しむように足の指を口に含めました。私は手で顔を覆い、熟れた林檎のように赤くなる面容を隠しました。弟の行為は変態じみでいて、私を背徳的な気分にするのです。

それでも弟がそういうことをしてくれるのが嬉しくて、私も弟の頭を撫でたりしました。弟は足の指をなめずるのを止めませんでした。私はますます恥ずかしくなり、そして段々と気持ちが高ぶっていくのを感じました。

胸の高鳴りが大きくなる中、足のほうに異変を感じました。それはすぐに痛覚となって私を襲いました。私は痛みを訴えるほうの足を手で押さえました。

そして信じられないものを見ました。

弟は口に爪のようなものを銜くわえていたのです。間違いありません。それは私の足の爪でした。

どうやら弟は足の指を口に含みながら、私の足の指を歯で噛み干切ったようなのです。現に弟が口に銜えた爪の表面はざらざらで、血が付着していました。私の足も血がどくとどくと溢れ出していました。

私は弟の方を見ました。弟は恍惚の表情で私の爪を飲み込みました。口の中で味わうように咀嚼し、ゆつくりと嚥下していきました。その表情は満ち足りており、至福の表情を浮かべていました。

弟はうっとりするような顔をして、私に近づいてきました。私は退くことも避けることもできず、ただ硬直していました。足の痛みはすぐに失せました。それよりも弟の行動の方に目を奪われていたのです。

欲しい、と弟は言いました。姉様の全てが欲しい、と言って私の腕に噛み付きました。初めは肌を舐める程度だったそれは、やがて

歯を獣のように立て、私の肌に食い込みました。そのまま弟は私の皮膚の一部を噛み千切ったのです。

そのときの私は痛みよりも先に、幸福のような悦を感じていたのです。弟は幸せそうに私の体の一部を食しました。その様子を見ると私は、弟が喜んでると耽溺たんできとした女の悦びを噛み締めるのです。もつと弟に喜んでもらいたいと思いました。私は倒錯的にも、もつと彼に愛してもらいたいと思ったのです。ここに言う愛とは近親相姦故の歪んだ欣喜雀躍きんきじやくでもあり、食人嗜好故の偏執的なきめきでもありました。私は弟と一つになりたいと心の底から願ったのです。

終わることへの愉悦でした。弟は私との禁じられた関係、許されざる恋、報われぬ愛に頭がおかしくなったのです。自身の感情と周囲の反応に決定的なズレを覚えたのです。ですからそれが回りまわって、こうした倒錯した愛情表現へと結びついたのでしょうか。いつそのこと全てを終わらせようと言う魂胆なのです。弟は不幸しか見えない未来を見限り、刹那の快樂に身を委ねることにしたのです。そしてその快樂とは常識や倫理とは離反した、めくるめく激情だったのです。

弟の性癖はさしずめ、終滅愛なのでしょう。弟は何か滅びることとに性愛を感じるのです。滅びるからこそ美しいと言うことなのです。

それは私の深層心理にも潜んでいました。私もまた、何か滅びることに性愛を感じてしまうのです。そして今、その開けてはならぬ扉に手をかけてしまったので御座います。

気がつけば、私と弟はひたすらに互いの体を貪っていました。比喩では御座いません。文字通り互いの血や肉を貪欲に食らっていたのです。爪をはぎ、首を絞め、顔を殴ったりもしました。髪の毛を引っ張り、口に指を突っ込んだりもしました。

しかしそれは、私たちにとっての一種の愛情表現でした。生物が消える瞬間が好き、命が消える瞬間が好き、そこに性的魅力を感じるのです。

まさに終末思想を思わせる破綻した論理。生き物は種の保存が最も基本的な生きる理由であるのに、私たちの愛はそれに真つ向から対立するものなのです。自分と共に他人も滅びる。そこにあるのは非生産的な愛であり、何よりも美しく照り輝く純愛なので御座います。

生と死。相反する情動の中で私たちは葛藤し、各々せめぎあっていたのです。そうした考察の結果、私たちは互いに滅びることを選択したのです。

この後の流れはいたって簡単なものでした。互いを搾取しあつた私たちは、このまま死を選ぶことを決意しました。どうせ報われることのない恋で御座います。はかなく散ってしまう命で御座います。であるならば、自らの手で幕を閉じたいと思うのは人の性さがで御座います。覆ることのない人の本質なのでしょう。

決行は翌日となりました。くしくも夏祭りの日に重なる結果となりました。これも神のお導きか、悪鬼の悪戯か。どちらにする私たちは滅びの道を歩み始めたことに変わりはありませんでした。

そして当日。私は人生最後の神楽を奉納しました。ある意味懺悔だったのでしょう。せつかく神々から賜つた大切な命の花を自ら散らせてしまうのですから。私は胸底で何度も懺悔の言を吐きました。人として立つ瀬がないと思いましたが、私の終息へと収斂しゅうれんするこの欲求を止めることはついに叶いませんでした。

月の綺麗な夜で御座いました。森閑たる静謐に包まれた夜で御座いました。

私は紙垂しでの取りつけられたご神木に我が身を吊るしました。服装は死を案じさせる白装束で御座いました。弟もまた白装束で、手には槌と釘を握っています。その片方の手の指はさきほど、私が塹たがねで切り落としました。弟がそれを望んだからです。弟はこれから死に逝く姉に惻隱の情を覚えたのです。優しい弟は姉である私のみならず、我が身にも想像を絶する苦痛を自ら所望したのです。それくらい弟は人間味に溢れ、寛大な人格者であつたのです。

おそらく弟は私を殺した後に死ぬつもりなのでしょう。私を見詰める目にその覚悟がありありと表れていたのですから。弟は己の軀に身を任せつつも、純然たる愛を持って私を冥府へと連れ去るのでした。そこに無慈悲な死神の姿はなく、慈愛に満ちた天使のみが私を見守ってくれたのです。

弟は私を姉ではなく一人の女性として愛してくれた、ただ一人の男性でもあったのです。

弟は震える手で槌を振るいました。私は齒を食いしばって激痛を堪えました。私の手は深々と釘によって穿たれていきました。しかしその苦痛は、包み込むような優しさを持って私に安息を与えてくれました。弟が与えてくれる痛みは何をおいても愛そのものでした。弟は私の痛みを察しながらも、私に愛を与えてくれたのです。

緩慢に意識が遠のいていきました。弟の青白い顔も、無機質な槌も、霞もやがかかったように見えなくなりました。曖昧模糊と歪んでいき、霞みゆく意識は穏やかな死の風にさらわれてきました。

私は幸せでした。

弟と愛を交わすことができて幸せでした。

弟と共に死ぬことが幸せでした。

父様、母様。私と氷雨をこの世に産んでくれて衷心よりお礼申し上げます。あなた方のおかげで私と氷雨はこうして会いまみえる事ができ、愛し合うことができたのですから。

そして襖、葵、庵。あなたたちは強く生きなさい。私のようになつては駄目ですよ。自分を信じなさい。まっすぐに成長しなさい。それだけが私と氷雨の望みです。

私は罪深い女でした。ですが、私の最後の願いをどうか聞いてやっつてはくれぬでしょうか。皆様に迷惑ばかりかけて私は浅ましい女です。それでもこの願い、聞き入れてください。

と言うのも、私と氷雨の遺骨を瀬戸内の海に弔ってはいただけないでしょうか。私と氷雨共々、母なる海で共に暮らしたいのです。そしてその役目は、襖。おまえがやってはくれぬでしょうか。

おまえが私を意識していたことは前々から承知していました。それが恋愛感情なのか、師弟愛なのか、それとも単なる友情のようなものなのかは分かりません。けれどもおまえにふさわしい役かもしれませんね。本当に迷惑をかけます。死してなお、おまえたちの世話になりたくはなかつたのですけど。

それではあなたたちの帰りができる限り遅くなるよう、私と氷雨はこちら側で願い、そして気長に待つております。

またいずれ。

気がつけば僕たちは歪んでいた。

ただ。

歪んでいても救いがあることだけは確かだ。

## 第二十六話

大槻時雨と大槻氷雨の遺体は肅と茶毘たひに付された。

外は雨だった。

滅入るような曇天。煙突から燻った煙が雨に混じって消えていった。

先ほど二人のお父さんから手紙と遺骨の入った木箱を貰った。遺書だった。

否。それは遺書と言うより懺悔の言葉に近かった。すなわち時雨サンの罪の告白だったのだ。

丁寧に記されたそれは、禍々しくも初々しい恋心がたたためられていた。氷雨サンとの恋の経緯が詳細に記述されていた。

なんとも言えず、困る。僕はその手紙を大事に懐にしまった。一応コピーは取ってあるらしいから、僕が持っても多分大丈夫……だと思う。

そして。

僕の手には古めかしい木箱があった。

僕は一人で海へ向かうことにした。

バスの停留所に乗り込んで、ぼんやりと暮れゆく夏の海を見た。

窓を少しだけ開けて、潮のにおいにむせる。そいつに夏草の湿気ったにおいが混じって、いかんともしがたい不思議なおいを醸し出すのだ。

けど。

このにおいも悪くないかな、とか思う。

頬杖をついてぼーっとしていると、いつの間にかバスは停まっていた。僕は運賃を支払って降車した。目の前は岨道そみちで、後ろは海だ

った。斜陽に照る水面。ガードレールを越えて砂浜へと向かう。タバコの吸殻やごみの類が落ちていない綺麗な海だった。

仮設された階段を下り、岩場に足をかける。そのまま砂浜へ出た。僕は靴を脱いで裸足になった。だってそのほうが気持ちよさそうだったから。風とか潮とか砂とか、そう言ったものを全身で感じ取ることができそうだったから。

何か一言、叫びたくなる。愛とか正義とか、どうにもならないものとか諦めとか、そんなどーでもいいものを体の中から吐き出したくなった。価値観とか倫理観とか、そんな邪魔なものを取っ払いたくなった。海にはそんな力があるのだろうか。僕には分ならず、ただ夏の海に叫んだ。

水平線の向こうに広がっているのは何なのかな、とか思っても答えは出ない。なんだかその中に人生の心理が見え隠れしているようで、どうでもよくなる。絶対な心理とか、確実なものとか、この世界ではごった返しているけど、そんなもの、僕の人生の中で一度としてみたことがない。

潮風が心地よい。僕はしばらくの間風に打たれ、やおら木箱から小さくなった骨を取り出した。二人分。かつて僕の恩人であり、師匠であり、友達であり、他人でもあった人の骨。僕は手首のスナックプをきかせて、穏やかな波の立つ海に投げてやった。波は静かに二人の骨をさらっていった。あつという間に見えなくなる。ついでに木箱も投げて、欠伸を漏らしながら、海を後にした。

振り返ることは特にしなかった。

あの時から僕は、少しずつ変わっていったような気がした。二人の死が一因だったのかもしれない。あるいは関係なかったのかもしれない。ただ、きっかけではあったように思う。

僕は思い切って髪を銀色に染めた。白と灰が混ざったような色。

初めは似合わないかなと思っただけど、存外僕の幸薄そうな顔と整合してそれっぽくなった。周りから鬻ひんぎこそ買った。けれど葵はかっこいいと言ってくれたし、相原に限ってはあいつ茶髪だし、文句なんか言わせないし。

そんなこんなで僕の周囲にいる人間は割と理解を示してくれた。学校の方は苦い顔してたけど、担任の顔殴おつて黙らせた。

以降、僕は銀髪で通ることになった。

その真意を問うものは誰もいなかった。

僕と葵と相原は二人の命日めいじちになるとお墓参りをするようになった。すると大抵、色々な人と会う。やっぱり二人は慕われていたんだなあとしみじみと思う。二人がどうなるうと大槻氷雨は大槻氷雨で、大槻時雨は大槻時雨なのだ。

僕だけ、一ヶ月に一度、二人の墓に参る。意味なんてない。それこそ懺悔に近い。僕は殺人未遂のような過ちを償いに来ただけなのだから。こんなことで許されるとは思ってない。けれど、足しげく通って墓前に花を供えている。胡蝶蘭こちやうらんを二本。花言葉はあなたを愛しています、だ。

もう夏休みも中盤だった。一向に宿題が終わる気配がない。僕は頭を抱えながら、御影石に水をやった。柄杓で清らかな水をかけてやる。

蝉時雨がうるさい。霊園に人通りはなく、閑散としていた。ザワザワと潮騒の音が聞こえるだけだった。

今の自分の心境をそのまま表しているように思った。僕の心は伽藍堂ででっかい風穴が開いているのだ。

別にどうしようとも思わないけど。

ふと、気付く。二人の墓標の前に花が一本ずつ活けてあった。僕が用意した花柄の花瓶とは別の奴。淡泊な陶磁器らしい陶器。それに薄いピンクの花が手向けたむてあった。しかも新しい。瑞々しくて、枯れていなかった。

僕はなんだか嬉しくなって、胡蝶蘭の花を陶磁器の方に移植して

やった。これで一つの器に二本ずつの花が添えられたことになる。

薄いピンクの花は花見月はなみずきだった。

確か花言葉は……。

「私の想いを受け止めて、だっけ」

粹なことをするもんだなあ、とか思ってたくすくす笑った。花見月の花を手向けた誰かに拍手を送りたくなかった。

今になってみればそれは、決して逝去した二人だけに向けたメッセージではないように思う。

もっと深い意味が。

向けるべき相手が。

そう。

それはきつと。

## 第二十七話

一夏の夢に過ぎないのか。

ベットから起き上がった僕は、そう自問した。

体の節々が痛い。僕は痛覚を訴える頭に手をやった。

と。

もう片方の手。それはパイプ椅子で眠りこける妹の手に繋がっていた。

周囲は白い壁に包まれている。薬品が収納された棚。小奇麗なデスク。そこには一人の女性がいた。清潔そうな白衣を着ている。

ここは保健室なのか、と気付く頃には意識はほぼ覚醒していた。視界も鮮明になる。そして、なぜ自分がここにいるのか、と言うことも大体推察できた。

「気分の方はどうかしら？」  
と。

保険教諭の関口先生は静かにそう問うた。

三十路を過ぎたばかりだと言うのに関口先生は相変わらず若々しい様子だった。髪をアップにしたおやかに笑んでいる。白衣を着こなす姿は凜呼としていた。

「はい。大丈夫だと思います」と僕はこれと言った考えもなくそう言った。「それよりも……その、僕は……」

「昼休みごろかしら。あなたは倒れたのよ。おそらく疲労とストレスによるものね。一時的なものだわ。心配しなくていい。確かあなたは低血圧気味だったわよね。それが重なったのね。ご愁傷様。けど、さつきも言ったけどそれほど重症と言うわけでもない。むしろ軽い方かしら。くれぐれもお体のほうを大切にね。あなたはまだ若いんだから。私みたいにくたびれた大人になっちゃダメよ。唯一の娯楽が酒とタバコだなんて穢れてるわ。不潔。けど止められないのよ。依存性って奴かしら。これは老婆心ながら忠告しておくわね。」

酒とタバコは止めておきなさい。人生破綻させるわ。年長者の経験による警告であり、訓戒ね。胸に刻み込んでおきなさい。貴方は低血圧と言う持病を抱えているのだから、なおさらだわ。それと癌になる確立も上がるらしいのよ。これは大変だわ。大々的に集会を開いて生徒たちに注意を喚起しなくちゃいけないようね。直ちに続行。即座に敢行。私の行動力が試されるときだわ。さて、今日もかわいい生徒たちのために私、がんばる！」

矢継ぎ早にまくしたてる。関口先生が一旦話し出すと、もう止まらない。立て板に水。口を開けば連射砲のように長広舌を振るうのだ。それでも声は馥郁<sup>ふいく</sup>たる低音で、耳に心地よく響く。関口先生は早口の割に流麗とした語り口調であり、それが男子生徒の注目を浴びる一因にもなっている。

一方の僕は苦笑を浮かべて、「はあ」と一言。先生の熱弁にあまりついていけないのだった。

「あら、紅花<sup>べにはな</sup>君。ちょっと引き気味ね。熱があるのかしら？」

「た、多分大丈夫だと思います」と先刻の焼き回しをして、苦笑いを浮かべた。先生の言うとおり疲労が溜まっているのか。なんだか無性にだるい。

加えて。

目に涙の跡を伝わせて眠る妹の姿がさらに気分を重くさせる。僕の手を硬く握り締める葵<sup>あおい</sup>は椅子に座りながらベットに突っ伏していた。長い黒髪が放射線状にシーツの上に広がる。窓から穏やかな光が照って、葵の姿をぼやかした。

……今何時だろう？

窓から漏れる日差しはすでに柑子色<sup>かんじ</sup>だった。はっとして時計を見る。

「六時を過ぎた頃よ。あなたは五時間近く夢路に旅立っていたことになるわ」と僕の疑問を感得したのか、先生が今の時刻を教えてくださいました。

段々と明瞭になっていく記憶。僕は昼休みの一件をおぼろげながらに思い出した。

「そして、あなたの妹さん。確か……葵さん、だったかしら。彼女も五時間近くずっとあなたのそばにいたのよ。美しきかな兄妹愛。私感動したわ。今時こんなにも健気で純真な兄妹がいるかしら。小説でも見たことはない。事實は小説よりも奇なり。まさにその通り。先生、献身的に兄のそばに続ける葵さんに敬意を表するわ。そしてそんな妹さんに愛されてるあなたにも、尊敬の念を抱く。あなた友達にも恵まれてるみたいね。倒れこんだあなたをここまで運んでくれた彼。名前はなんて言うの？正直初めて見た生徒だわ。あまり学校に登校したことはないのかしら。私は全校生徒の顔と名前は頭に刻み込んでるはずなんだけど、彼だけ該当する情報がなかった。不登校？ そんな雰囲気じゃなかったわ。むしろ不良ね。けど、不良と言う割に仲間想いのいい子じゃない。先生、感涙のあまり胸がつく思いよ。今時の若い子も捨てたものじゃないわね。まだ芽吹いてる。友情に厚く、家族愛に厚く、義理にも厚い、そんな人間愛。今も昔も変わらないものね。なんだかんだ言っても、やっぱり人の人情はそう易々となくなるわけがない。これからもそうなっただけじゃないわ。私はそう思う。なんてっただって、お正月の願掛けに世界平和を祈った女だもの」

「それは……随分と高い志で」

先生は悪戯っぽい笑みを浮かべた。「志を高く持つことに越したことはないわ」

そのとおりだと思った。人生、高い目標を持つに越したことはないのだ。

それと……ある意味予想外だったのは相原だった。あいつ、思った以上にカッコいい奴じゃないか。明日パンでもおごってやるわ。

そして……ある意味予想通りだったのは葵だった。きつと部活も何もかも休んでいるのだから。先生が言うにはずっと僕のそばにいてくれてたみたいだった。と言うことは授業中もなのかな。……お

「いおい、単位の方は大丈夫なのか？」

「そんなことをつらつら思っていると、もぞもぞと布のすれる音がした。」

「うるうる」と子猫のように目をこする。それは髪をばらばらと揺らしておもむろに起き上がった。

と。

「おおっ、お兄ちゃんっん！」

抱きつかれる。僕は飛びつくような抱擁で思い切り仰け反った。

「おおっ、お兄ちゃんが、いつ、生き返った！　だだだ、大丈夫、お兄ちゃん？　気分はどう？　きつくない？　きついなら言ってね。なんでもしてあげるから。なにになに、温かいものが食べたい？　それなら今日のお夕飯は鍋にしようか。それともおかゆがいい？　お兄ちゃんはどっちがいい？」

「……葵。苦しいから。それに胸……当たってる」

「うわあ、お兄ちゃん、えっろー。妹に発情してるんだ。……もつと発情してもいいよ。ちょうどここベットだし。なんだったら今すぐにでもいいよ」

顔は笑っているけど、目が笑っていないかった。

僕は葵を元のパイプ椅子に座らせた。渋々と座りなおす葵。僕はいかんともしがたい感情に囚われた。

先生の方はと言うとしきりに感動していた。なにやら家族愛の大切さとか、絆の強さとか、そう言った独り言を垂れている。先生は先生で自分の道を驍進はくしんしているようだった。

気が滅入る。僕の周りにいる人たちはどこかがおかしい。社会とか常識とか、一切無視。自分のルールに忠実。一応筋は通っているけど、どこか異常なのだ。僕も含めて、だけど。

「ま、とりあえず我が家に帰ろっか。もう夕方だし」

「そうよ、そうよ、紅花君。早く家に帰って妹さんとの愛を育みなさい。それが家族愛と言うものよ」

「ほらあー、先生もそう言ってるよ」と葵はうっーと唇を突き出し、

「お兄ちゃんももつと私を愛できるようにっ！」と芝居がかった仕草で僕を指差した。

まあと先生が一驚するが、僕のほうはいわずもがな。葵の額を小突いてやった。

「いつ、いたいー！」と自らの額に手を当てて、伏せた目で僕を睨む。全然怖くなかった。葵の怒った顔は一見、悪意とか憎悪とかそういうものが一切窺えない。顔の造形も端麗としていて、みなから愛されるような出来過ぎた女の子だった。

けれど。

目の奥は毒々しい邪気が漏れている。蛇。その様相は蛇。

葵は己の中に癡悪な蛇、獣を飼っているのだ。それは年々、大きくなっていくように思う。宿主の憂き身をやつすほどの熱。それを糧に日に日にその身を肥えさせていくのだ。

それは僕も似たようなもの。向かう方向こそ違う。けれどその本質に大差はない。むしろ卑近。卑しく近しい存在。

葵が幸せそうにしなだれてくる。僕の胸部に頬をくっつけて、まるで猫のよう。僕の心音を聞いてるみたいにびったりとくっつけた。「やっぱりお兄ちゃんといると落ち着くなあ。もういろんなものがどうでもよくなっちゃうよ。あうう、結婚したいなあ。お兄ちゃんと結婚したいなあ」

「どうやら葵さんは結婚願望が強いみたいね。確かどこか辺境の国で近親婚が認められてたところがあったような……」

「そつ、それ。どこなんですか？ 先生、この私にご教授を！」

「ちよつと待つて頂戴。今世界地図を探している最中よ」

「探さないでいいです。それと葵。いい加減重い」

「うう、シヨック！ そんなこと女の子に言わないでよね」

「いいんだよ。おまえは僕の妹だろ。家族に遠慮はいらない。だからあつけらかんとそう言ってるんだ」

「……へー、そうなんだ」

葵の声色はわずかに冷たくなっていた。神経質に頬がピクリとう

ごめく。

僕はそれを見なかったことにして、「それでは関口先生。僕はもう自分の家に帰ります。色々としてくれてありがとうございますがとう御座いました」と礼を述べて頭を垂れた。続けて葵のほうも頭を下げた。

「……帰るか」と声をかける。

「そうだね。帰る」

葵から僕の鞆を受け取る。どうやら葵はわざわざ二年二組の教室から僕の鞆を持ってきてくれたみたいだった。相変わらずの細やかさ。少し怖い。

それは一重に、僕に対する愛情の深さを物語っているように思う。いずれは破綻する。それは目に見えていた。けれども僕はそんな今を取り繕って、それっぽく生きてる。下手くそにやりくりして道を進んでる。不器用だからとかっこつけながらも、無様に地面の上を這いつくばっているのだ。

ふと、不知火サンのことが脳裏をかすめた。彼女は今、何をしているのだろうか。

葵に聞けば分かるかもしれない。けれどそんなことをしたら、葵はへそを曲げるどころか、大変なことになりそうだから棚上げ。僕の得意技、棚上げ。そいつでやり過ぎす。

……そう言えば。

そう言えば、もうそろそろお墓参りの頃だ。僕一人だけの罪滅ぼしのような墓参ほむまゐり。

先ほどの夢を想起する。いびつな形をした荒唐無稽な懐旧談。初々しいように見えて悪意に満ち、瑞々しいように見えて狂気に満ちている僕の過去。

一夏の思い出として片付けるにはあまりに重く、生涯の汚点と言うにはあまりにも美しすぎた。僕の衝動はどこまでも醜くて、どこまでも清らかだった。幼心が清新に歪んだ一つの解だった。僕の生き方に対する一つの標めしでもあった。

結果、僕はそれを封印することにした。くだらない妄想、どうで

もしい幻想として処理した。

それが正しいかどうかなんて、それこそくだらなくて、どうでもいいことだ。正誤を問う必要もなく、是非を問う必要もなく、適当に心の片隅に放置していい問題なのだ。いずれは風化する。記憶の海に埋没する。それを待てばいい。幸いなことに、待つことは得意苦にもならない。だからそのままでもいいのだ。

それでも。

時々漏れ出る。様々な感情と結びついて、紛糾して、大変なことになる。そのときは仕方がない。その対象が人間に向かないよう努力するだけ。これ以上、双方に傷が増えないよう尽力するだけ。僕の心は傷だらけで、瑕疵かしに溢れていて、どうしようもないのだ。無秩序に狂っているのだ。

僕はどこまでも続く水平線を見た。救いを求めるように。何かに縋るように。

「生きるって難しいね」

葵は僕の奇妙な言に喫驚したようだった。不思議そうに首を傾げる。艶かしい仕草。それでいて危険な匂いが香る。

「いきなり何を言い出すかと思っただら……。お兄ちゃん、意外に哲学かぶれだね」

「哲学とかそんなんじゃないんだ。ただこう、生きるって、案外面倒なんだな」って思った」

「自殺とかしないだね」

「しないよ。痛そうだから」

「あなたを殺して私も死ぬわ、って誰かに言われたら、お兄ちゃんは死ぬ？」

「趣旨が違うだろ。ここはルネサンス期のヨーロッパか」

「もし私がお兄ちゃんと一緒に心中してっ！ って言ったら、お兄ちゃんする？ 心中」

「状況の経緯が分からないよ。どうなったらそうなるんだよ」

「それは別として、だよ。それで私がナイフを取り出してお兄ちゃん

んに無理心中を迫つたら？」

「かつこよく返り討ちにする」

「それは無理だよ。こう見えても私、フットワークはバスケットでも一二位を争うほどなんだよ？ 絶対にお兄ちゃんを道連れにする自信がある」

「それは無理だね。こう見えても僕、逃げ足だけは学園中でも一二位を争うほどなんだよ。絶対におまえから逃げ切る自信がある」

「なんて不名誉な自信……。まあ、お兄ちゃんの足の速さは認めるけど、それとこれとは話が別なんだから！ 火事場の馬鹿力みたいなものが発揮されると思うし、それに私だって足の速さには定評があるんだよ」

「少なくとも火事場の馬鹿力の使い方は間違ってると思うよ。もっと前向きな方向で使わないとダメだろ。思いつき後ろ向きじゃないか」

「いいもん。私には私なりの考えがあるんだもん」

葵はすたすたと行ってしまう。どうやら少し怒ってるみたいだった。

微笑ましくも思うが、内容が内容だけに危機感。まさかとは思う。思うがありえない話でもない。

僕はのんびりと道に沿って歩く。時々通行人とすれ違って、挨拶して、そのまま。小さい交流。薄っぺらな僕たちの接点。僕たちの人生はそうやって交錯していく。人のつながりは基本的に希薄でいて、それを紐帯するものは損得や愛情。まれに太い絆となつて表出する場合もあるけど、それを差し引いたって社会と言うものは限りなく疎ましくて、面倒なものだ。

損得とか愛情とか、そんな不確かなもので繋がっている僕と世界。損得だつて意味があるように見えて、意味はない。お金とか物とか、究極的なところでなんら役にはたたない。しかしながら、人々の信奉する神様よりはよっぽど役に立つ。その点だけは評価したい。

愛情に重きを置いた人生。愛に偏った人生。それ自体が異常なも

ののように見える。愛とか恋とか一体どこから湧いてくるのだろうか？ その源の不透明さ。どういう化学反応が発生しているのか？ そもそも愛とはなんなのか？ 人生に有益なものなのか？

僕にはあずかり知らぬところだ。

知ったところで何になるのか。

愛は愛。

恋は恋。

A II Aの論理。それでいい。その途中経過に煩雑なものを入れ込むから、より複雑になっていくのだ。生物学とか心理学とか、そう言ったもつともらしい論理、空想。

複雑なのは自分の胸のうちだけでいい。これ以上何かが煩雑になる必要なんてなくて、やはり物事は単純な方がいいのだ。分かりやすいほうが精神衛生上よろしいのだ。これ以上複雑なものは抱えたくない。これ以上愛とか恋とかに理由付けはいらぬ。そんなことどうだっていいし、何がどういいう役割を担っているかなど、やはりどうだっていいことなのだ。

「やっぱり、生きるって難しいや」

誰に聞かせるでもなく、むしろ自分に言い聞かせるようにして、僕は歩いていった。

## 第二十八話

翌朝。

僕は葵と一緒に登校した。葵はやりくりして朝練をパスしたらしかった。

何もそこまで、と思わなくもなかった。けれどもそれは妹の中では確定事項らしい。

妹曰く、僕のが心配でたまらないのだとか。

仕方なく一緒に登校することにする。幸い、異状はなくいたって健康。気分も良好だった。

「またね、お兄ちゃん」

「んじゃ」と。

挨拶を交わして別れる。葵は一年三組。僕は二年二組。僕だけ一つ多く階段を上ることになる。

踊り場の方に出ると、後ろから気配がした。

したと思ったら、肩を叩かれた。

振り返る。

「おはよう」

「……おはよう」

そこには顔を俯けた不知火サンがいた。さらさらと前髪が表情を隠した。

「保健室にいったって聞いたけど……体調の方はどう、かな」

「全然大丈夫だから。心配しなくていいよ」と落ち着かせるようにそう言う。今日の不知火サンはどこか様子がおかしかった。

「……ごめんね」

「ん。何か言ったかい？」

「ごめん。ワタシ、駆けつけて上げれなかった……。楔君の彼女なのに……。恋人なのに……。駆けつけて上げれなかった」

それは先日のことだと推測。そういえば不知火サンの姿は見当たらなかったように思う。

僕は顔の前で手を振って、「ああ、いいって、それくらい。たいしたことじゃなかったし」となるべく深刻さが出ないように言った。事実、それほどたいしたことでもなかった。

「いや、違う。ワタシ……行けなかった。保健室に入ることができなかったの」

「……どういう意味？」

「あなたの妹さんに……」

納得。薄々事の内情が理解できた。

「……なるほど。僕の妹に入室を断られたと」

首肯。不知火サンは切ない顔で僕を見ていた。どことなくおどおどとしている。

不知火彼方しらぬいかなたと言う人間は色々な顔を持っている。積極的な時もある。恭順な時もある。どちらにせよその姿は凜然としていて、美しかった。けれどどことなく不知火サンは欠けているように見える。飛ぶことを忘れてしまった鳥のような不安定な感じがするのだ。

それが顕著。

不知火彼方と言う人は明らかに奇異に見える。表情、情緒が常に一定でない。かといって感情の起伏が激しい、と言うわけでもない。不知火サンは基本的に無表情なので、そう言った感情のうねりが微細なのだ。

しかし。

その目は獣のごとく濁っている。理知的に見えるまなざしも、飾り気のない口調も、盲目で深淵なものを窺わせる。

未完結。

その言葉が不知火彼方にはふさわしい。所々に取り繕った跡、無理やり修復した傷、そう言った欠陥を完璧さで覆っている。成績優秀、運動神経抜群、容姿端麗。一見無謬むびやうに見える。だけどその実、

完璧の裏に異質な何かを忍ばせているような……。

不知火サンは僕の顔を覗き見ては、申し訳なさそうに目を伏せる。かわいらしい仕草。近くににいる男子生徒は呆けたように不知火サンを凝視し、そして僕に猛然とした嫉視を向けてきた。男子のうじうじした恠気じんきにはある程度慣れていくけど、やはり居心地が悪い。なまじ、不知火サンが泣きそうな風だからなおのこと。

気まづくなつて不知火サンの手を握った。そのまま教室へと連れて行く。これ以上、嫉視と蔑視にさらされるのは御免だったからだ。途中、強く握り返される。不知火サンは目尻を緩めて、僕に微笑みかけた。抵抗することなく、黙って僕について来てくれる。

「強引な楔君も……素敵」

「違つ」

「や、優しくしてよ。わ、ワタシ、その言つゝの初めてで……」

僕の行為を致命的に誤解した不知火サンは、頬を赤く染めた。

四時間目の授業終了のチャイムが鳴ると同時に、みな一斉に席を立った。二年二組の教室は一時の開放感に包まれる。

一、二、三、四と寝たりぼーっとしたりして時間を潰していた僕は、やおら伸びをした。骨の軋む音。手をぶらぶらさせて、首を何回か曲げた。

「今日も相原と食べるか。」

そんなことを思つて寝惚け眼をこすっていると、小さい風が目の前を一過した。

「食べよ」

弁当箱をなぜか二つ持った不知火サンが無表情のまま問いかけてきた。僕の服の襟を掴んで、僕の視線を無理やり不知火サンのほうに向けさせる。

間然するところのない美貌。瞼を決した双眸は凜々しい光を称え、

そのまま吸い込まれそうになった。  
息を呑む。

「お昼ごはん、食べよ」

それだけ言つて口を閉ざす。無言。不知火サンは冷え冷えとした目で僕を眺めた。

こくと頷くと、不知火サンはわずかに頬を緩めた。微量な変化。感情は読み取れない。

不知火サンは僕の手を握った。引き摺られる。そのまま屋上へ続く階段を苦労しながら上った。

鉄製の扉を開けると、青い空があつた。人気はない。屋上には別段何もない。小さな鉢植えと朽ちかけたベンチ。その程度。

不知火サンは僕の手を離さない。ぎゅっと硬く握つて、近くにあるベンチへと連行した。

「座つて」とベンチに座つた不知火サンは、自らの膝を叩いた。  
ここに座れ、と言うことか。

「食べさせてあげる」

「……赤ちゃんじゃないんだから。ご飯くらい一人で食べれるよ」  
「なら、ワタシが座っていい？」

「どこに？」

「ここに」と不知火サンは僕の脚部を指差した。「楔君の足、柔らかそうでそそる」

天下の女子高生には到底似合わない言葉を吐いた不知火サンは、唾液を手でぬぐいながら僕を注視した。不知火サンの掌は発汗していて、何度も舌なめずりを繰り返している。

身の危険を感じる。

黙つて不知火サンの隣に座る僕。さすがにそんな度胸は僕にはない。勇気と無謀は違う。僕は何度も胸の内ですう唱えるのだった。

「もう……。素直になつて。いいよ。しよ？」

僕の太ももに手を這いずらせた不知火サンは、唇を湿らせる。女の色香。牝の薫香。艶かしくて眩暈がする。

欲望に必死に抗って、不知火サンの手を掴み、相手の膝の上に戻してやる。一瞬僕に手を掴まれて何かを期待した不知火サンは、明らかに落胆したようだった。「楔君の意気地なし……」

「意気地なしで結構」と言いながらも欲望に負けそうになって、自己嫌悪。「それよりもご飯にしよう」

そう提案すると、思い出したように二つあるうちの一つを僕に手渡す。丁寧に包まれたそれは弁当箱だった。

逡巡していると、「ん」と突き出される。僕は手元の弁当に目をやる。一応、僕には葵の作ってくれた弁当があるんだけどなあ、と冷や汗をかく自分。

「あなたのために作っておいたの。よかったら食べて」

「いや、僕には葵のが……」

「そんなのよりもこっち。こっちを優先して」

「二人分も食べれない」

「なら、一人分で十分だよ。ワタシのだけで」

「うっ」と詰まる。

「お弁当はいい。好きって言う想いの丈が具体的に形を持つから。今日は五時に起きた。楔君のためにがんばった。だから、食べて。ワタシのこと好きなら食べて。遠慮はいらない。お母さんにも味見してもらった。おいしいって。お母さんは味にはうるさいから、味だけは保証できるよ。だから……早く食べてよ」

凄絶な気迫。表情はない。けれど、鵜の目鷹の目で僕を見詰めてくる。不退転の想い。並々ならぬ熱意を感じる。

「……分かった。ありがたく頂くね」

「ワタシのこと、好きだから？」

「……うん。好きだよ」

少し自分が嫌になる。また流されてしまったと後悔。けれど不知火サンに好意を抱いているのは真実。

破顔一笑。不知火サンはすごく魅力的な笑みを浮かべた。

そして。

「楔君、大好き」  
と。

直球。

不知火サンは小さく笑って、僕に弁当を渡した。僕はポカンとした風になって、慌てて受け取った。

僕はたじたじになって、「ごまかすように言う。「すっ、ストレートだね」

「自分の感情を素直に口にしただけ。ただそれだけのこと。楔君も、ワタシがあなたのこと好きなの、知ってるでしょう？」

「それはその……」

痛いほど分かる。

「だったら、いい。食べよ」

不知火サンはするすると弁当のハンカチをとく。彼女に促され、僕も同様に結び目をといた。

そして。

お弁当の蓋を開ける。僕は開口一番、唸った。

「……すごいね」

「驚いた？」

「驚いた。すつごく豪華」

お弁当箱には色取り取りの品が納まっていた。品数も多く、見るだけで涎が出る。

「いっぱい力、入れた。ちょっとお母さんにも手伝ってもらったけど、大体はワタシの手作り」

たんとお食べ。

不知火サンは悪戯っぽく言って、ニコニコと笑う。

「ねえ、楔君。楔くん」  
と。

不知火サンは言う。

一方の僕はと言うと、口に玉子焼きを詰まらせて呼吸困難に陥っていた。

慌てることなく僕の背中をさすってくれる。優しい手つきで、慈愛に満ちた表情で。

どうにかして玉子焼きを咀嚼。いまさらながらに玉子焼きのほんのりとした旨味が口に広がる。

不知火サンが介抱してくれたからか大事には至らなかった。間抜けな僕、とか思う。

不知火サンは申し訳なさそうに表情を沈めた。「ごめん。いきなり話しかけたから……」

違う違うとジェスチャーをして、玉子焼きを食べ終え、「違う違う」と訂正。「不知火サンの玉子焼きがあまりにおいしくて」

「……そう」

不知火サンは一瞬あっけに取られたようだけど、すぐに幸せそうな表情を作る。唇を舌で潤して、濡れた瞳を僕に向けた。

そう言えば、と思い出したことがあった。舌を舐めると言う行為はキスを暗示しているとか言うことを、どこかで聞いたことがあるような。

「愛情込めて作った。おいしくて当然。けど、嬉しい。楔君がそう言ってくれると、嬉しい」

「本当においしいよ。お店を出せるレベル」

「本当？」

「本当」

クスクスと笑い合う。

不知火サンはおもむろに自分の箸でレンコンを摘んだ。下に手を添えて、「あーん」と箸を僕の口元に持つてくる。

顔が少し引きつる。大げさに言えばこれは、恋人同士が一線を越える共同作業なのではないか。

前にも葵にされた覚えがあって、断ったら猛烈に怒られた。箸や

皿を投げつけられそうになって、自分の部屋に逃げた。一時間くらいかな。ずっとそこに避難してた。幸い施錠可能な部屋であったので、乗り込まれることはなかった。けれど、ふと外に視線を投じてみれば、道路の上に立つ葵と目が合って、戦々恐々とした経験がある。僕の自室は二階にある。けれどその気になれば、近くの木を使つて登れないこともない。

あわててカーテンを閉めてベッドの下に隠れた。葵の目は遠めに見ても淀んでいた。手には大皿を持っていて、右手には箸を握っていた。

食べさせるつもりか。

僕の部屋に無理やり上がって、食べさせるつもりが。

今日のお夕飯は酢豚だよ。お兄ちゃんの大好きな、酢豚。

にっこりと笑うその表情は、不自然だった。作られたような顔。

一皮向けば、どろりとしたものが溢れ出る。

思い起こせば、あれこそが兆候だったのかもしれない。あの頃から、僕に対する屈折した感情を自覚したのかもしれない。

いつの頃の話かは忘れた。ちよこつとだけ説教されて、ちよこつとだけ折檻されただけで、記憶は曖昧模糊。脳の片隅に埋もれている。

けれど、葵は今もその感情を引き摺っている。

「……どうしたの。顔色が悪い」

「……いや、ごめん。頭痛がして」

泣きはらした子供のような顔、だと思う。

今の自分はそんな風だ。

手で顔を覆っていた僕は、ゆっくりと前を向いた。

不知火サンの顔があった。

不知火サンは静々と笑って僕を見ている。典雅に微笑んで、両の掌で僕の手を愛しそうに包み込んでくれた。

目が合う。

笑いかけてくれる、彼女。

「大丈夫。あなたの痛みも、苦しみも、悲しみも、全部ワタシが受け止める。あなたとワタシは一心同体。いつでも一緒。つらいときは言っただけ。いつでも相談していいから。ワタシはあなたの天使。胸が苦しくなったり、息ができなくなったら、ワタシに助けを求めらるんだよ?」

「……ありがとう」

「あなたのことが好きだから、こうしてあげるんだよ」

「……うん」

「妹さんが原因?」

お見通しみたいだった。

僕と妹の濃い関係。

著しく歪んだ関係。

傍<sup>はた</sup>から見れば、僕たちの関係がいかにおかしいか分かる。どれだ

け気味が悪いか、気色悪いか、一目瞭然。

とつくに狂ってる。

生まれたときから、僕と葵が生まれたときから、僕たちは。

「そうなんだ。あなたの妹さんは……好きなもの? あなたのこと」

核心を突く質問。患部を深くえぐってくる。

「……家族として、ってこと?」

「違う。異性として、ってこと」

「……」

「ワタシね、思う。あの子、変だよ。不自然すぎる。昨日あなたが倒れたときもそう。残りの授業全部欠席して、あなたのこと看病してた。あなたに依存して、隷属して、家族じゃなくて、まるで恋人みたい……。あなたたち、家族なのに。兄と妹なのに。お互いのこと好き合ってる恋人みたいだったよ。本当の恋人のワタシが保健室に来て、面会謝絶。それでもワタシが近寄ったら、近くにあって本とか体温計とか、メチャクチャに投げられた。その後、思いつきパイプ椅子で殴られた。お兄ちゃんに近づかないでって、獣みたいな……。幸い保健室の先生がいなかったからよかったけど……。あ

れは違う。家族愛とか家族の絆とか、そう言うのじゃない」

「……ごめんね。あいつの代わりに謝る。ごめん」

僕は頭を下げた。

不知火サンはそつと僕の肩に手を置いてくれた。慈しむように僕の頭を撫でてくれる。

僕は許しを請うように不知火サンを見た。

「いい。殴られたときはちょっと痛かったけど、別にいいから。ワタシだって負けちゃったから……。彼女の勢い、力に負けちゃったから……。ワタシだって楔君のことが好き。誰よりも愛してる。妹さんよりもずつと……。何年も前からずつと……」

「そう言えば」と。

「そう言えば、不知火サンは何で、僕を好きになったの？」

「一目惚れ」

「……は」

「五年前にあなたに一目惚れしたの。……文句ある？」

「いや、文句はないけど……」

「腑に落ちない？」

「落ちない」

「失礼な人」

「……ごめん」

「いいよ。けど、強いて言うなら、きっかけはあの人」

「あの人って？」

「大槻時雨」

## 第二十九話

中学校に入学したくらいかな。前にも言ったよな。ワタシのお母さん、茶道教室の先生してる。色々な人が来る。老若男女、主に女の子だけど、若い人からお年を召した人まで様々。そんな中、ワタシは時雨さんと会った。時雨さんはお母さんの茶道教室の生徒だったの。

時雨さんは前まで教えてもらった先生が他界したらしくて、しばらくの間お母さんを師事することにしたの。そのときに時雨さんと顔を合わせた。ワタシ、人見知りで人間嫌いだけど、不思議と馬が合った。いっぱい話し込んで、色々なことを語った。

三ヶ月経てば、ワタシと時雨さんは管鮑かんぼうの交わり。時雨さんはワタシより二つ年上だったけど、関係ない。そこら辺の人間よりもずっと賢くて、気高くて、今でもワタシの憧れ。

そして、七月の下旬に時雨さんは死んだ。あなたも知ってると思う。弟の氷雨さんと一緒に死んじゃった……。

そのお葬式。お母さんと齋場に行つて、喪に服してたら、あなたと出会った。あなたとは前に美作神社みまさかで何回か会ってた。勿論、あなたの妹さんにも相原君にも。

初めは少し気になる、くらいだった。けど、齋場で会って、その想いが強くなった。お葬式つて言う特異な環境だったからかな。あなたの打ちひしがれた姿が強烈に頭に残ってた。ずっと、ずっと、残ってた。そして、欲しいと思った。あなたに笑顔を取り戻してあげたいと思った。

その後のことは、その……ずっと変態みたいなことしてた。ワタシ、どういふ風に恋愛したらいいか、分からなかったから。これまでしたこともなかった。前に何度も付きまとわれたり、誘われたりした。だからかな。メチャクチャイヤだった。男の人との恋愛なんて、気持ち悪くてできなかつた。男の人なんて、嫌い。意地汚くて、

卑猥で、気色悪い。そう思ってた。

一方で知らなかった。好きな人とどう恋愛したらいいのか、全然分からなかった。私は一方的に与えられ、一方的に愛されるだけの存在。こつちから与えたり、愛したりすることはなかった。だって、嫌い。これまでの男の人は卑しくて、愚劣で、付き合いたくない。そんなことをずっと思ってたから、いざ恋愛しようと思うと、困った。ワタシ、真剣に恋愛したことないって。

何度も考えて、思い至ったの。まずあなたのことを知るべきって。お母さんに聞いたら、まずストーリーキングから始めるのが恋愛の常套手段。お母さんもそうしてお父さんと会って、お父さんをゲットしたんだって。

だから、まず、つけた。学校に行くあなたとか、スーパーに赴くあなたの跡を尾行した。ほかに、体育中にあなたのカバン漁ったり、脱いだ制服のにおい嗅いだり、こつそり合鍵作ったりしてた。後ね……前に庭の前まで行って言ったけど、ワタシ、あなたの部屋に何回か入ったことある。あなたも妹さんもいないときに。

そこでゴミ箱の中のゴミとか、レシートとか、拾ったりした。ついでに掃除もしてあげたよ。あなたって意外に整頓下手。ちゃんと元あったところに戻した方がいい。それと無くしてたらしい漫画の五巻、本棚の隅に埋もれてたよ。三ヶ月くらい前かな。早く採掘してあげて。それとシャープペンも。埃だらけだったよ。一応机の二番目の引き出しに入れておいたから。後、すっかりすり減った消しゴムも。あなたは物使いが荒い。もっと丁寧に使ってあげて。

結果、大体、あなたの部屋の見取りは気がつけば頭に入ってた。どこに何があるとか、机の中には何が入ってるとか……。

話戻すね。ゴミとかレシートとかって、その人の実生活が結構分かるんだよね。それで襖君の生活日記つけたり、ばれないよう隠し撮りした写真を日記の横に貼ったりしてた。五年分あるよ。あなたに一目ぼれしてからずっと、つけてる。毎日欠かさず、書いて、貼って、過去につけた日記見て、悦に浸ってたりした。だって、好き

だから。もう止まらなかつたから。あなたのこと好きすぎで、おかしくなりそうだから。こうでもしないと発散できない。恋心とか、せ、性欲とか……そう言うの。

同時に始めたの。自分磨き。楔君に嫌われないように、好きでいてくれるようにがんばった。料理とか家事とか。体も鍛えた。ワタシ、それなりに容姿には自信ある。体型も。けど、不安で不安で……。あなた以外の男の人に受けても、意味ない。あなたが好きになつてくれないと、本当に意味がない。だからあなたの女の好みとか、性癖とか、調べた。あの手この手。相原君にも協力してもらった。ほかの人にも、入江いりえさんにも。彼女も茶道教室の生徒。たまに会う。入江さんもあなたのこと知ってたから、貴重な情報を教えてもらった。

それで大体のあなたのパーソナリティー情報を収集して、女の自分を磨いていって、それが今年の七月に完成した。もう大丈夫だつて思った。誰がどう見ても魅力的な女だつて思った。実際、いつぱい来たよ。お茶しませんかとか、ワタシと付き合いたいとか、そう言うの。どうでもいいのにな。ワタシ、あなた以外はいつでもいい。あなたさえいればワタシは幸せ。ずっと幸せのまま暮らせる。それにほかの男の人とか、女の人とか、いらぬ。邪魔。

その論理でいくと、あなたの妹さんはワタシの恋敵になる。あなたの妹なのに、恋敵。変だよ。絶対変。根本的におかしい。まあ、あなたは魅力的で素敵な男性だから、惚れるのも分かる。あなたのこと好きつて子、結構いるから。だけど、あなたはワタシのもので、ワタシはあなたのもの。その間に不純物はいらぬ。

あなたみたいな素敵な人を独占して悪いけど、しかたがない。だってあなたと釣り合う女はワタシしかいないから。あなたを幸せにできる女はワタシしかいないから。だから、しょうがない。逆にワタシを幸せにできる男の人もあなたしかいない。あなただけがワタシを幸せにしてくれる。未永くワタシを幸福と真実の愛で満たしてくれる。そんな、ただ一人の男性。そんな人、ほかの人に渡せない。

ずっとワタシのもの。手放せるはずない。

これがワタシ。紅花襖に恋した女だよ。ワタシも変かな。あなたの妹さん以上に変かな。ちょっと独占欲が強くて、ちょっと嫉妬深くて、ちょっと変態で……。けど、あなたのこと好きなのは本当に好きで好きでいつも恋焦がれてる。こうして恋人同士になって、今、最高に幸せ。これ以上の幸福はない。好きな人と隣にいと、本当に幸せ。永遠にこうしてたい。

こういう話、知ってる？ 男女はね初恋の相手と結ばれるのが遺伝子的にも最良らしいの。それも一目惚れだとなおのこしい。それは出会った瞬間に、最高のパートナーだって体が察知する。本能的にこの人と結ばれるのが一番いい。そう出てる。科学的にも証明されてる。だから、正しい。あなたとの恋は初恋で、しかも一目惚れ。運命。まさに運命。ワタシは出会うべきしてあなたに会った。あなたも出会うべくしてワタシと会った。必然。そういう運命だったの。ワタシとあなた。

日光が雲間から漏れ出ている。

傍目からでも、僕の顔が引きつっているのが分かると思う。不知火サンの話は、いささか衝撃的過ぎた。そんな経緯、推移があったのか。身がすくむ思い。と言うか、不知火サンの行為はれっきとした犯罪なんじゃ……。

そんな思い、露知らず。

不知火サンは朴訥とした語りを終え、静かに日輪の日差しを仰いでいた。どこか満足そうに見える。そして僕の手を改めて握り締めた。

どうやら不知火サンは極端な男性嫌いだったらしかった。口吻から窺える。一方で僕を神聖視しているようでもある。

僕だけは特別。

僕だけが真実。

そういつた節が垣間見える。

不知火サンの努力も研鑽けんざんも、全て僕のため。そうして綺麗な女になれるよう腐心して、専心して、理想の自分を作り上げた。今の美しい不知火サン。それがいるのは、そうした真剣な取り組みの末の所産だったのか。

覚悟が重いなあ。

頭をかきむしる。不知火サンの話が嘘とは到底思えない。ともなれば、紛れもない真実。不知火サンの話は本当のことなのか。

「ワタシの想い、分かってくれた？ 嘘じゃないよ。本当のこと。

ワタシは本気であなことが好き。あなたと一生添い遂げたいって思ってる」

僕の思念を読み取ったのか。

不知火サンは更なる補強を推し進めた。自分の想いは一途に紅花楔と言う人間に向いてるって。一意にあなたのことが好きだって。

「一度あなたのことを想うと止まらない。ずーっとあなたのことを考えてる。恋が成就すると周りの風景が華やぐって本当かも。あなたのそばで見る景色はいつも華やいでたから。綺麗な桜色。幸福感。恋っていいね。いーっぱい幸せ。あなたに恋してよかった」

身を摺り寄せて、ぴったりと体を引っ付ける。ぎゅーっと僕の上腕に腕を絡めて、僕の肩に頬擦りした。生地の薄い夏服だから、しっとりとした肌の感触が艶かしい。不知火サンのほっぺ、柔らかすぎ。

表裏をなして、怖気。不知火サンの想いは普通の恋愛感情と比べても、ちょーっとだけ強かったりして。少し、わずかに、少々、いや、おおいに、行き過ぎてるような……。

少なくとも高校生でこれほど思いつめることのできる人はめったにいないんじゃないかな。

果報者、と言うことにする。

綺麗な女の人に見初められて、多分、僕は果報者だ。世紀稀に見

る幸せ者なのだ。

そう言うことにする。

「不知火サン」

「なに？」

「君のこと、名前で呼んでいい？」

不知火サンは驚いた様子だった。あわあわと目に見えて慌てている。落ち着きがない。

僕が突拍子もないことを言ったからか。

それとも。

「……いいよ。呼んで」

「彼方」

「もつと」

「彼方」

「もつと」

「彼方」

「好き」

首に手を回して、唇を合わせる彼方。それは貪欲な接吻ではなく、小鳥がついばむような優しい接吻だった。

けれど。

我慢できなかつたのか。

「……ん」

彼方は方針を転換して、意地汚く舌を入れてきた。唾液がこぼれるのにもお構いなし。僕のズボンや彼方のシャツに水滴が落ちる。

気にする様子もない。

仕方ないから、控えめに絡めてみる。彼方はすごく嬉しそうに笑って、僕の口腔に潜水してきた。

くちゆくちゆと淫らかな音。ねつとりと吸い付くような接吻。付き合ったばかりの恋人同士がするには、あまりに淫猥で姦濫<sup>かんらん</sup>。幼い子供に悪影響を与えるような愚挙、愚行。

雰囲気なんかメチャクチャで、ここは学校なのにこんなことして、

僕たちはなんなのか。

「ねえ」

甘えるような声。

「今日、ワタシの家に来て。夏休みの課題、配られたよね。一緒に勉強しよ」

どうせ勉強だけじゃないんだろうなあ、とおぼろげな意識の中で思う。

一線を越えてしまった。

そつも思つ。

「あら、いらつしやい」

ドアを開けた先には彼方のお母さんがいた。玄関に生けてある花の手入れをしていたところなのだろうか。

「ただいま」

「おじゃまします」

「仲睦まじいわねえ。手え繋いじゃつて」

口元を緩ませる。桜<sup>さくら</sup>サンは花瓶の水を取り替えながら、ふふふと手を当てて笑った。

あたふたと慌てるのは僕だけ。彼方は平然と自分の母親を、そして僕を見ている。何がおかしいの。そんな表情。むしろ、さらに強く手を握って意思表示をした。

「彼方……」

「文句、言わない。前から楔君とこうしたかったの」

「あら、ついに名前呼び合う関係になったのね。彼方も楔君を

見る目が変態っぽくていい感じよ。もつと変態アピールしなさい」  
「分かった」

「分かった、じゃないだろ。さつきからずっと手を握り合ってたから、手が痛くて痛くて……。どれくらい握力が強いんだか」

「もつと舐めるように、舐めずるように、相手を見るのよ。相手が赤面するくらいに……。私もそれでお父さんをゲットしたわ。今でもそれすると、相手の方からキスしてくれるわよ」

「……お得情報。メモしなきゃ」

「しなくていいから。桜サンも実の娘を唆さないでください」

「その気になるから？」

「なりません」

「娘の方がその気になると思うわ。私の血筋は代々性欲強いから」  
小悪魔のように笑う。妖美な艶姿。確かに桜サンの家系の女性はすべからく綺麗な容姿をしている。男をたやすく耽溺するような色香を持ち合わせているのだ。

一方で桜サンを射止めたと言うお父さんの顔も見てみたい。その人はきつと、危機管理能力が希薄な人だと思う。

解語の花、かいてと言えば聞こえはいいように思う。器量もよくて家事も得意そうだ。

けれど。

花は花でも、人を惑乱させる妖花のほうなのでは。

彼方の方を向く。目が合うとこくこくと頷いて、頬を赤く染めた。

「ほら」

「ほら、じゃないでしょう。僕の前でそんなことを言わないでください」

正論を申し立ててもなんのその。柳のようにかわされる。桜サンは紛れもない悪女だった。

「けど楔君だって、彼女が淫乱な方がいいでしょう？ その点、彼方はほどよく淫乱、あなたの望むことなら何でもするわ」

「……何でもする。楔君が望むなら」

そつと僕を盗み見て、もじもじと体をゆする。しばらくの間視線を下げて、時折僕に視線を投じて、また視線を下げる。花も恥らう乙女。売れた林檎のように顔を赤くして、そわそわと落ち着かない。庇護欲に駆られる姿態だった。

「あのねえ」

呆れる。親子揃ってメチャクチャだった。

彼方は僕の手を引いて、すいすいと階段を上がっていく。それでも一向に手を離すことはしない。その姿を微笑ましげに見る桜サン。「ごめん。お母さん、ワタシに恋人ができて喜んでるの。ワタシ、一回も恋人作ったことないから」

「そつか。けど、何でそんなに男を毛嫌いするの?」

「ちっちゃい頃、男の子にいじめられてた。ひどいことされて、今でもトラウマ」

さらつと言うが、その表情は硬い。

そのそつけなさにかえつてことの重大さを感じる。身勝手な義憤、自分勝手な罪悪感に駆られる。

怒ったところで不知火彼方の過去が変わるわけではない。辛い心の傷が癒されるわけでもない。

同情したところでどうにもならない。憐憫は何の力にもならない。人生は行動だ。

ちゃんと彼方のために行動して、その傷をゆっくりでもいいから癒してあげるべきだ。彼方が辛くなったら、いつでも駆けつけて上げれるようにすべきなのだ。

過去は覆らない。けれど少なくとも、かさぶたで覆ってやることはできる。未熟な僕にはそれしかできない。もっともらしい上塗り。それしかできない。

僕は彼方の手を強く握り返すことしかできなかった。

## 第三十話

彼方の部屋はやはり殺風景だった。僕の自室とさほど変わらない。必要最低限のものしか置いてなかった。

「どうしたの？」と棒立ちになる僕を見咎めたのか、そう問いかける。

「いや、女の子の部屋にしてはものが少ないなって、失礼にもそう思った」

「クマのぬいぐるみとか置いてほしかった？」

クマのぬいぐるみの置かれた彼方の部屋を想像してみる。

「……どうだろ」

「似合わない？」

「あんまり」

「でしょ」と彼方はカーテンを広げ、窓を開けた。おもむろにカーペットの敷かれた床に腰掛ける。「だから、置いてない。それに、嫌い。人形とか、好きじゃない」

「そっか」

「ワタシって淡泊な女？」

「いいよ。僕の部屋の方がもっと淡泊。すごく味気ないから」

「知ってる」

「……」

「楔君の部屋って本当に何も無い。部屋は個人の心象風景って言うらしいよ。ワタシたちって似たもの同士だね」

「……かもね」

ため息をついて壁に背を預ける。彼方は手招きをして、隣をポンと叩く。そこに座れ、と言うことか。

真っ白い壁に囲まれた空間。机や椅子。隅にいくつか本棚が設けられている。少女漫画は当然としても、料理本や学術書。次いで、拳銃や日本刀の図鑑など、種類は多岐に及ぶ。特にファッション雑

誌の横に、『世界の拷問選集』が並べてあるあたり、面妖としたものを感ずる。

個々の部屋は個々の心象風景、と言う彼方の言説。その通りなら、彼方の深層心理は魑魅魍魎ちみもつりょうの巢なのか。あるいは、奇々怪々たる迷宮なのか。

丸テーブルを迂回して彼方の隣に腰を下ろす。窓から漏れる西日が彼方の面容を薄く照らした。

「記念写真撮ろうね」といつの間にか右手に携帯電話。僕のほうに体を寄せる。

「記念写真？」

「楔君がワタシの部屋に来たことを記念して。……変？」

そういう間にも、彼方はシャッターを切った。フラッシュが焚かれ、一条の閃光。まばゆい。思わず手をかざす。

「……どういう記念？」と疑問を呈するけど、それよりも僕は密着してる彼方の体の方に神経が向かう。寒くもないのに鳥肌が立つてる。「それに僕、前にも来たよ」

彼方は納得した風に頷く。爾後顔を朱に染めた。「あの時は高ぶってて、そんな余裕なかった。舞い上がってて気が回らなかった」

「さいですか……」

「楔君が帰っても、写真があつたら寂しくない。前にカセットテープで声を録音したけど、聴覚だけじゃ満足できない。視覚も潤さないと。後は嗅覚、触覚、味覚だけ……。今着てる服を頂戴って言ったら、楔君でもさすがに引くでしょ」

「……誰でも引くと思うよ」

「一応予備の服はないこともないから、それを着れば帰途につくことはできる。……貰っていい？」

彼方が当たり前のように聞くものだから、一瞬戸惑う。

段々と目が潤んできている。スイッチが入ったのか。彼方は妖しい視線を僕に投じる。

強烈な目の重圧に耐え切れなくなりそうになった僕は、「ぼ、僕

の服を貰ってどうするの?」と聞いてはならぬ質問をした。

「抱き枕にする」

「は?」

「抱き枕に被せて、添い寝する。寝る前にクンクンして、楔君のにおいを嗅いで、悦に浸る」と至極まじめな表情。「これで嗅覚はばつちり」

彼方はピースをした。

ばつちりじゃない、と思うが、看過。不知火彼方とはこう言う人なのだと再認識する僕。

「お、男冥利に尽きる……みたいな。は、はは」

笑ってごまかすが、笑ってごまかせないような内容だった。無邪気と言うか、幼いと言うか。彼方の発想に邪気はない。が、反面、病的に映る。一般人の感性からずれているようにも思う。

「後は触覚と味覚。どっちも難しそう。どうしたらいいかな」

「どうにもしなくていいよ。実際に君の前には僕がいるだろ。そんなこと考えなくていいと思う。……と言うより、そんなことを平気で実行しそうな君が怖い」

それも一部、実行してる。

「それもそう」と心機一転と言った様子。「生の楔君を楽しめばいいね」

数歩後退するも、その分だけ近づく。縮まらない距離。彼方は四つん這いになって、僕に接近してきた。

「何で逃げるの」

「身の危険を感じてね。僕の本能が囁くんだ。ここから非難しろって、ここは危険だって」

「ここは世界で一番の安全地帯だよ。後、あなたとワタシの愛の巣でもある」

後ろに方向転換しようともくろむも、彼女によって阻止される。背骨を打った僕の目と鼻の先に、彼方の整った面貌があった。

両手は塞がれている。拘束状態。逃げることも叶わず、抗うこと

も叶わず。俎上の魚。料理寸前の鯛。

「巢作り、しよ」とふいに微笑んで、「それと、子作りも」と大胆とか、常識知らずとか、そういったものを度外視して、彼女は言い切った。

抵抗実らず、さながら蠮螋の斧。すぐに鎮圧されて、それでおしまい。抵抗する気も失せ、いつそ彼女を抱きしめようか、と思う。引いてダメなら押してみな。そう決めて、彼方の腰に手を回す。ぎゅっとした。その後、彼方の頭をよよしとなる。

猫のように唸る。彼方の幸せそうな表情を見ると、つくづく不肖な僕には釣り合わない佳人だと思う。どうして僕みたいな奴を好きになったのか。ほかにもいい男なんぞ山ほどいる。

しかし。

そういった思考を阻害するほど、彼方の体つきはエロかった。

なんだかんだでにやんにやんする僕たち。

今更ながら、彼方のご両親や没した僕の両親に申し訳ないと思っ

夕食をご馳走になった僕はソファに座ってテレビを見ていた。自宅で見るのは何てことないのに、他人の家で見ると変な感じがする。周囲の環境が違うからか。それとも隣に彼方がいるからか。桜サンは皿洗いをしている。手伝おうと奮起するも、当の本人にやんわりと断られ、「楔君は娘とテレビでも見ていて頂戴」と言われたのだった。

せっかく夕餉の善を頂いて、その後始末までやらせるなんて、僕

の良心が許さない。

そう思ったが、服の裾をちよんちよんと引つ張る彼方に促され、今に至る。僕の良心なんて、薄っぺらい。

時刻は八時を回った頃だった。テレビ画面には向かい合う男女が映ってる。察するにドラマ。ぼーっと画面を流し見る僕。

できればこのまま帰宅したかったのだけど、桜サンに宿泊を勧められ、受諾した。彼方の懇々とした説諭にやられたのだった。

押しに弱い。

それが僕の致命的な弱点だった。相原にもよく指摘される。おまえは回りに流されやすい、と。

その通りだと思った。現にそうなってる。改善できそうもなかった。

と。

「……ん」

画面に映る男女が唇と唇とをくつつけた。互いの体に密着し、腰に手を回している。

瞬時に意識が覚醒して、目を画面から逸らす。思春期の少年らしい過敏で多感な反応。そーっと彼方の方を盗み見た。

目が合う。

「する？」

唇に人差し指を当てて、僕を熟視する彼方。するすると手を蛇のように伸ばして僕の肩を掴んだ。

後ろを一瞥する。

桜サンとも目が合う。相変わらずひまわりのようにニコニコと笑って、僕に目配せをした。何かの合図のようでもあった。

「お母さんはこういうのに理解あるから、気にしなくていいよ」

「だからねえ。君は」と僕は彼方の肩を掴んだ。最近の彼女はトリップの回数が多い。女性なのにやたらめったら積極的だ。もう少しおしとやかにしてもらわないと、僕の身がもたないよ。

と。

なにを勘違いしたのか、彼女は顎を上げ、唇を前に突き上げた。

「……焦らしプレイ？」

「焦らしでもないし、する気もないよ」

「小悪魔な楔君も素敵」

小悪魔と言っ発想はなかった。

「ふ、ふふふ。お二人ともお楽しみのところ悪いけど、お風呂掃除してくれないかしら」

「はっ、はい。僕がします」

渡りに船と思い、ソファから飛び上がる。僕はどこに風呂場があるのかも分からず、闇雲にこの場から遁走した。あの子は自分の母親のいる前であんな行為をするつもりだったのか。

安堵の息を漏らす。そんなこと恥ずかしくてできないし、桜サンにも立つ瀬がない。すでに何回か事に及んではいるのだけど。

少なくとも汲々として接吻やその他諸々をするわけにはいかない。僕たちはまだ、付き合って一ヶ月も経ってないんだから。しかるべき順序を踏んで、ゆっくりと大人の階段を上っていくんだと。

「続きはお風呂で？」

後ろから彼方の声が聞こえる。

不知火家のお風呂は檜造りひのぞりだった。

湯の張られた浴槽には湯気が立っている。二十分ほど前に彼方が沸かしてくれたお風呂だ。

他人の家のお風呂に入るのは初めてだった。僕は友達が極端にいない。交友関係も狭く、友達どころか、男友達もままならないのだ。

携帯電話として例外ではない。名簿に登録されている人数は恐ろしく少ない。十人もいないように思う。

あまり人といるのが好きじゃないからか。

一人でいることが好きだからか。

湯気の消え残る浴室の中で、つれづれにそんなことを思った。

脱俗的な生き方はどこに端を発するのか。人付き合いを避けるようになったのはいつの頃だったか。

湯の入った桶で身を清める。体に熱がこもって、気分がすっきりした。

沐浴の源流は神道の風習たる楔にあると言う。楔が楔をする。不思議な縁を感じて、妙な気持ちになった。

縁と言えば、こいつか。

揺れた髪の一房を掴み取る。まさか彼方が時雨サンと交流があったなんて、夢にも思わなかった。と言うことは、僕が髪を染めた理由もなんとなく見当がついているのかな。よく分からないけど。

顔を上げると、ガラスには僕が映っていた。靄がかつた視界。湯気の立ち込める浴室に一人の男がいる。

そいつは髪を銀に染めて、随分と貧相な面をした男だった。意志は薄弱で、人付き合いも苦手。超然としているように見えて、その実不器用。体つきも華奢だ。

ため息をついて浴槽に浸かる。全身を熱い湯に包まれて、血流が活性化するのを感じた。

もうそろそろだろう。

不知火家の方々は親切にも一番風呂を僕に譲ってくれた。おもてなしの心、と言うべきか。肅々と辞退するつもりだったけれど、お言葉に甘えて一番風呂を頂くことにした。

ゆえに長風呂は厳禁。ここは自重して、さっさと湯船から上がった方がいい。僕は数分もせぬまま、下肢にタオルを巻き、湯浴みを済ませた。

と。

ガラガラと扉をスライドさせたその先に、彼方がいた。

彼方は僕の制服を鼻の辺りに当てていた。鼻を膨らませてにおい

を嗅いでいる。先述で言う、嗅覚の補完か。

「か、彼方？」

「……楔君」

僕の出現にも構わず、制服のシャツを鼻にあてがう。わき目もふらず至福に耽っている彼方。時折僕のシャツを抱きしめて、小さく喘いだ。

「何してるの？」

「におい嗅いでる。すーはーすーはー」

見れば分かる。

「聞いているのはホワイの方だよ」

「なぜってこと？」

「そういうこと」

「本来ならあなたの背中を流すつもりだったけど、そんなことしたら嫌われそうだから自粛した。けど、そうなたらで収まりがつかない。だから、楔君の服のにおいを嗅いで、発散しようと思った」  
再び作業に没頭する彼方。夢見心地と言った風に瞳孔を広げ、尋常でない雰囲気を漂わせていた。トランス状態。その様子は麻薬を吸うジャンキーのようにも見える。

押し込みの代わり、と言うにはあまりに変態チックだった。それはそれで問題があるような。

僕の困惑顔に気付いたのか。

彼方は吸引を一旦止めて、僕に言った。

「あなたの服は籠の中に入ってるよ」と。

籠のほうを指差す。確かに籠の中には男用と思われる着流し着物、下着類が納まっていた。どことなく旅館を思わせる。

「……お父さんの？」

にしては随分と小さい。

「買っておいた。あなたのサイズに合わせてあるから」

「……………」

「着物のサイズはMでよかった？ 一応SとLもある。楔君は痩せてるからぶかぶかになるかも」

「……よ、用意がいいんだね」

「彼女のたしなみ」

確かに寝巻きを用意してくれるのはありがたいけど、違和感が残る。彼方はどうやって僕の体型を知ったのか。

懐疑心のあまり凝然と見詰めていると、彼方は顔をゆでだこのようにした。さすがに気恥ずかしくなったのか、僕のシャツを洗濯機の中に放りこむ。どうやら親切にも洗ってくれるらしかった。

「楔君も……嗅ぎたい？」

ふいに服を脱ぐ。彼方はシャツのボタンを一つずつはずしていつて、僕に手渡した。

わけも分からず呆然としていると、「いいよ。嗅いで」と小声で言う。

上半身のみ下着姿と言う倒錯した格好。露出したへそや肩があられもない。新雪のような肌は、ピンク色に熱を帯びていた。

僕は震える手で彼方の制服を見やった。

これを。

これを鼻に当てると。

それも本人の同意つきで。

僕は無心の境地でそれを洗濯機の中に入れた。欲望に打ち勝った瞬間だった。自分で自分を褒めてやりたい。

「だったら下も……」

と。

スカートに手をかけた彼方の横を、なんかもう色々なものをかながら捨てて疾走。彼方が無防備すぎて逆に怖い。

彼方。それは違う。絶対に正しい男女のあり方じゃないでしょうが。

結局のところ、意気地のない僕はもっともらしい正論をかざして旗を巻いたのだった。

撤退する姿を桜サンに見られた僕は、ふと、タオルを巻いているだけで服を着ていないことに気付いた。

### 第三十一話

脱衣所に戻って彼方の用意してくれた服を着た僕は、不知火家のリビングにいた。

リビングでは桜サンが林檎の皮をむいていた。小気味よい鼻歌を歌って、巧みに果皮かひをはいでいる。

僕はそれを眺めている。桜サンは近所で茶道教室の先生をやっている、時折教え子から果物や菓子を買ったりするらしい。折も折でとある教え子から一通り、果物やら和菓子やらを頂戴したらしかった。

一重に桜サンの人徳か。この様子だと頂戴物を相当に貰い受けているのだろう。

僕は桜サンの勧めで、恐れ多くもそれらを賞味することとなった。「やっぱり入江さんの家の果物は瑞々しいわねえ」

「浴衣ちゃんから貰ったんですか？」と林檎を食い切りながら、そんなことを問う。

「あら、ご存知？ 彼女、毎月のようにしんもつご進物を下さるのよ。だから、うちの厨やぐらは付け届けで一杯なの」

「そうなんですか……」

林檎を食みながら相槌を打つ。口の中で甘みのある果汁が広がった。

と。

「でも、感心しないわねえ。あなたには彼方って言う恋仲がいるのに、ほかの女の子と交流があるなんて」

桜サンは藪から棒に蛇を呼び出した。

スルスルと林檎に刃を入れる。シャリシャリ。その音だけが静まり返った室内に響いた。

「私だつたらねえ、あなたを半殺しにしてるわあ。前にもあったのよねえ。旦那がふいに女の子の名前を出してねえ、そのときの私は

無言で彼に逆十字固めをかましたわあ。楔君も娘にそうされたくないかったら、娘以外の女の子の交流を絶つことね。自分の命に関わることだから」

「そう言うんじゃないんです」となぜか言い訳がましい僕。「浴衣ちゃんは妹の友達ですから」

「けどねえ、娘は私に似てちょーっとだけ嫉妬深いからねえ、以後付き合いは控えた方がいいわ」

「……おっしゃる通りで」

別に入江浴衣とはそれほど付き合いが深いわけではない。けれど、桜サンの言説どおり今後は自粛した方がいいように思えた。

興味はない。今になって、彼方以外の女性にそういった感情、抱けない。

その中には妹も含まれている。当然と言うか当たり前と言っか、妹にそれに類する感情を抱いたことはなかった。

一方で妹のことは死ぬほど好きだ。我が身を賭しても守ってやりたい。葵は僕の大切な家族で、僕に残された最後の家族なのだ。

兄が守ってやらないでどうする。

周りにシスコンと罵られようが、疎んじられようが、その信念だけは変わらない。曲げたくもないし、曲げるつもりもない。

そうした決意が、葵を甘やかしているのか。

葵を徹底的に突き放せないのも、それに起因するのもかもしれない。どこかで立ち止まっているのだ。一旦葵から離れても、しばらくは立ち止まっている。葵が追いつけるよう、待っているのだ。

これだから愛はややこしい。真剣な想いでも、屈折したり、歪んだりする。僕は葵を愛しているけど、葵は葵で異質な想いを抱えているのだ。それが家族ゆえの愛ではなく、異性ゆえの愛であることに、葵は気付いているのか。

「……すみません。これからは彼方サン以外の女性とは会わないようにします。すみません」

「そう言うわけじゃないわ。それは学生のあなたには到底無理でし

よう？　ただ娘の前で他の女の子の名前を出すと、あなたも逆十字固めを受けることになるってだけの話。これは注意と言うよりも、忠告ね。彼方、よっぽどあなたに思いつめてるから」

「こんな馬の骨ですみません。精進します」

「いいのよ、いいのよ。私から見てもあなたは好青年よ。優しそうだし、暴力をふるいそうにもないし、それに……どことなく雰囲気  
が常人離れているところも素敵だわ。この男、なまかならぬ、  
って感じよ」

「過大評価ですよ」

「過小評価よ。これまでに会ったことのない人種ね。彼方が夢中になるのも分かる。だってあなた、目がいいもの」

「目、ですか」

「そうよ。意志の強そうな目。それでいて、囚われない。価値観とか善悪とか、そんなのどうでもいいって思ってる目だわ」

それは相原にも言われたことがある。

おまえはいかにも貧弱そうで、事実貧弱だが、胸の内にはまっすぐ伸びた一本の刀を持つてる奴だ、と。

相原は相原で切れないものはない刀を帯びている奴だった。あいつの佩はく刀はどんな障害でも、快刀乱麻かいとうらんまを断つごとくキレているのだ。

「僕はやりたいうようにするだけです。それがたまたま他人の価値観とかそれっぽい善悪に接触するだけで、正当性とか整合性とか特に気にしたことはないです。理論とか理由とか、それこそどうでもいい。また、生意気だと不肖ながら思うんですが、自分の行動に迷ったこともない。何をしたらいいのかわからないってことは、裏を返せばなんでもできる、と言うこと。知るって事は変わるってことで、迷うってことはただの浪費です。まあ、無駄に人生を浪費することも結構楽しいですから、しちゃいけないとは思いません。楽ですし、それにみんなが思ってるほど悪いことでもないですし」

「それはいいわねえ。貴重なご教授、痛み入るわ。なるほどねえ。」

改めてみれば昨今の若者は一定の価値観に凝り固まった愚図が多いわねえ。その中の一握りくらい、あなたみたいな柔軟な若者がいたほうがいいわ」

「けど、彼方さんは僕にはもつたいない人です。僕なんかでいいんでしょうか」

「いいんじゃない。それは当人が決めること。娘がよければそれでいいのよ。それよりも私は、早く孫の顔が見たいわ」

「すぐ見れる」  
と。

着流し姿の彼方が僕の横に立っていた。いつの間にか、僕の食べかけの林檎をひよいと摘んで、うまそうに口に運んでいる。

「あつ、それ、僕の……」

彼方は僕の言葉を無視して、食い入るように僕を見詰めた。風呂上りだから頬は上気している。肌も桜色をしていて、女の色香が漂っていた。

「けど、意外。襦君、そんなこと思ってくれてたんだ……。大丈夫だよ。あなたこそ、ワタシにはもつたいない。気後れしないで、ワタシと愛し合えばいいんだよ」

どうやら桜サンとの会話を聞かれていたらしかった。

気恥ずかしいような困ったような、そんな気分になる。こういう経験はこれまでにしたことはない。少なくとも、妹以外の女性とこうして顔を向かい合わせたことはなかった。

「うふふ。襦君は娘の部屋で泊まりなさい。ほかに空いてる部屋はないものね。ふ、ふふ」

瞳目。桜サンの提案はあまりにも短兵急だった。いや、薄々予想はしてたけどね。けど、僕は男で彼方は女。それも思春期真っ只中の二人だ。それを十把一絡げじっぼひとからに一つの部屋に押し込むのは……。

「それはその、まずいんじゃない……」  
「まずくない」

と。

きつぱり断言する彼方。顔つきは神妙としているのに、目には炯々<sup>けい</sup>と異様な光がともっている。

「全然まずくない。むしろうえるかむ」

拙い英語はなんのその。精神の蝶番<sup>ちようつがい</sup>が外れた彼方は、引き摺るように僕を私室へ連行した。

時刻は深更。

部屋の扉を開けた先には、一組の蒲団がすでに引いてあった。

「ここでワタシたちがまぐわるんだよ」と。

彼方はポンポンと蒲団を手で叩いた。

帳の下りた夜更けのことだ。どことなく虫の鳴き声が聞こえる。

開け放たれた窓からは雄渾たる山容が窺えた。

僕は彼方と距離を置いて体育座りをしていた。時計を盗み見れば十時を過ぎた頃だった。

「……聞いている？」

彼方は四つんばいになって僕のほうに視線をやった。融<sup>いたち</sup>が雌伏するよつな体勢。重ねられた襟から胸元が見えて、視線に困る。

「彼方。ちよつといいかい」

「なに」

「蒲団が一つしかないんだけど、僕の寝る場所は？」

彼方は眉をひそめた。いぶかしげに僕を見る。

その後。

卒然として掛け布団を僕に放った。僕は羽毛布団に押し潰され、倒れこんでしまう。

その上から彼方がのしかかってくる。足と足がこすれ合う。双方とも着流し姿だから、着物がはだけ、肌と肌とが不用意に触れ合った。

「一個で十分。二人一緒に寝る。いい？」

「いいって言われても……」

踏ん切りがつかない僕だった。これだからみなに小心者だの、へたれだのと酷評されるのか。その評定に間違いはないと思うけど。

「ワタシ、寝たい。楔君と……寝たい」

「寝たいって……君はねえ」とは言うが、彼方の目は本気だった。押し黙る。

彼方の手が僕の胸板に触れる。やがて押さえが利かなくなったのか、襟を掴み肌を露出させた。改めて鎖骨の辺りを手でさする。

無言で僕に抱きついてくる彼方。首筋から甘い香りがして、くらくらする。

僕は腹筋の要領で上体を起こした。彼方は僕の首に手を回して、胸に顔をうずめた。時々猫のように僕の肌を吸う。

これはダメだ。

猛烈にそう思った。この雰囲気はマズイ。なんかもう、大人の階段を一気に駆け上がってしまったようだ。

「なっ、何して遊ぼうか？ まだ時間もあるし、と、トランプとか将棋とか……。彼方は何したい？」

「セックス」

「……へえ。そう、なんだ」

「何度も言わせないで」

「うん……」

静寂。僕の心音と彼女の鼻息以外に音はない。

月明かりが差し込んできた。

電気はさつき彼方が消した。だから、月光だけが光源だった。

うつすらと月の光に照らされた体が見えた。

大きくなっていく鼻息。うーっつと獣のような彷徨。艶めいた肌の感触。

爛れるような熱気が近くから伝わってくる。甘くも毒々しい、毒林檎のような気配。ぴちゃりと水音のような濡れた音がして、それ

はすぐにくちゆくちゆと粘性のある音へと変わっていった。  
と。

駆け出す。

逃げ出す。

走り出す。

本能が。

本能が。

ぐちゃぐちゃに。

「みそぎいいいいいいいい」

笑えるくらいに間延びした声が出たと思つたら、着物の襟を荒々しく掴まれていた。ダンと僕の首が床に打ちつけられる。後頭部に鈍い痛み。尋常でない力、じょうじょうく膂力。

一度僕を打ちつけた彼方は、何度も何度も何度も僕を打ちつけた。ぼたぼたと唾液がこぼれる。床や僕の着物に雫が垂れる。それに気づいてないのか、はあはあと獣のような息を漏らすだけ。

もう一度、駄目押しのように叩きつけられる。先刻のよりも重い一撃。一瞬、視界が白くかすんだ。その後、僕の頬を強くひっぱたいた。じーんと糜爛びらんした熱がうごめく。

「いつ、いだ。いだいい」

頬に衝撃。殴られたのか。そう思う前に更なる衝撃、痛覚。振り上げられる腕。陥没する肌。

「なんでっ、イヤイヤっ、するっ、のお。あっ、あなたはっ、わっ、ワタシのっ、言うとおりにっ、すっ、すればっ、いいっ!」

「か、なた」

「うっうっうっうっうっ!」

涎が僕の顔に落ちてくる。腫れた目で前を見る。彼方の顔。歪んだ彼方の顔。美しい彼方の顔。

それが。

それが近づいてくる。

ゆっくりと。



## 第三十二話

淫らに隆起する喉。彼女の喉は唾を飲み込んだからか、ごくんと獲物を丸呑みする蛇みたいに膨らんだ。  
と。

口の中。不純物が混ざった感覚。歯や歯茎を事細かになぞっていき、唾液を抽出する。舌と舌を絡ませ、ごきゅと淫靡な音が残響した。それは僕の唾を飲み込む音だった。

煮えたぎるような火照った体が押し付けられる。熱っぽい肌、汗。蒲団に絡みついたり、相手の肌に絡みついたりして、おかしな快感にさらわれる。僕の脳髄は異常に高ぶる興奮を察知した。

「ワタシ、ワタシ、ワタシ……ワタシい！」

狂ったように僕の口を吸う彼方。目に光はなく、淀み、腐り、濁っている。黒々とした空洞。中身のない空虚な瞳が僕を捕らえるだけだった。

「あわわわわわ」

「こわくない、こわくない」

「うう……うう」

「こわくないって言ってるでしょおお。ほおら、こわくないよお」  
震える体を彼女は抱きしめた。彼女の豹変ぶりに、僕の体は拒否反応を起こしていた。女の肌を拒絶していた。

けれど。

けれど、けれど、けれど。

「もう、ダメ。我慢できない。できない。できない。できない。結構がんばった。辛抱した。必死に耐えた。根気よく忍耐した。生唾飲んで堪えた。けど、もう限界。したい。猛烈にしたい。あなたとセックスしたい。したい、したい、したい！するよ。あなたの体、犯すよ。犯すよ、犯すよ。犯すよ」

ねぶる。激しく、やらしく、毒々しくねぶっていく。欲情するウ



喘いで。

息ができなくなる。氣息奄々。きそくえんえん せえせえと呼吸が苦しくなる。僕は呻吟して、どうしようもなく、彼女を見た。

彼女は狂ったように僕の服を脱がせていった。舌を這わせ、唾液をまぶし、マーキングしていった。これは自分のものだ。自分の所有物なのだと焼き印を押しているようだった。そう見えた。

ああ。

狂っていく。

僕が。

彼女が。

狂っていく。

朝光が眩しい。

鉛が埋め込まれたように体が重い。寒い。体の芯から寒い。

蒲団から起き上がった。

半裸だった。着流しは剥ぎ取られ、下着はあたりに散乱し、掛け布団は乱れている。肌には何かか吸い付いた跡。汗臭くて女のおいがする。きつくて強烈な、牝の色香。

隣にはすやすやと眠る少女がいた。天使のような神々しさ。服を身に纏っておらず、純真な裸体は光に反射して淡く光っている。肩から胸のラインが艶かしくて直視できない。癖のない髪はさらさらと蒲団の上に広がっていた。

下着を回収して、衣類を整える。服装は一通りましになった。

一転して、記憶がなかった。なぜこうなったのか。どうして僕と彼方は裸なのか。

も。

もしかして……。

僕は甘酸っぱい妄想をした。ついに、ついに、僕と彼方は……。

と。

違う。

それは違う。

確かにそうだがそれは違う。

行為に至るまでの経緯、それが根本から間違っている。

あの時。

僕は。

「うっうううう、えっぐ」

僕は片膝をついて口に手を当てた。吐き気がした。同時に全身が熱く火照っていった。その時を思い出したのか、口の中がからからに渴き、肌が女の熱を欲し、頭が性欲一色となった。

のこぎりで金属を切り裂くような不快感。ぬめりのある水音。温かい弾力。想像を絶する快樂。溺れていく。

深く溺れていく。

「僕は」

まぐわったのか。

おぼろげな意識がその可能性を知覚。すぐさま焼却炉に放り込んだ。そんなはずない。そう思った。

そんな、彼方がそんなことを……無口で感情を表に出さない彼女がそんなことを……。

ふと、ものすごい欲求に囚われた。

机。

彼方の机。

いたって無機質な木製の机。

手を伸ばす。そーっとそーっと手を伸ばす。

一段目の引き出し。指を引っ掛け開けてみる。

と。

写真。

いくつもの写真。何百枚もの写真。僕の映った写真。それが引き出し一杯に入っていた。

ほかにもなくしたと思っていた鉛筆やハンカチ、歯磨き。なぜか噛まれた跡がある。湿気て液体をまぶしたようにも見える。

そして僕の家の鍵そっくりの鍵……合鍵？ 誰の家の？

頭が痛い。物理的に痛い。そう言えば殴られたのか、僕。それも結構、めった打ち。後頭部のあたりも痛いし、腹の辺りも痛い。ぎゅるるーとお腹が鳴った。

昨日までのどたばたが嘘のようだった。この家に入ってから、巡るましく何かが変わった。昨夜の彼方の狂態もだ。あれは狂ってた。おかしかった。平生の不知火彼方ではなかった。

帰ろう。

とにかく帰ろう。

後日改めて尋ねるのだ。どうして僕を襲ったのか。告白を受けた当時は僕を襲ったり、無理やりしないって言ったよね。僕のことを尊重してくれるって、そう言ったよね。

桜サンに一言入れて、帰宅。その流れがいい。今の彼方は気が立ってるんだ。冷却期間。しばらくは会わないほうがいいかもしれない。

方向転換。僕は彼方の自室から退出しようとした。

しようとした。

できなかつた。

「がは」

足首を捕まれ、頭から転倒。手をついたので顔面強打とはならなかつたが、フローリングで打った掌が痛い。

「帰らないで」

彼方の声。切なく喘ぐ彼方の声。

首を回して顔だけで振り返る。泣きはらしたような彼方の顔。うるうる水気を含んだ瞳が物悲しそうに僕を見据えた。

「ワタシが悪かったから。ワタシ、あんなつもりはなくて……。あなたの前では禁欲して、克己するつもりだった。本能に任せちゃダメだって、何度も誓った。けど、その……。食い気が理性に勝つ

ちゃって……。気がついたら……。あなたをメチャクチャにしていた。あなたの想い、踏みじつて、好き勝手に蹂躪してた……」

彼方の指が僕の足首に吸い付く。汗ばんだ掌。彼方の息は荒い。「ワタシ、あなたのことが好きすぎておかしくなっちゃった。もうこんなことしない。絶対しない。誓う。だから、ワタシから離れないですよ」

がっちりと僕の足を掴んだ彼方。懇願するように、許しを請うように、僕の足にしがみつく。頬を足にこすり付けて、僕から離れない。

「離れちゃイヤ、逃げちゃイヤ、捨てちゃイヤ、嫌いになっちゃイヤ、そんなのイヤ。ずっとワタシのそばにいて。なんでもするから。あなたの言うとおりにするから。至らないところがあれば直すから。好きにいいから。だからワタシのこと嫌いになつたらイヤだよ」  
雪のように白い髪が無造作に揺れる。取り乱した前髪の隙間からは粘性のある視線。べったりとこびり付くような視線。そして、何かを恐れるような視線。

何を恐れているのか。

何を恐怖しているのか。

糸を手繰るように、彼方は這いずる。力ない動作で僕に近づいてくる。蜘蛛のような動き。獲物を捕食し遺憾なく食らってしまうような、そんな貪婪さ。口元からは唾液が漏れ、皮膚はほのかに桜色。それは彼女が誰かに欲情していることを示す前触れでもあった。

「ごめんね。次は痛くしないから。気持ちよくしてあげるから。だから逃げないで。今日もしよ。今日は土曜日。いっぱいできる。大丈夫。もう安心。心配いらぬ。なんでもする。楔君の自由にしていい。好きにいい。だから、しよ」

彼方は僕の首に手を絡め、口吸いをした。激情がほとばしるような接吻。苛烈で手荒で全体重をかけるような接吻。僕の口蓋に唾液を落として飲ませ、次いで僕の唾液を執拗に吸った。猛々しい。まるで猛獣のようだった。

「かな、た……」

「なあに」

接吻の間隙を縫って、一旦彼方から離れた。色っぽい彼方。当然のことながら服を身に纏ってはいない。完全なる裸身。女神像のよ  
うな造形美だった。

こんな女をものにできるなら……と世間一般の男は考える。夢、  
希望。叶わぬ夢、希望。大体の男はそれを叶えることなく人生を終  
える。

一方で違和感。破綻している。不知火彼方は精神的に破綻してい  
る。退廃的で倒錯的で、破滅型の人間。一人の男性をずっと愛し続  
け、ほかのものには目もくれない。

そんなの異常だ。ありえない。精神構造からしてもはや末期。重  
症患者。

人間は欲深い生き物。だから一つのものに囚われることこそあれ  
ど、半永久的に囚われることはない。意志薄弱で常に自分が持つて  
いない何かに目移りする。

いつかは飽きる。どこかで失望して、己の幻想から目覚める。そ  
れは将来の夢でも恋愛関係でも発生すること。ほんの些細なことで  
失意に陥り、些事に翻弄される。今まで信じていたものが軽佻浮薄  
だと気付くやいなや、掌を返すように冷たく接する。

小さい嘘は大きな穴を生み、大きい嘘は小さい現実を埋める。取  
るに足らない価値観に取り付かれ、自縄自縛じじょうじゆわくの陥穽に嵌り、やがて  
信頼していたものがその実くだらないことに気付くのだ。

そうして人は幻滅する。その連続。人生、その連続。

くだらない。当たり前すぎてくだらない上、それをうまく飲み込  
めない奴がこの世には一杯いて、自分もまた例外ではないのだ。僕  
だって嘴くちばしの黄色い未熟者だった。

しかし。

ない。不知火彼方に失望なんぞない。ただ盲目に純粹に一人の人  
間を愛しているように見える。それは人間としての欠陥を示唆して

いるのではないか。

机の中を鑑みても、不知火彼方は本気なのだ。不知火彼方は本気で、それこそ言葉で表しようもないほど紅花襖を好いているのだ。たまりかねて自ら襲ってしまうほどに。

「そつ、その……明日にしようか。明日。それでいい？」

「やだ。今したい」

「わがまま言わない」

「……うう」

「いい？」

「……と言うことは、明日も来てくれるの？」

「……暇だったら、かな」

「時間作つて。無理やりにも。後、来てくれたらばふばふしてあげてもいいよ」

どこでその言葉を覚えた、とは聞かず、頭を撫でてやる。すると一変して、彼方はいじらしい子猫のような反応を見せるのだった。そのギャップ、ズレ。

背筋を寒くしながらも、「服、着よつか」と促す。彼方はいまだ一糸纏わぬ姿だった。そんなの恥ずかしくて目すら合わせられない。「照れてる」と僕に身を預けたまま、「かわいい」と言う彼方。さきほどの獣性はとくに失せ、じゆるじゆると楽しそうに涎を僕の体にまとわりつかせた。戯れるように僕の腕を噛む。ぎざぎと歯と歯をこすり合わせ、僕の腕に思いつきり歯形をつけた。

彼方の愛情表現は変態っぽい節がある。綺麗な子なのに行動がどうしたって逸脱しているから、筆舌に尽くしがたい。どうしてこのような子が生まれたのか。聡明そうな容姿とは釣り合わない性格。それも多分、僕限定でそうなるのだ。

僕にだけ素をさらす。

それがすごく魅力的に思えてきて、それも悪くないと思えてきて、そんな僕はやっぱりバカだった。昨夜の怖い思いは棚上げ。僕の必殺技、棚上げ。ここでも本領発揮か。

「彼方の方がずっとかわいいよ」

僕はかねがね包容力のある男になりたいと思っていた。

それを今、実現する時か。

彼方はぱーっと花開いたように笑った。爾後、あわわわとゆだつた。たこのように頬を紅潮させた。露出した素肌も端まで熱を帯びているのが分かった。

瑣末な褒め言葉でも、照れる。昨日あれだけ馬脚を現したのに、こんな軽微な言葉でも嬉しそうに応えてくれる。

僕の言葉に魔力があるわけではなく、単に受け手の思いの丈が強いだけ。僕自身に特筆すべき長所も強みもない。平々凡々。何も無い。

何もないが、僕には明眸皓齒めいぼうこうしな彼女がいる。僕の身の丈にあわぬ白い花が匂い立つような恋人が不釣り合いにもいたりする。

その子は少々みょうちきりんだけど、根は多分いい子なのだ。それも綺麗で一途。考えてみれば男の理想を体現したような女性。もしかして僕は幸せ者だったりして……。

そうポジティブに考えて、彼女の異常を相殺。それほど変なことでもない、と自分を騙して、むしろ彼女はすばらしい人だと思いつむ。そんな彼女を受け止められる自分もすごい奴なのだと、無意識の自己満足に浸るのだった。

紛れもない錯覚であったが、別にいいような気がした。人間、どこかで錯覚している。罪とか罰とか覚悟とか、そんなファンタジーなものでそれっぽい贖罪をしているだけ。

架空のもの、仮想のもの、そう言ったものでなんとなく反省して次に繋げようとか思つて、過去の失敗を忘れる。教訓にしようとか訓戒にしようとか、それで決着をつけて、結局は等閑に付す。ほとんどの人間が過去の蹉跌さくつを踏み、遺漏、不始末を繰り返すのだ。

自分を卑下しているわけではないが、世界はそういう風にできていて、としか言いようがない。元から世界はそういう風に来上がつていて、すでに完成している。

未来は未定だとか、運命は自分で切り開くだとか、そんな名言が今もこの世に残っている。その言葉はみなに希望を与え、明日への活路を見出す。けれど見たことがない。そんなかつこいい人間、ついに見たことがない。

それは一重に、僕の人生経験が貧弱であるからだと思う。思うが、どうもそうとは思えない自分がある。いぶかしげに首をひねる自分がある。

未来とか運命とか定まってはいいない。少なくとも定まっていたらイヤだし、生きる気力が湧かない。だから確定はしていないのだから。

ただ、自らの力でこれから先のことを決められる人間は数が絞られてくる。いることはいるが、その存在は極めて希少、稀有。でなければ、人々の不平、不満は取り除かれるだろう。逆説的に言えば、これは自分の将来をうまくコントロールできない、ということになるんじゃないかな。

鳥の囀る音が聞こえてきた。

納得したのか渋々と言った風に服を着る彼方。レースのついた下着をつけ、着物の袖を通す仕草は蠱惑的こわくだった。

「下」と階下を指差す彼方。リビングに行け、と言うことか。「朝ご飯」

「……いただいていいの？」

「勿論」

それだけ言つて、彼方はさつさと階段を下りてしまった。いいところで中断されたのが嫌だったのか、プンプンと怒っているようだった。

しかたなく階段を下りた。香ばしい匂いが鼻腔をくすぐる。

僕は菌形のついた腕を桜サンに指摘されて苦笑しながらも、朝食のご相伴を預かった。

何かを忘れていているような気もしたが、やっぱり棚上げにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5175x/>

---

いつかの君とどこかの僕

2011年12月30日03時11分発行